

2025 大阪・関西万博を契機とした地方公共団体による
地域活性化に資する
中東、中南米、大洋州島嶼地域との国際交流調査
及び令和6年能登半島地震被災地域に資する国際交流調査
調査報告書

令和8年2月

内閣官房 国際博覧会推進本部事務局 委託事業

近畿日本ツーリスト株式会社

目次

第1章 事業概要.....	3
1-1 事業の背景.....	3
1-2 事業の目的.....	3
1-3 令和7年度事業の概要	4
1-4 事業対象団体一覧.....	4
第2章 自治体別プロジェクトの概要と成果一覧.....	6
第3章 個別プロジェクトの実施内容.....	26
3-1 青森県三戸町×ヨルダン.....	26
3-2 群馬県富岡市 × ミクロネシア.....	36
3-3 群馬県甘楽町×ミクロネシア	44
3-4 千葉県横芝光町 × ベリーズ	52
3-5 東京都渋谷区 × トルコ.....	62
3-6 東京都渋谷区 × ペルー.....	69
3-7 富山県南砺市 × トリニダード・トバゴ.....	75
3-8 石川県志賀町 × アゼルバイジャン	79
3-9 福井県 × ブラジル.....	87
3-10 三重県×ブラジル.....	98
3-11 滋賀県 × ブラジル	103
3-12 京都府 × チリ.....	118
3-13 大阪府 × アラブ首長国連邦 (UAE)	127
3-14 大阪府大阪市 (三軒家東小学校) × ブラジル.....	132
3-15 大阪市 (西淀川区) × ペルー	145
3-16 大阪府大阪市 (上福島小学校) × ボリビア	153
3-17 大阪府大阪市 (加美北小学校) × パプアニューギニア	168
3-18 大阪府堺市 × ヨルダン	187
3-19 兵庫県西宮市 × ソロモン諸島.....	197
3-20 和歌山県有田市 × アラブ首長国連邦.....	202
3-21 鳥取県 × ジャマイカ.....	223
3-22 広島県北広島町 × ドミニカ共和国.....	229
3-23 徳島県上板町 × ヨルダン	238

3-24	香川県 × ブラジル	251
3-25	香川県 × パラオ	258
3-26	福岡県×フィジー	267
3-27	福岡県福岡市 × アラブ首長国連邦、カタール、サウジアラビア	280
3-28	佐賀県佐賀市× トンガ	287
3-29	大分県竹田市×パラグアイ	312
第4章	成果の分析	316
4-1	成果の5分類	316
4-1-1	愛着と誇りと形成	317
4-1-2	教育・人材育成	318
4-1-3	新たな広がり	319
4-1-4	認知向上・理解促進	320
4-1-5	国際交流の基盤構築	321
4-2	成功要因	322
4-3	今後に向けた課題	324
4-4	今後の展望	325
第5章	アンケート結果	327
5-1	回答から得られた主な傾向	327
5-2	アンケート結果一覧	328
第6章	成果発信・広報の取組	337
6-1	自治体通信を活用した成果発信	337
6-1-1	実施概要	337
6-1-2	目的（狙い）	337
6-1-3	掲載内容	338
6-1-4	万博国際交流プログラム「成果報告会」	339
6-1-5	実施概要	339
6-1-6	目的（狙い）	339
6-1-7	実施内容	339
第7章	まとめ（総括）	341

*第4章、第6章、第7章の記述は、アフリカ地域との交流（別事業）と同じ内容。

第1章 事業概要

1-1 事業の背景

2025年国際博覧会（以下、「大阪・関西万博」という。）は、20年ぶりに我が国で開催される国際博覧会である。諸外国の関心も高く、令和6年12月27日時点で158の国・地域の参加表明が得られている。

内閣官房国際博覧会推進本部事務局（以下「主管事務局」という。）では、万博国際交流プログラムを推進しており、令和5年度補正事業において、大阪・関西万博の契機とした地方公共団体による地域活性化に資する国際交流の取組みに係る調査を実施。同調査は、令和4年度補正予算による「モデル事業」において、欧米やアジア地域以外との交流に課題があることを受けて、万博会期前において、①アフリカ地域、②中東地域、③中南米地域、④大洋州島嶼国地域との交流を促進する仕組みを調査するものである。

今般、令和6年度補正事業においては、令和5年度補正事業の枠組みを継続し、万博会期中及び万博会期後という各国の日本への期待が高まる時期において、①アフリカ地域、②中東地域、③中南米地域、④大洋州島嶼国地域といった日本の自治体と姉妹都市提携数や交流実績の少ない地域との交流をどのように構築することが、万博のレガシーとして長期に継続し得る国際交流の取組の創出に寄与するかを調査するものである。

なお、万博において、全国のこどもが万博を訪れ、未来社会を体験して将来に希望を感じてもらうことが万博の最大の「成功」であり、こどもが能動的に万博に関わり、万博を感じられる方策として、万博参加国と日本の自治体との国際交流をこどもが体験することは最も効果的な方策の1つである。このため、大阪・関西万博のテーマやSDGs等に関連した交流に加え、交流対象地域とのこどもを中心とした交流についても、こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮という観点からどのような交流がより効果的であるか調査するものとする。

なお、令和5年度補正事業において調査対象とした令和6年能登半島地震により被災した自治体についても、被災地域の現状を踏まえ、同事業における枠組みを継続し、本事業において調査対象とすることとする。

1-2 事業の目的

本事業では、大阪・関西万博で自治体を実施する国際交流事業（会期中の交流や会期後のレガシー形成等）に向けて、万博会場内や自治体において各国の万博関係者等を受け入れて国際交流事業を実施するために、自治体からの事業申請内容に関する情報収集とそれを踏まえた自治体の選定、事前の調査・交渉、相手国関係者を万博会場内や自治体に招へいしての実地調査を行う。なお、本事業は、中東、中南米、大洋州

島嶼地域の万博参加国・地域を相手国とするもの及び令和6年能登半島地震被災地域の自治体に係る調査を行うもの。

1-3 令和7年度事業の概要

本事業では、万博国際交流プログラムに登録する自治体の中から調査対象自治体を募集し、選定委員会による選定を行った上で、各自治体が策定する交流計画に基づく取組に対し、計画段階から実施、成果の取りまとめに至るまで一貫した伴走支援を行った。

具体的には、万博会期中の万博会場内外における交流事業および会期後の交流に関する進捗管理を行うとともに、自治体からの求めに応じて情報収集や各種調整の支援を実施した。

これらの取組を通じて得られた成果や課題、実施プロセスを体系的に整理し、他自治体への横展開が可能なモデルとしてとりまとめることで、万博を一過性のイベントにとどめることなく、地域に根付く国際交流のレガシー創出につなげることを目指した。

1-4 事業対象団体一覧

NO.	自治体名	交流相手国	採択
1	青森県三戸町	ヨルダン	二次
2	群馬県富岡市	ミクロネシア	一次
3	群馬県甘楽町	ミクロネシア	一次
4	千葉県横芝光町	ベリーズ	四次
5	東京都渋谷区	トルコ	一次
6	東京都渋谷区	ペルー	一次
7	富山県南砺市	トリニダード・トバゴ	三次
8	石川県志賀町	アゼルバイジャン	一次
9	福井県	ブラジル	一次
10	三重県	ブラジル	二次
11	滋賀県	ブラジル	一次
12	京都府	チリ	一次
13	大阪府	アラブ首長国連邦	一次

14	大阪府大阪市	ブラジル	一次
15	大阪府大阪市	ペルー	一次
16	大阪府大阪市	ボリビア	一次
17	大阪府大阪市	パプアニューギニア	一次
18	大阪府堺市	ヨルダン	二次
19	兵庫県西宮市	ソロモン諸島	二次
20	和歌山県有田市	アラブ首長国連邦	二次
21	鳥取県	ジャマイカ	一次
22	広島県北広島町	ドミニカ共和国	一次
23	徳島県上板町	ヨルダン	一次
24	香川県	ブラジル	二次
25	香川県	パラオ	一次
26	福岡県	フィジー	二次
27	福岡県福岡市	アラブ首長国連邦・カタール・サウジアラビア	二次
28	佐賀県佐賀市	トンガ	一次
29	大分県竹田市	パラグアイ	一次

第2章 自治体別プロジェクトの概要と成果一覧

自治体	相手国	会場・場所	取組・イベント・交流事業概要
青森県三戸町	ヨルダン	EXPO ナショナルデーホール「レイガールデン」ヨルダンパビリオン	5月7日：ヨルダンのナショナルデーに自治体職員がヨルダンパビリオン等を訪れ、相手国関係者と今後の交流事業の内容等について話し合う。
		EXPO ヨルダンパビリオン	6月9日：自治体職員とヨルダン館とで今後の交流にかかる事前打ち合わせを行う
		EXPO ヨルダンパビリオン	7月2日：町長、自治体職員（計3名）がヨルダンパビリオンを訪問 中学生万博訪問の下打合を行う
		EXPO ヨルダンパビリオン	7月23日：三戸学園および三戸町の中学生19名（教員含む随員6名）がヨルダン館に訪問。双方（ヨルダン・中学生）からプレゼンを行った
		EXPO ヨルダンパビリオン	9月12日：町内の高校生を募集し、8名の高校生（教員を含む随員10名）がヨルダン館に訪問。双方（ヨルダン・高校生）からプレゼンを行った。
		EXPO ヨルダンパビリオン	10月6日：町内の市民を募集し、14名の万博派遣団を編成・派遣。 ヨルダンパビリオンを訪問しヨルダン側のスタッフからの説明を受ける
		三戸町祥鷹閣	クラシックライブにてヨルダン国歌などを演奏。68名の町民が参加
		ヨルダン派遣	12月4日～17日：三戸町民がヨルダン訪問し、今後の交流に向け現地とのネットワークを構築する。 子どもたちと国際交流、シーファ万博政府代表代行・ヨルダン政府観光局との打ち合わせ、在ヨルダン日本国大使館との打ち合わせ、帰国後に三戸町で開催予定の万博&ヨルダン訪問報告会用の写真撮影を行った
【成果】 三戸町とヨルダンとの交流は、従来の姉妹都市に限定しない新たな国際接点を創出し、「国際性豊かな人づくり」を具体化した点に大きな成果がある。町長を含む延べ65名が万博ヨルダン館を訪問し、中高生・町民たちはヨルダン政府代表代行の講話やパビリオン体験を通じて中東への先入観を刷新し、将来像や進路意識を広げた。さらに、町内でのクラシックライブ開催や砂漠の砂展示、ヨルダン出張・ヨルダン大使館との連携へと展開し、学校間連携やふるさと納税の創設など次へのステップへと推進した。横浜園芸博への参加やオンライン交流の実施も視野に、持続的な国際交流基盤を形成した。			
群馬県富岡市	ミクロネシア	富岡市	4月～7月：本市周辺地域では、だるまの生産が盛んであり、地域の伝統文化として根付いている。この文化に触れていただくことを目的として、本邦及び相手国の国旗入りだるまを製作し、相手国の交流先各機関へ提供する。
		富岡市	4月～8月：広く市民に対し、相手国の風土や当市国際交流協会等との交流の歴史を認知してもらうことを目的として、相手国を紹介するパネルを製作し、各種イベントにおいて掲示するもの。

		富岡市役所前 しるくる広場	<p>6月1日：市民祭りにミクロネシア関係者を招待。 ミクロネシア連邦特命全権大使ジョン・フリッツ氏、及びミクロネシア連邦大使館顧問七瀬氏によるウクレレとギター、歌の披露が行われ、小学生のダンスチームが発表を行い、相手国関係者と子どもたちの交流を図った。 ミクロネシア紹介ブースでは、ビデオによる紹介や現地物産品の販売、万博会場から招待した現地スタッフによるレイの作り方の実演などが行われた。</p>
		EXPO ナショナルデーホール「レイガーデン」 ミクロネシアブース	<p>7月31日：市をはじめとする代表团（11名）がミクロネシア・ナショナルデーの公式式典に参加。また、相手国主催で大阪市内のホテルにて開催されるレセプションに参加。市長及び国際交流協会等の関係者が出席し、相手国大統領をはじめとする政府関係者との交流を図った。</p>
		富岡市	<p>9月～12月：本市の歴史や特色を紹介する動画を制作し、相手国大使館及び本国関係機関に提供することで、本市に対する理解を深めていただく。</p>
		【成果】 富岡市とミクロネシアとの交流は、30年にわたる民間交流とホストタウンの実績を基盤に、万博を契機として相互理解を一層深化させた点に大きな成果がある。国旗だるまの制作・寄贈や紹介パネル展示を通じて地域伝統文化を発信するとともに、交流イベントでは駐日大使らを迎え市民、とりわけ子どもたちが直接異文化に触れる機会を創出。万博ナショナルデーには市長が出席し、ミクロネシア大統領らと交流するなど、信頼関係を強化した。さらに、紹介動画の制作や学校給食での関連メニュー継続により、万博会期後も多文化共生と継続的交流を支える基盤を形成した。	
群馬県甘楽町	ミクロネシア	群馬県甘楽町	<p>6月1日：富岡町の市民祭りに参加 フリッツ大使が富岡市国際交流まつりに参加した後、町長と歓談した。大使と町長の間で万博のイベントなどを通じて、ミクロネシアと甘楽町との交流を富岡市とも連携することになる</p>
		EXPO ナショナルデーホール「レイガーデン」 ミクロネシアブース	<p>7月30日：ミクロネシア連邦・日本ビジネスフォーラム（関西経理専門学校）への出席。 7月31日：ミクロネシア・ナショナルデーの公式式典では、「サカウの儀式」、「ウロンの儀式」が披露され、シミナ・大統領のスピーチ、伊東万博担当大臣の挨拶があり、富岡市長他訪問団と挨拶をした。本イベントの参加を通じ、ミクロネシアの豊かな自然と独自の文化及び日本との関係についての理解を深めた。</p>
		EXPO 会場	<p>9月3日：ミクロネシア連邦事務局クリス氏、万博協会ミクロネシア担当佐藤氏と万博会場にて打合せを行い、会場の確認、イベントタイトルと内容、役割分担、設備の準備、告知の方法など、具体的な確認を行った。</p>
		EXPO 会場 ミクロネシアブース	<p>9月13日：町長らはイベント前日に万博会場を訪問し、相手国関係者と打合せを実施。 在京ミクロネシア大使館1等書記官の司会進行のもと、ミクロネシア万博委員会プログラムマネージャーのクリストファー氏、森平町長の挨拶に続いて、ミクロネシアの国の魅力と伝統祭事サカウ（イベントの前に胡椒の木の根から作った飲み物を参加者で飲む儀式）と、甘楽町の歴史、文化、伝統行事（武者行列で神前に献杯する様子を含む）を紹介する動画を上映した。その後、参加者との交流の際には地酒や試食会を開催した。</p>

		<p>【成果】甘楽町とミクロネシアとの交流は、直接的な対話による国際交流の可能性を広げた点に大きな成果がある。ミクロネシア駐日大使の来町やミクロネシア大統領との表敬、万博ナショナルデーやビジネスフォーラムへの参加を通じて、首長・議会・商工会・国際交流団体が一体となった交流体制を構築。万博会場内で開催した「祭事交流」イベントでは、双方の伝統儀式の共通性を発信し、相互理解を深化させた。さらに、地元企業の新商品が大使館から発注されるなど経済的波及も生まれ、展示物譲渡を含め万博会期後も継続可能な交流基盤を確立した。</p>	
千葉県横芝光町	ベリーズ	EXPO ベリーズブース	8月3日：町長と横芝光町から選抜された職員2名がベリーズの公式式典に参列し、ベリーズの首相と交流。10月の交流イベントの案内。
		横芝光町町民会館・ 横芝光町ヨリドコロ	10月5日：市民向けの交流イベントを開催。」 ①11:00-12:30 ベリーズ料理「エスカパーチェ」を一緒に作り食すプログラム。 ②13:00-15:00 ベリーズパビリオンスタッフの2名が参加者へスクリーンを用い、「ベリーズ」と「万博での展示」についてプレゼンテーションを行い、終盤は午前中に調理したエスカパーチェを参加者で食す。
		町民会館大ホール	12月2日：「ベリーズってどんな国」イベントを開催。留学生と元JICA隊員が子供達にベリーズを紹介する。ベリーズ人留学生による自己紹介から大学での研究内容について発表。催し物「インタビューゲーム」による英会話の実施。
		【成果】 横芝光町とベリーズとの交流は、東京2020大会のホストタウンの実績を基盤に、万博を契機として食・教育・人的交流へと多層的に発展させた点に大きな成果がある。ナショナルデーでのベリーズ首相と町長の直接交流により関係強化の土台を築いた。その後、料理体験を通じた文化交流や留学生との学生交流イベントを実施。英語による「インタビューゲーム」などを通じて、生の英語と異文化に触れる機会を創出した。さらに、JICAや在ベリーズ日本国大使館との連携を強化し、将来的なスタディツアー構想へと展開。万博を契機とした一過性の交流に終わらせず、教育・多文化共生を軸とした継続的交流基盤を確立した。	
東京都渋谷区	ペルー	EXPO ナショナルデーホール「レイガールーデン」	8月8日：ペルー・ナショナルデー前日に渋谷区内の大学生等がペルーパビリオンを訪問し、パビリオン関係者と打合せを行う。 8月9日：ペルー・ナショナルデー当日は渋谷区内の大学生等が公式式典等の運営サポートを行う。
		ペルー訪問	9月10日～9月19日：区内在住大学生4名がペルー訪問・姉妹都市であるミラフローレス区等を訪問し、青少年との交流や現地文化を学ぶ派遣プログラムを実施。
		宮下公園	10月25日～26日：ペルー料理や音楽ライブや文化など、東京(渋谷区)にいながらペルーの魅力を感じられるイベント。本事業の取り組みの中でペルー大使館との交流が深まり宮下公園にイベントを誘致した。
		①渋谷区区民広場 ②広尾小学校 ③渋谷ハチコウ大学	①11月1日、②11月18日、③12月8日 ペルーに派遣された学生による成果報告を行った（①一般向け、②小学生向けクイズ形式等、③高齢者向け） 発表の成果はペルー大使館にも共有された

		<p>【成果】 渋谷区とペルー（姉妹都市ミラフローレス区）との交流は、学生派遣を通じて多角的なテーマ（歴史・文化保全、スタートアップ、JICA・ODA、移民）を現地で実地に学び、次世代のグローバル人材の育成を目指した。大使館・JICA・日系人協会（APJ）・大学・区役所訪問や、遺跡・都市インフラ視察、スポーツ交流を通じて相互理解を深化。帰国後は区民向け報告会や小学校特別授業を実施し、学びを地域へ還元した。姉妹都市関係を基盤に、教育・経済・文化を横断する持続的交流の枠組みを強化した。</p>
東京都渋谷区	トルコ	渋谷区図書館 4月11日～7月9日：開催展示テーマ：2025年図書館フェアテーマ：いのちを知る『トルコとペルーを紹介！』 万博に参加する国の中でも、渋谷区に大使館のあるトルコをペルーとともに紹介し、関連資料も展示。
		トルコ訪問 8月16日～8月23日：渋谷区内高校生をトルコに派遣。現地の各種機関を訪問し交流した。＜主な交流内容＞日本とトルコの共通課題である「防災」をテーマに高校生が土日基金（JICA関連機関）にてプレゼン発表を実施・渋谷区と友好都市協定を締結しているウスキュダル区役所を訪問し防災の取組について傾聴。
		EXPO トルコパビリオン 9月7日：高校生4名+職員2名のほか、現地で渋谷区長（+随行2名）が合流し、計9名でトルコパビリオンとの交流を行う。訪問メンバーは8月のトルコ共和国学生派遣事業に応募した渋谷区に在住の高校生をスカウトした。トルコパビリオンでの交流は、文化や価値観の違いを超えて共通点や新たな視点を見出し、国際理解を深める貴重な体験となった。
		渋谷区スポーツセンター 10月5日：体験講座「世界最強！？伝統のトルコ弓術を体験しよう！」を開催 渋谷区在住・在学の小中学生を対象としたトルコ弓道教室。トルコ弓道の歴史や特徴についてレクチャーを受けながら弓道体験を行い、トルコの歴史や文化を体を動かしながら体験することができた。
		①渋谷ハチコウ大学 ②代々木公園イベント広場 ①9月21日、②11月1日及び2日 トルコに派遣された学生による成果報告を行った。 発表の成果はトルコ大使館にも共有された。
		<p>【成果】 渋谷区の学生派遣事業では、参加した高校生が防災という共通課題を通じて、自らの考えを国際的な場で発信する経験を得た。異なる文化や価値観の中で対話を行ったことにより、多角的な視点や社会課題への当事者意識が育まれた。また、帰国後の報告会や区民向け講座を通じて、学びが地域へ還元され、世代を超えた国際理解の共有が進んだ。交流が人材育成と地域学習を結びつける好循環を生んでいる。</p>
富山県南砺市	トリニダード・トバゴ	トリニダード・トバゴより招請 8月9日～13日：万博会場で「コキリコ」との共演のためトリニダード・トバゴより2名を招請。
		EXPO会場（クラゲ館） 8月11日：五箇山地域の小中がコキリコを披露。相手国のミュージシャンと共演。 当該イベントに市長も参加（小学生（4年生以上）と中学生が出演（1回6人～8人/10分～15分） 夕刻からは五箇山のこきりこ×トリニダード・トバゴのスチールパンを利用したKURAGE Bandのセッション（30～40分間）を行った。

		南砺市内の小学校体育館	中島さち子テーマ事業プロデューサーおよび KURAGE Band が、南砺市の小学校を訪問し、トリニダード・トバゴや世界のさまざまな文化の魅力を音楽や踊りを通じて体験的に伝える。五箇山の小中高生が集まった。
			<p>【成果】</p> <p>南砺市とトリニダード・トバゴとの交流は、地域の伝統芸能「こきりこ」とカリブのスティールパンを融合させ、万博を舞台に世代・国境を超えた音楽共創を実現した点に大きな成果がある。万博会場での輪踊りワークショップには国内外から多くの参加者が集い、子どもたちは自らの郷土芸能が世界と響き合う経験を通じてシビックプライドを醸成。さらに、学校訪問では、多様な国の楽器体験と万博の振り返り講義を通じて、多文化共生と相互尊重の価値を学んだ。従来の音楽交流を市全体へ拡張し、フェスティバルを核とした継続的な人的ネットワークと交流基盤の強化につなげた。</p>
石川県志賀町	アゼルバイジャン	EXPO 会場 FLE ステージ	<p>6月5日：ナショナルデーのお祝いに志賀町「天祐太鼓」の19名が太鼓を披露した</p> <p>13：30～太鼓演奏</p> <p>アゼルバイジャン関係者ご挨拶 記念品贈呈</p> <p>志賀町長 稲岡 健太郎 挨拶</p> <p>太鼓演奏</p>
		志賀町	<p>8月22日～26日：アゼルバイジャンの生徒を志賀町に招待・交流主体 県立志賀高校×国立リセ世界学校・招請者 国立リセ世界学校の生徒2名と教員1名アゼルバイジャンの生徒たちがホームステイや地元の祭りへの参加、浴衣の着付け体験や貝細工制作などをとおして、日本の文化について学ぶ貴重な経験をした。</p>
		アゼルバイジャン訪問	<p>12月14日～20日：志賀高校生2名、教員1名、自治体職員1名がアゼルバイジャンに訪問</p> <ul style="list-style-type: none"> ・県立志賀高校生 2名（アゼルバイジャンでホームステイ体験） ・国立リセ世界学校の生徒と交流 ・在アゼルバイジャン日本大使館を訪問し、特命全権大使 渡辺大使に表敬 ・バクー市ハタイ地区庁舎を訪問し、副区長と対談を実施 ・バクー世界学校の生徒の家庭でホームステイを経験し、異文化交流を深めた
			<p>【成果】</p> <p>志賀町とアゼルバイジャンとの交流は、東京2020大会を契機に築いた人的ネットワークを基盤に、万博を通じて教育を中核とした持続的な国際連携へと発展させた点に大きな成果がある。万博ナショナルデーでは無形文化財「志賀の太鼓」を披露し、震災復興に向けた地域の元気を国内外に発信。さらに志賀高校では「国際交流部」が新設され、バクー世界学校とのオンライン交流や相互ホームステイを本格化させる体制を構築した。学校組織として国際交流を担う仕組みが整ったことは、単発事業にとどまらない制度的レガシーであり、次世代の国際人材育成と町の持続可能性強化につながる成果を残した。</p>
福井県	ブラジル	EXPO ホール 「シャインハット」の前	<p>7月15日～20日：ブラジルより福井村太鼓部（飛翔）6名を招請</p> <p>7月16日：ブラジル福井村の太鼓団体が万博で演奏。福井県が開催する恐竜王国福井 DAY に合わせて実施。</p> <p>シャインハットの前で招へいしたブラジルの太鼓部の若者「飛翔」メンバーが演舞した</p> <p>当日は2回公演有（午前、午後）各回10分程度</p>

	福井県内	7月17日～20日県立福井大学の学生と県内を周遊観光 坂井市立高椋小学校を訪問し、ブラジルの福井村日本語学校から絵を贈呈する。 高椋小学校からは歌のプレゼントを行った 小学生（教職員含む）430名	
	福井県立大学	7月18日：福井村太鼓部「飛翔」の6名が福井県立大学の学長への表敬訪問、農業に関する研究室訪問、ディスカッションを行った。	
	坂井市立高椋小学校	福井県内の小学生とブラジル福井村の日本語学校生が万博を共通のテーマとした作品を制作、次年度にお互いの学校で展示をするための準備を行う ブラジル側製作の絵画は太鼓演奏メンバーが持参、7/18に小学校訪問時に手渡した。福井県側製作の絵画は3月にブラジル渡航予定者に依頼して届ける予定。 坂井市立高椋小学校の全児童からの歌のプレゼント	
	福井県内（環境に関する施設）	11月8日～9日：西川シンチア愛（駐日ブラジル大使館：経済部補佐・ブラジル福井村出身）、富永アネッチ宏美（肩書：総務部補佐）の2名が、ブラジル館のテーマ「環境」と関係する福井県内の関係施設へ訪問 11月8日 金津創作の森美術館の長坂真護展、ものづくり交流拠点トンカンテラス 11月9日 電池推進遊覧船、レインボーライン、年縞博物館、道の駅三方五湖	
	<p>【成果】 福井県とブラジルとの交流は、移住の歴史を礎とする「福井村」との絆を万博を通じて次世代へ継承し、多文化共生社会の実現に向けた新たな交流モデルを構築した点に大きな成果がある。万博会場では福井村太鼓部「飛翔」が演奏を披露し、文化的アイデンティティと両地域の結びつきを国内外へ発信。あわせて、福井県立大学との学術交流や小学校との心の交流を展開し、児童・学生が直接対話を通じて異文化理解を深めた。さらに、福井県立大学と福井村との包括連携協定締結により、教育・研究分野での継続的連携の基盤を整備。若い世代を中心とした人的ネットワークを強化し、歴史的関係を未来へつなぐレガシーを創出した。</p>		
三重県	ブラジル	ブラジル人学校（イーエーエス鈴鹿校）	8月5日：県万博担当者及び日本国際博覧会協会職員が訪問し、訪問前の事前学習として万博に関する講演を実施した
		EXPO会場（三重県ブース）及びブラジルパビリオン	8月8日：県内ブラジル人学校(生徒10名+引率1名+通訳1名)がブラジルパビリオンを訪問し交流。関西パビリオン(三重県ブース)を訪問。・ブラジルパビリオンのスタッフが親身になって対応いただき、熱のこもった交流となった。・ブラジルパビリオンでの交流は通訳を介さずポルトガル語で行われた。
		ブラジル人学校（イーエーエス鈴鹿校）	10月28日：県の万博担当者職員及び博覧会協会職員が県内ブラジル人学校を訪問し、EXPO訪問事後学習を行った
		<p>【成果】 三重県とブラジルとの交流は、県内に多く暮らすブラジル人住民、とりわけ伯人学校イーエーエス鈴鹿の生徒を対象に、万博を通じて「母国」と「居住地」の双方への理解を深める取組を行った。事前・事後学習を含む体系的な取組により、ブラジルパビリオンでは母国の歴史や理念を再認識し、関西パビリオン三重県ブースでは地域の魅力を学ぶ機会を創出。生徒のルーツ意識と三重県へ</p>	

		の愛着を同時に高め、多文化共生の担い手育成につながった。さらに、在名古屋ブラジル総領事館や学校との新たな連携基盤を築くことができた。
滋賀県	ブラジル	ブラジルパビリオン 9月26日：ブラジルパビリオンで滋賀県と姉妹都市のリオグランデドスール（RS）州との交流紹介およびマテ茶と近江の茶の飲み比べイベントを実施。 ・パネル展示およびリーフレット配布等により、RS州の概要や両県州の姉妹交流の歴史を紹介 ・多目的ホール内の大型モニターで両県州を紹介するビデオを上映 ・アンケート回答者にRS州のマテ茶と近江の茶を配布
		ブラジル訪問 11月11日～11月17日：滋賀県・RS州姉妹県州協定締結45周年記念交流団（团长：三日月大造知事）をブラジル（サンパウロ・RS州）に派遣。 ・知事、県議会議長、ブラジルに関心を持つ県内企業や滋賀公園（※）の整備に携わった関係者など約30名がサンパウロ市およびRS州を訪問 ・2010年11月以来となる県交流団を同州に派遣し、現地での対面での県民等交流を再開させることで、未来に向けた新たな友好交流関係を構築 ※1983年に滋賀県がRS州の州都ポルトアレグレ市に寄贈した日本庭園
		【成果】 滋賀県とブラジル（RS州）との交流は、万博を契機に知事を团长とする派遣団を同州へ派遣し、州政府や関係機関との直接対話を通じて姉妹提携の実効性を高めた点に大きな成果がある。対面での協議により、これまで培ってきた信頼関係を再確認するとともに、経済・文化・教育分野における今後の具体的連携の方向性を共有した。万博ブラジルパビリオンでの展示発信とあわせ、長年の友好関係を次の段階へ進めるためのトップレベルの関係強化を実現した
京都府	チリ	京都府立医科大学図書館1階 コトスクエア 7月6日：府民公開講座 大腸がんの予防・検診・内視鏡診療に関する最新情報や機器の展示と共に、海外への発信の取組紹介として、チリでの大腸がん検診の導入や内視鏡技術普及の様子をイベントで紹介
		EXPO 京都ブース チリパビリオン 9月8日～14日：関西パビリオン京都ゾーンにて京都府立医科大学医師内視鏡等の展示と体験を実施 ・京都府とチリの国際交流紹介動画、パネル展示 ・京都府立大学とチリの医療（大腸がん検査）を通じた国際交流紹介と大腸がん検査に使用する機器（内視鏡等）展示と体験 ・ミニ講演京都ゾーン9/8～14の展示テーマ「いのち」およびサブテーマ「生と死と向き合っ」に関連した内容 ・京都府の最先端医療技術（大腸がん検査）で医療を通じたチリとの交流を紹介 ・チリおよびチリパビリオンについても紹介した
		チリ訪問 12月14日～21日：京都府立医科大学の医師2名をチリに派遣 チリ、サンティアゴを訪問し万博後の継続する交流のためのイベントを開催。ロスアンデス大学での学生や市民への万博の振り返りと大腸癌についての公開講義、ロスアンデス大学附属病院および関連施設での内視鏡技術の教育も実施。

		<p>【成果】 京都府（京都府立医科大学）とチリ・ロスアンデス大学との交流は、万博を契機に医療分野を核とした高度で実践的な国際連携を深化させた点に大きな成果がある。府民公開講座や万博京都ブースでの展示を通じ、日本とチリにおける大腸癌の現状や検診の重要性、最新 AI 内視鏡技術を広く発信。さらに、チリ医師の招へいおよび現地訪問により、技術指導や保健省との協議を実施し、チリにおける大腸癌検診導入に向けた具体的連携を強化した。万博を媒介に学術協定を実効性ある医療協力へ発展させ、継続的な医師・学生交流を実現した。</p>	
大阪府	アラブ首長国連邦	<p>咲洲庁舎 水都国際中学校・高校 大手前庁舎</p>	<p>5/29 咲洲庁舎：府スマートシティ戦略部とのスマートシティ実現のための取組に関する意見交換 5/29 水都国際中学校・高校：国際バカロレア教育の視察 5/30 大手前庁舎：府知事への表敬訪問対応、意見交換</p>
		<p>大手前庁舎 咲洲庁舎 EXPO UAE パビリオン</p>	<p>10/3 にドバイ政庁マルワン・アハマド・ビン・ガリタ長官率いる代表団が来阪/万博会場内 UAE パビリオンでの意見交換含め、大阪府の複数部局との意見交換を実施</p>
		<p>駐日 UAE 大使館 在 UAE 日本大使館</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2025 年 11 月 18 日に大阪府国際交流監が駐日 UAE 大使館を訪問し、今後の UAE との教育交流について担当者と意見交換 ・2025 年 12 月 8 日に大阪府副知事が在 UAE 日本大使館を訪問し、今後の UAE との交流について大使と幅広く意見交換
		<p>【成果】 大阪府とドバイの交流は、スマートシティや国際教育といった政策分野における相互理解を促進させた。訪問団対応を通じて、行政トップや教育関係者が直接対話を重ねたことで、都市課題や教育に関する課題認識が共有された。また、府内の生徒にとっては、国際交流の機会となった。継続的な国際交流に向けた信頼関係が構築された点が大きな成果である。</p>	
大阪府大阪市	ブラジル	<p>EXPO ブラジルパビリオン</p>	<p>5 月 12 日：5 年生、6 年生が万博へ訪問。学校行事として万博訪問は実施済。 全校児童は大阪・関西万博を訪問し、2 年生から 6 年生においては、ブラジルパビリオンを訪問し、パビリオン担当者による解説を受けながら、ブラジルの豊かな自然や多様な文化、最新技術を紹介する展示を実際に自分の目で確かめた</p>
		<p>三軒家東小学校</p>	<p>11 月 22 日：学校創立 150 周年式典において、ブラジルの関係者から学んだ歌、ダンス、合奏を披露する。</p>
		<p>三軒家東小学校</p>	<p>11 月 28 日：ブラジルデイを開催 三軒家東小学校で開催するブラジルデーにアレグリア鈴鹿小学校の生徒の来校を招待。当日はスポーツ交流や音楽等の文化交流を予定。サッカー交流としてラモス瑠偉氏の招へい 本番に向け、中島洋二氏の統括のもと、9/5・10/7・10/29 にサンバレッスンも行われた。</p>

		<p>【成果】 大阪市立三軒家東小学校とブラジル連邦共和国との交流は、全校児童を対象に合唱・ダンス・合奏のサンバレッスンを体系的に実施し、万博訪問と連動させた体験型の国際理解教育を展開した点に大きな成果がある。ブラジル日本人学校（アレグリア校）を招請して開催された「ブラジルデイ」では、サッカー交流、ポルトガル語カルタ制作、相互クイズ、サンバ共演を通じて言語の壁を越えた協働と友情を育んだ。事後アンケートでは約8割の児童が今後もブラジルと関わりたいと回答するなど、将来の交流の懸け橋となる素地を形成した。</p>
大阪府 大阪市	ペルー	ベルー大使館訪問 7月30日：駐日ペルー大使館に訪問し、出来島商店街とペルー人の共生に関する動画を披露した。（渋谷区職員も同席）
		EXPO ナショナルデーホール「レイガーデン」 8月9日：万博会場でのペルー・ナショナルデーにおいて大阪市西淀川区内に在住の在日ペルー人によるダンス・歌謡の披露。 10:30～11:00 出来島商店会の多文化共生社会の取組動画上映（ナショナルデーホール）→ペルー・ナショナルデーの式典披露に向け出来島商店街のPR動画を作成 11:00～12:00 式典（大統領臨席 ナショナルデーホール） 15:00～15:30 パレード（西淀川区民及び在日ペルー人のダンスメンバー参加）
		西淀川区内の公民館 出来島第二公園 10月26日：キラ☆キラフェスティバルを開催 8月9日に実施した万博でのイベントのビデオ上映の他、ペルー人によるダンスの披露を行った。
		大阪駅前第2ビル1階 阪急グランドビル30階 12月14日：料理教室&国際交流イベントを実施 午前:在日ペルー大使館によるペルー料理の料理教室を開催 午後:旅行添乗員によりペルーの魅力紹介、大阪・関西万博での交流記録動画の上映、ペルーダンス、ペルー料理の提供、在日ペルー大使館の一等書記官から大使館・領事館の役割などの説明。
		<p>【成果】 大阪市西淀川区とペルーとの交流は、地域商店会を核とした多文化共生の実践を万博の国際舞台へと発展させた。ペルー・ナショナルデーでは「出来島商店会の多文化共生の歩み」動画を公式式典前に上映し、式典内で西淀川区と商店会が紹介されるなど、地域の取組を政府関係者へ発信。区在住ダンサーの出演やパレード参加により市民主体の交流を体現した。さらに、万博後は地域フェスティバルや料理教室、講演会を開催し、大使館・渋谷区との連携を強化。こうした試みはメディアを通じて広く発信され「多文化共生のモデル地域」として認知が広まった。</p>
大阪府 大阪市	ボリビア	EXPO ボリビアブース 万博会場でのボリビアブース訪問 5月19日：上福島小学校5年生 6月10日：上福島小学校6年生
		上福島小学校 6月17日：ボリビア駐在 JICA 協力隊員による出前事業の実施。（上福島小学校5年生）
		上福島小学校 7月9日：ボリビアの小学校に赴任する JICA 藤田氏によるオンライン出前講座を実施した。 藤田隊員が赴任している小学校の生徒と上福島小学校の5年生との文通実施予定（オンライン交流は時差の関係で困難と判断） 藤田隊員が赴任している小学校の生徒と上福島小学校の5年生との文通を実施。

	JICA 関西	9月4日：上福島小学校5年生が、JICA 関西を訪問 外国の文化に触れ、国際協力やSDGsについて学びました。	
	上福島小学校	9月30日：ボリビアの楽器ケーナ体験、演奏体験の実施（上福島小学校5年生57名）	
	上福島小学校	10月15日：5年生（57名）がボリビアの伝統料理ソパ・デ・キヌアとクニャベ（チーズパン）の調理体験の実施（講師：ディジー長谷川氏）	
	上福島小学校	ボリビアの楽器ケーナ体験、演奏体験の実施	
	上福島小学校	11月11日：ボリビアデーを開催する。 5年生による成果発表、ボリビア伝統楽器を用いたコンサート、5年生から4年生へのレガシーの相伝、ボリビア料理（クニャベ）の試食	
	【成果】 大阪市（上福島小学校）×ボリビアでは、万博を契機に国際理解教育を体系化し、JICA 海外協力隊員とのオンライン交流と文通、ケーナ制作・演奏、ボリビア料理の調理実習、全校参加の「ボリビアデー」を実施。児童は文化差を受け止め相手の状況に思いを馳せる力を育み、学びを調べ・表現・行動へ発展させた。学年継承（5年→4年）でレガシー化し、外部人材・機関との連携基盤も形成。多文化共生と次代人材育成を通じ都市魅力向上に寄与。		
大阪府 大阪市	パプアニューギニア	EXPO パプアニューギニアブース	5月15日：加美北小学校がパプアニューギニア（PNG）の万博ブースを訪問。
		大阪市内加美北小学校など	7月13日～7月22日：パプアニューギニアの Sogeri（ソグери）小学校（生徒6名、引率2名）を招請
		EXPO ナショナルデーホール「レイガードン」	7月21日：ナショナルデーではステージに登壇し、日本とパプアニューギニア国歌を斉唱した。（加美北小 6年生希望児童計30名+引率教員6名）+Sogeri 小学校（生徒6名、引率2名）
		加美北小学校	7月16日：Sogeri 小学校の児童6名、引率教員2名が、加美北小学校を訪問し、交流を行った。朝会での自己紹介、民族舞踊の披露、両国の国歌斉唱、日本の遊び（だるま落とし・けん玉・折り紙）、学校給食体験、プール体験など当日の5時限の授業をともに過ごした。 ・Sogeri 小学校より、姉妹校締結書が渡され、加美北小学校校長により署名、締結した。
		加美北小学校	9月14日：加美北まつり・バザーを実施 バザーで PNG ブースを設置し、特産のコーヒーやチョコレート、マグカップ等の販売を行った。物品のほとんどは駐日 PNG 大使館からの寄付である。
		パプアニューギニア訪問	11月15日～18日 加美北小学校の飯尾校長が、姉妹校締結校であるソグери小学校を訪問。今後の活動計画作成と交流のため PNG を訪問。加美北小学校とオンラインで繋ぎ、加美北小学校は校歌を、ソグери小学校は国歌と州歌をお互いに歌って、質問交流をした。

		<p>パプアニューギニア Sogeri 小学校</p>	<p>11月17日：加美北小学校の校長先生が渡航し、Sogeri 小学校訪問時に双方の絵画を交換する そのシーンをオンラインでつなぎ加美北小学校の児童と、Sogeri 小学校の生徒が交流する。壁画の保管場所は、加美北小学校は同校の体育館、ソゲリ小学校は同校の校長室とすることとした。</p>
		<p>【成果】</p> <p>大阪市立加美北小学校とパプアニューギニア（ソゲリ小学校）との交流は、万博を契機に姉妹校締結を実現し、学校間の継続的連携基盤を確立した点に大きな成果がある。万博ブース訪問、ソゲリ小学校児童の来日、ナショナルデーでの国歌斉唱、校長の現地訪問など多層的な交流を重ねることで、児童同士の直接的な絆と学校長同士の信頼関係を構築。さらに、共同壁画制作や手紙交換、オンライン交流の定例化により、万博のレガシーを有形・無形の両面で定着させた。将来の交流の懸け橋となる人材育成と、持続可能な姉妹校活動の仕組みを整えた点が最大の成果である。</p>	
大阪府堺市	ヨルダン	<p>EXPO ヨルダンパビリオン</p>	<p>4月24日：大阪・関西万博のヨルダンパビリオンにて堺の伝統産業である「堺五月鯉織（さかいごがつこいのぼり）」を活用し、参加者が平和への願いや未来へのメッセージを書き込むワークショップを実施した。ワークショップで制作したオリジナル鯉織は5月8日（木）から5月18日（日）までヨルダンパビリオン正面入口に掲揚された。</p>
		<p>EXPO ナショナルデーホール「レイガーデン」 ヨルダンパビリオン</p>	<p>5月7日：ヨルダンのナショナルデーに市長が参加し、相手国関係者と交流した。</p>
		<p>堺市 大仙公園</p>	<p>5月25日：大仙公園で実施された三千家によるお茶会「大仙大茶会」にヨルダンパビリオン政府代表代行を招待して、茶の湯体験を実施した。</p>
		<p>堺市立登美丘西小学校</p>	<p>7月15日：ヨルダンパビリオン政府代表代行が講師となり、ヨルダンの自然や気候、食べ物や宗教、人気のスポーツや人々の暮らしの様子などについての特別授業を実施した。</p>
		<p>EXPO 大阪ヘルスケアパビリオン リポーンステージ</p>	<p>7月28日：大阪ヘルスケアパビリオン リポーンステージにて堺市主催催事「Craftsmanship Journey 万博の楽市楽座、堺と出会う一期一会」を実施した。その中で、「堺×ヨルダン 万博がつなぐ一期一会」と題し、ヨルダンパビリオン政府代表代行によるステージトークや、ヨルダンパビリオンのアーティストと堺五月鯉織の職人による共創パフォーマンスといったコラボレーションステージを実施した。</p>
		<p>EXPO ヨルダンパビリオンの砂漠空間</p>	<p>9月11日：ヨルダンパビリオン内の砂漠空間を茶室に見立て、堺の伝統文化である茶の湯を活用することで、万博ならではの特別な体験をお届けし、ヨルダンの魅力を知って頂くと同時に、堺の伝統文化を国内外へ発信した。また大阪公立大学茶道部に協力いただき、学生が主体となっておもてなしをすることで、貴重な学びと実践の機会を創出した。</p>

		EXPO ヨルダンバビリオン	9月24日：オリーブを活用したワークショップ等を実施した。 (1) オリーブの木とヨルダンの砂漠の砂を使用した砂時計制作ワークショップ (2) オリーブリースづくり (3) オリーブオイルのテイスティング (4) ヨルダンカフェのソフトクリームと堺産レモンオリーブオイルのコーポ (メニューの提供)
		堺市内の施設を周遊	9月26日：ヨルダンバビリオンの関係者に堺市の伝統産業を紹介&体験して頂き、今後の継続した交流を目指した半日ツアーを実施。 行程は夢洲万博会場===大仙公園周辺(見学)===さかい利晶の杜(茶室お点前体験・展示室見学)===和泉利器製作所(刃物砥ぎ体験)===堺伝匠館(見学・お買物)===夢洲万博会場
		フェニーチェ堺(堺市民芸術文化ホール)大ホール	11月29日：毎年実施しているイベント(古墳サミット)。本年度は万博で連携したヨルダンの世界遺産、遺跡を取り上げ、紹介した。また、ヨルダンの砂の特別展示も実施。
		【成果】 堺市の取組は、伝統産業や茶の湯文化を媒介に、来場者参加型の交流を実現した点に特徴がある。参加者は、文化を「見るもの」ではなく「共につくるもの」として体験することで、相互理解を深めた。また、堺の歴史やものづくりの価値が国際的な文脈で再認識され、市民や関係者の誇りや発信意欲の向上につながった。これにより、文化交流を起点とした誘客や産業振興の可能性が具体的に意識されるようになった。	
兵庫県西宮市	ソロモン諸島	EXPO ソロモン諸島ブース	関西大学(西宮市)の学生がソロモン諸島から招へいた生徒とともに万博会場を訪問した。
		市内施設オンライン	「こども・わかもの交流プログラム」ソロモン諸島からの来訪者受け入れ準備4月30日 キックオフミーティング5月12日 打ち合わせ(事業詳細に関する協議)5月16日 打ち合わせ(学生の選定に関するソロモン諸島側との調整)6月6日 ソロモン諸島学生選定会議6月13日 打ち合わせ(ソロモン諸島現地コーディネーターとの協議)9月4日 万博交流プログラム事前ブリーフィング(オンライン)※以降、関係者と事業詳細について、メールや対面での面談等で進めた。
		西宮市 (甲子園浜、市内小学校、西部総合処理センター、松本商店) 南京町、王子動物園	9月16日～9月20日：ホニアラ市の16～19歳の学生4人と先生1名を招待した。 滞在中に市内の小学校や万博を訪問し交流を実施した。 市立高木北小(薬師町)で児童らとの交流では、ソロモン諸島の学生は4クラスに分かれ、持参したアクセサリーを見せて「困りごとがあったときに身につけます」などと自国の文化を紹介。 兵庫県内の各施設にて環境学習及び地域の歴史文化学習を行った。

		<p>【成果】</p> <p>西宮市とソロモン諸島（ホニアラ市）との交流は、環境分野での行政間連携を基盤に、市民・若者レベルへと発展させた。甲子園浜での海の環境学習や動物園バックヤードツアー、リサイクルプラザ見学を通じて循環型社会への理解を深めるとともに、小学生との文化交流や民族舞踊披露により相互の故郷への誇りと理解を醸成した。万博会場ではSDGsや環境技術を体験し、将来世代への環境継承を自らの課題として捉える意識変容も確認。MOUに基づく関係を「人と人のつながり」へと深化させた。</p>	
和歌山県有田市	アラブ首長国連邦	<p>有田市立有和中学校 体育館</p>	<p>6月5日：ドバイプロジェクト キックオフ 中学3年派遣生代表による令和6年度ドバイ研修報告プレゼンテーション及び質疑応答 ドバイの紹介 文化・生活・宗教等について GNSにおける生徒交流の様子 実際に訪問しての気づきと下級生へのメッセージ</p>
		<p>有田市立有和中学校 体育館</p>	<p>6月20日 ENEOS：次世代エネルギー（SAF）、カーボンニュートラルに向けた和歌山製造所の取組等に係る講義・質疑応答 9月2日 SUNTORY：企業が考える持続可能な未来をつくるしくみ〜ペットボトルからペットボトルへ〜についての講義・グループワーク・質疑応答/キャリア教育 SUNTORYの理念 サステイナブルな未来</p>
		<p>有田市立有和中学校 体育館</p>	<p>7月1日：事前学習講義・質疑応答（JICEの仕事について、UAE（ドバイ）の日常生活、文化・伝統等、UAE（ドバイ）の環境（SDGs）についての意識や取組等）</p>
		<p>和歌山県内各所</p>	<p>9月17日～19日：GNS生徒の訪日団を和歌山県に招待 9月17日：有田市の特産物を使った寿司づくり体験（GNS×有和中学校） 有田市の特産物を使った昼食を調理、提供（ハラル対応） 9/17(水) 18:30～ 市主催の歓迎レセプションに UAE関係者を招待 会場：ダイワロイネットホテル和歌山 内容：①絵解き説法：福辻京子氏 ②和太鼓演奏：嶋本龍氏 ③生徒発表等：有和中生徒・GNS生徒 ④写真撮影 ※和歌山の観光名所版「フォートナイト」体験ゾーン設置 招待：在ドバイ日本総領事、駐日大使館関係者、UAE万博パビリオンスタッフ（SHF財団）、GNS生徒、など 参加：市長、知事、県教育長、県議、市議、ALLARIDA協議会、ENEOS関係者、有和中学校生徒など</p>
		<p>有和中学校 有田市文化福祉センター 有田市健康スポーツ公園</p>	<p>9月17日、18日：GNS生徒が有田市立有和中学校を訪問。 茶道文化や漢字の書き方を学び、漢字で自分の名前を書いたおしりを制作したり、和紙に絵の具を染みこませてアート作品を作ったりした。スポーツ施設に移動し、サッカーの試合もした</p>
		<p>EXPO会場 UAEパビリオンイベントホール</p>	<p>9月19日：アラブ首長国連邦のナショナルデーに有和中学校生徒らが万博会場を訪問する。 公式式典には引率の教員が出席。 UAEパビリオン内にて、有田市立有和中学校の生徒による発表（発表テーマはSDGs関連）</p>

		有田市内（有和中学校、市民会館紀文ホール）	11月13日、14日：有和中学校の文化祭でドバイブース設置有和中学校の文化祭でブース設置(ドバイ文化、GNS教育交流、万博での共同発表紹介、民族衣装の展示)
		ドバイ訪問（GNS生徒との交流、総領事館など）	12月6日～12日：有和中学校の生徒20名+学校教職員3名・教育委員会担当1名がUAEを訪問 現地派遣生徒による事前ドバイ学習を複数回実施 12月の渡航に向けた見通しとグループ別調べ学習（ドバイ研修のしおりづくり） UAEを訪問しSDGsの取り組みなどを学ぶ他、現地での学生との交流を実施する
		<p>【成果】</p> <p>有田市では、学校間交流を核とした取組を通じて、生徒の国際理解や探究心が大きく高まった。環境・エネルギーといった共通課題をテーマに協働した経験は、生徒にとって「世界とともに学ぶ」実感をもたらし、将来の進路や社会参加への意識変化につながっている。また、市民や地域組織を巻き込んだ交流により、国際交流が教育分野にとどまらず、まちづくり全体に波及する取組として共有され、持続的な関係構築への基盤が整えられた。</p>	
鳥取県	ジャマイカ	EXPO ナショナルデーホール「レイガーデン」	8月6日：ジャマイカから青少年を招へいし、県内高校生と万博会場にて音楽やダンスを披露 ジャマイカNDのサイドイベントとしてレイガーデンで音楽の共演やジャマイカの伝統的ダンスと岩美高校の吹奏楽部（12名）の演奏による共同演技を披露。 知事は公式式典、午餐会、相手国主催のレセプションに出席
		鳥取県	8月7日～9日：ジャマイカから招請した青少年を鳥取県に招く 8月7日：岩美高校での歓迎会 ポスターセッション その後、エクスカーション 13時20分～ 岩美町紹介プレゼン及びポスターセッション（岩美高校） 14時50分～ 岩美町視察（明石家、渚交流館） 鳥取砂丘や砂の美術館等の視察を行ったほか、布勢運動公園でジャマイカ展示の見学や、ジャマイカ人スポーツ国際交流員であるクリスティン・デイ氏との陸上交流を行った。 16時45分～ 記念撮影（浦富海岸遊覧船）
		鳥取県立福祉人材研修センター	駐日大使館の公邸料理人によるジャマイカ料理教室を実施した 7月5日：市民向け（木村太郎氏 駐日ジャマイカ大使館現役シェフ） 9月9日：岩美高校にて（藤本氏 ジャマイカ・パハマ・ベリーズの日本大使館で総料理長）

		<p>岩美高校 八頭高校 米子高校</p>	<p>5月 青少年派遣の中止決定、代替事業としてビデオ交流を行う方針を固める 6月に交流参加校の決定、10月撮影、11月ビデオ完成 鳥取県内の3校（過去にジャマイカとの交流を実施）がビデオレターを制作 ジャマイカの高校およびジャマイカで国際交流を推進するNPO法人に送付する。 データ送付および、12月7日にジャマイカで実施されるレゲエマラソンやウェストモアランド県を表敬訪問する自治体職員が持参する。</p>
		<p>【成果】</p> <p>鳥取県とジャマイカ（ウェストモアランド県）との交流は、姉妹提携を基盤に、万博を契機として青少年交流と県民参加型の文化体験を再活性化させた。ジャマイカ料理教室により県民の異文化理解を促進するとともに、万博ナショナルデーでの岩美高校生徒とのコラボパフォーマンスや青少年団の来県交流を通じて、友情と国際感覚を育成した。さらに、治安情勢悪化により派遣が困難な中でもビデオ交流を継続し、草の根のつながりを維持。姉妹提携10周年に向けた機運醸成と、文化・学生交流の深化に向けた持続的基盤を強化した。</p>	
広島県北広島町	ドミニカ共和国	北広島町	6月1日 駐日ドミニカ共和国大使が来町：ドミニカ共和国 ナショナルデー参加への事前協議を行う
		EXPO 会場 レイガーデン コモنز B	8月23日：町内生徒の万博訪問 ドミニカ共和国ナショナルデーにコモنز B センターステージにおいて町内の中高生がこれまでのドミニカ共和国との交流（ダンス）を発表する。 町長と議長は上記イベントに参加するとともに、公式式典にも出席する。 町長は午餐会にも出席。
		世界陸上観戦ドミニカ大使館訪問	9月18日～19日：市内の高校生8名がドミニカ共和国陸上選手と交流（事前に町立高等学校生徒による陸上選手に向けたビデオメッセージを送付する） ・場所：国立競技場内 ・参加者：日本側（千代田高校生徒6名、加計高校芸北分校生徒2名、引率2名）ドミニカ共和国側（マリレイディ・パウリーノ選手、アレクサンダー・オガンド選手、リラニー・アロンソ選手、リディオ・フェリス選手 ・大使館訪問：翌日（9月19日（金））に駐日大使館訪問して、前日の選手交流事業の報告
		北広島町	10月15日：ドミニカ共和国パビオリオン関係者2名を北広島町へ招請 内容：学校訪問（芸北中学校、加計高校）、芸北高原視察、神楽部との交流、役場表敬、町内施設見学と体験
		KumahiraPark 北広島	11月23日：広島カープ所属ドミニカ選手による野球教室 北広島町内の小学生1年生～6年生18名に対し広島カープ所属のドミニカ出身選手が野球教室を開催する

		<p>【成果】 広島県北広島町とドミニカ共和国との交流は、東京 2020 大会ホストタウンを契機に築いた関係を、万博を通じて教育や文化の各分野へ発展させた。ナショナルデーでは中高生がプレゼンテーションを行い両地域の絆を発信、世界陸上応援や大使館訪問を通じてトップアスリートとの交流機会を創出した。さらに、万博関係者の町内招へいや神楽・壬生の花田植体験、ドミニカ出身カーブ選手による野球教室を実施し、児童生徒の国際感覚と郷土愛を同時に育成。対面交流を重ねることで、友好関係を強化した。</p>	
徳島県上板町	ヨルダン	EXPO ヨルダンパビリオン クラゲ館	5月7日：高志小学校5～6年生が万博を訪問し、ヨルダン国歌を斉唱 ヨルダン・ナショナルデーに町長及び高志小学校の校長先生および6年生約40名が万博に訪問。町長は、式典及び午餐会に参加。 ヨルダンパビリオンの前でヨルダン王子を国歌斉唱でお出迎えをした。 パビリオンの方より、ヨルダン館の案内・説明を受けた。 クラゲ館で事前に作成したタイルを貼り付けた。
		徳島 DAY パビリオン くらげ館	10月13日：徳島 DAY に参加 徳島パビリオン外のステージ及びヨルダンパビリオン前でヨルダンの国歌斉唱を行うとともに、藍染めのアクセサリーに関するワークショップも行う。
		徳島県庁 高志小学校	10月23日：ヨルダン館・政府代表代行のシーファ・ズグルさんら、パビリオンの関係者が県庁を訪問。高志小学校との交流で深まった縁から、パビリオンで展示されていた装飾品を徳島県に譲渡することになった 上板町とヨルダンの友好協定を締結した 高志小学校にヨルダン館一行7名が訪問。シファ政府代表代行による出前授業を行った 譲渡された展示品を活用し、あすたむらんど徳島において展示会を開催
		ヨルダン派遣	12月5日～12月11日 四国大学鈴鹿先生他2名がヨルダン訪問 次年度の交流計画の調整確認のためヨルダンの行政、藍染団体の関係者とのネットワークを構築する 現地の観光資源や施設、教育機関を視察、在ヨルダン日本大使館表敬訪問
		<p>【成果】 上板町とヨルダン・ハシェミット王国との交流は、阿波藍を軸に文化・教育・産業を横断した持続可能な国際協力モデルへ発展した点に大きな成果がある。高志小学校児童が万博ヨルダン・ナショナルデーで国歌斉唱を行い、地域文化が国際舞台で評価される経験を創出。さらに、ヨルダン大学やアル・フセイン工科大学、皇太子財団等と MOU 締結・合意に至り、学術・技術・若者支援を含む強固な連携体制を構築した。展示品譲渡や「ヨルダン展」開催により万博レガシーを地域に定着させ、JICA 草の根技術協力事業への展開を見据えた中長期的な国際協力基盤を確立した。</p>	
香川県	ブラジル	香川県内滞在	7月22日～29日：ブラジル県人会からの青年を招き香川県にルーツを持つ日系ブラジル人8名を招待。来訪した香川県人会のブラジル人と香川県の学生が交流。日本文化の体験やワークショップを行う先祖の親族へ訪問し、自らのルーツを探る活動を実施（計6件）県民交流イベント：ブラジルの地理や文化、県人会の歴史についての講座を行い、その後双方の郷土料理を教え合う。県内観光ほか視察。

		EXPO ブラジルパビリオン	7月23日：ブラジル/北伯香川県人会からの青年に加え、県事業としてブラジル訪問経験のある大学生等、計24名と万博に訪問。ブラジルパビリオンなどの訪問を通し交流を深めた。
		香川県内	12月18日：在県ブラジル人と市民との交流 ブラジルからの研修員（国際交流協会支援事業）が香川県の住民に対しブラジルを紹介するイベント。一般市民を対象に募集。カフェでのトークのような少人数対面形式で実施。
		【成果】 香川県とブラジル（ブラジル香川県人会・北伯香川県人会）との交流は、移住110年の歴史を礎に、万博を契機として次世代の日系青年との関係を再構築した。来県経験のない県人子弟8名を短期招へいし、万博参加、ルーツ探し、親族訪問、県民との料理交流、県内視察等を通じて「母県」への愛着を醸成。参加者全員が日本・香川への関心の高まりを実感し、県人会活動や日本語学習への意欲向上につながった。SNS等での積極的な情報発信や若者同士の継続的な交流も生まれ、将来の県人会を担う人材育成と日伯関係の持続的強化に資する基盤を築いた。	
香川県	パラオ	EXPO ナショナルデーホール「レイガールデン」	4月28日：ナショナルデー式典会場でうちわを配布。 今年度の事業で作成したオリジナルうちわ「表が香川県、裏がパラオ」1000枚を式典会場に來訪するゲストに提供した。
		大阪市	4月29日：ウィップス大統領と香川県知事の面会を行った。 パラオ共和国からの招待により、知事及び本県国際課職員3名がレセプションへ参加。両国の国歌合唱、パラオのパフォーマーによる伝統舞踊の披露も行われた。
		直島総合福祉会館	5月1日：パラオ共和国訪問団と直島中学校の交流会が行われた。 パラオ共和国からダンサーとシンガーを総勢15名招待。 09:30～伝統舞踊のパフォーマンスを鑑賞後、質問コーナーやパラオの高校生と直島中学校との記念品交換や記念撮影を行った。 11:30～ベネッセハウスミュージアムや家プロジェクトなど瀬戸内国際芸術祭の会場を視察した。
		パラオ訪問	12月17日～12月21日：自治体職員2名、うどん職人1名及び県内乾麺製造メーカーの職員1名がパラオ訪問。 12月19日 ガラマヨン文化センター 12月20日 ミゼンティ高校 今後の交流について協議するとともに、現地で「讃岐うどん」をふるまう。
		【成果】 香川県とパラオとの交流は、万博を契機に首長・政府レベルから青少年・地域住民まで多層的な交流を実現した。万博ナショナルデーでは丸亀うちわ1,000本を配布し香川をPR、知事とウィップス大統領の面会により水産・観光分野での将来連携の可能性を共有した。直島中学校との交流会では、参加生徒の100%がパラオへの関心が高まったと回答し、若い世代の相互理解を深化。さらに、うどん職人の現地派遣により、食文化を通じた交流を実現し、今後の持続的な往来と文化・経済交流へつながる基盤を強化した。	

福岡県	フィジー	福岡市内招請／万博 ナショナルデー訪問	<p>9月20日～26日：フィジーのスポーツ関係者の招請</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ交流について、ラグビー、柔道、ヨット ・スポーツ施設の視察 ・日本文化の体験／フィジーの伝統儀式や演奏の披露 ・福岡県主催歓迎夕食会／スポーツ関連団体との懇親会 ・福岡県庁を訪問、服部知事を表敬訪問
		EXPO ナショナルデー ホール「レイガ ーデン」	<p>9月25日：フィジーのナショナルデーに自治体職員がフィジーから招請したスポーツ関係者ととも万博会場を視察するとともに、公式式典に出席。式典では、フィジー側から副首相、日本側から内閣府副大臣が登壇し、現地ミュージシャンによる伝統音楽のライブ演奏ほか舞踊の披露やカヴァの儀式が行われた。</p>
		<p>【成果】</p> <p>福岡県とフィジーとの交流は、万博を契機にスポーツ分野を軸とした戦略的パートナーシップの構築を進めた点に大きな成果がある。フィジー青年スポーツ大臣をはじめとする訪問団を招へいし、アクション福岡のタレント発掘プログラムや筑紫台高校・南筑高校・福岡大学等の強化拠点、JAPAN BASE を視察。育成システムやスポーツ科学の取組を共有し、将来的な連携の方向性を具体化した。知事の表敬や万博会場内のフィジー・ナショナルデーへの参加を通じて首長・政府レベルの信頼関係も深化し、若手選手育成や施設整備協力を見据えた持続的な交流について合意形成がなされた。</p>	
福岡県福岡市	アラブ首長国連邦・カタール・サウジアラビア	EXPO レイガーデン ホール	<p>7月8日：カタールナショナルデー式典に参加</p> <p>西のゴールドルートから姫路市、岡山市、下関市、北九州市、福岡市、熊本市の6自治体が万博国際交流プログラムに参加。</p> <p>各自治体より公式式典に参加。（岡山市2名、下関市2名、北九州市1名、福岡市2名、熊本市2名計9名）</p>
		西のゴールドル ート	<p>7月28日～7月31日：インフルエンサーによる情報発信</p> <p>日本在住の中東インフルエンサーを起用した情報発信</p> <p>インフルエンサー（2名）を招請、3泊4日で6市（姫路市、岡山市、下関市、北九州市、福岡市、熊本市）を視察</p>
		万博会場 UAE パ ピリオン	<p>9月19日：UAE ナショナルデー式典に参加</p> <p>各自治体より公式式典に参加。</p> <p>9月18日 アブダビ文化観光局とミーティング</p>
		西のゴールドル ート	<p>9月21日～22日：万博関係者等 FAM トリップ①</p> <p>UAE 関係者2名招聘し、FAM トリップ実施</p> <p>富裕層をターゲットとしており高付加価値な体験を盛り込み実施。</p>
		EXPO レイガーデン ホール	<p>9月23日：サウジアラビア・ナショナルデー式典に参加</p> <p>各自治体より公式式典に参加。</p>
		EXPO レイガーデン ホール	<p>9月24日：サウジアラビア ビジネスフォーラムに参加</p> <p>EXPO ホールにて開催される2千人規模のビジネスフォーラムに参加し、西のゴールドルートおよび各自治体を紹介。</p>

	西のゴールデンルート	<p>9月25日～26日：万博関係者等 FAM トリップ②</p> <p>サウジアラビア関係者4名招聘し、FAM トリップ実施</p> <p>富裕層をターゲットとしており高付加価値な体験を盛り込み実施。</p> <p>①姫路・岡山コース 1名</p> <p>②北九州・下関コース 2名</p> <p>③熊本・福岡コース 2名</p>
	西のゴールデンルート	<p>11月23日～24日：万博関係者等 FAM トリップ③</p> <p>大使館関係者を対象にご案内。サウジアラビア大使館から13名参加（カタール・UAE 大使館からは申し込み無し）</p> <p>①姫路・岡山コース 5名申込</p> <p>②北九州・下関コース 5名申込</p> <p>③熊本・福岡コース 3名申込</p>
	<p>【成果】</p> <p>福岡市は、「西のゴールデンルート」の取組みのもと、万博を契機にサウジアラビア、UAE、カタールの中東3カ国と観光分野における関係を構築した。インフルエンサーを活用した広域周遊ルートの発信により、中東市場への認知拡大を図るとともに、各国ナショナルデーへの参加やビジネスミーティングを通じて政府・パビリオン関係者との直接対話を実現。さらに FAM トリップの実施により、受入事業者のハラル対応や文化理解を深化させた。特にサウジアラビア王国大使館とは、閉会後も交流を継続しており相互送客の基盤形成につながった。</p>	
佐賀県佐賀市	EXPO レイガーデンホール	トンガ・ナショナルデーの公式式典に参加。その後パビリオンを訪問
	トンガ訪問	<p>6月18日～6月25日：佐賀市職員1名、地球市民の会1名、佐賀災害支援プラットフォーム1名でトンガを訪問</p> <p>6月20日 8月の訪日招請にむけ来訪者や関係者との下打合せに訪問する</p> <p>6月21日 被災した地域の現地を視察、災害発生時の対応状況、復旧・復興に向けた対応措置、支援の在り方等について、政府機関や関係団体と意見交換（6/23にも意見交換）</p> <p>6月23日 招請する学生と事前交流／観光省にて万博国際交流プログラム事業の説明やパビリオン訪問時の受入依頼等実施</p> <p>6月24日 人道支援、防災、災害対応等の活動を行う NGO 団体「TNYC」において意見交換を実施</p>
	佐賀市内	<p>8月1日～8月14日：トンガからの招請。万博訪問と佐賀市での交流</p> <p>内務省副長官、エウア高校校長（教育訓練省）、国家災害管理局員、トンガ高校・エウア高校・ハアパイ高校各校から生徒2名ずつ（生徒計6名）、Tonga National Youth Congress プロジェクトコーディネーター（1名）、コーディネーター兼通訳（1名）が訪日</p> <p>地元中学/高校・こども園への訪問交流の他、1泊2日で防災をテーマにしたワークショップ合宿を選抜された佐賀市内高校生と行った。</p> <p>その他、佐賀市長表敬訪問、歓送迎パーティー、危機管理防災課訪問、災害三者連携会議出席、佐賀大学や市内施設訪問、地元メディア出演、ホームステイ、トンガ・ジャパンフェス in Saga 参加、在トンガ日本国大使館表敬訪問</p>

		EXPO トンガブース	8月3日：トンガから招請した11名とともに万博会場を訪問。 地球市民の会3名、高校生6名、大学関係者・学生5名、他引率2名、学校関係者1名（総勢16名）
		オンライン	11月15日：オンライン振り返り会 夏に来訪したトンガ人とともに過ごした日本人がオンライン上で集まり、夏の経験を振り返る。新たな気付き、行動変容などについて報告する。参加した日本人の高校生チームは、自主的にSCGsのコンテストへ取り組むなど新たな活動につながる。
		【成果】 佐賀市とトンガとの交流は、気候変動・自然災害という共通課題を軸に、青少年を中心とした実践的な交流を実現した。万博会場内のナショナルデーへの参加を契機に相互訪問とトンガ関係者の招へいを実施し、防災ワークショップ（北山少年自然の家での未来共創型プログラム）を通じて、レジリエントなまちづくりを共同で検討。学校訪問、ラグビー・伝統舞踊交流、ホームステイ、トンガ・ジャパンフェスにより市民約600名へ波及し、多文化共生意識と若者の主体性を向上させた。また、事業の共催者であるNPO法人地球市民の会とトンガ王国とのMOU延長が前向きに検討されており、防災・教育分野での継続的な交流の促進が期待される。	
大分県竹田市	パラグアイ	EXPO ナショナルデーホール「レイガーデン」 パラグアイバビリオン	5月19日：パラグアイ・ナショナルデーへ市長・学生含む代表団による訪問 「レイガーデン」で行われる式典に竹田市民16名参列 パラグアイバビリオンでは、ベニヤ大統領ご夫妻に竹田市の中学生在がスペイン語で、それぞれあいさつと記念品を贈呈した。
		【成果】 竹田市とパラグアイ（サン・ロレンソ市）との交流は、52年にわたる姉妹都市の歴史があり、万博会場内のナショナルデーを契機としてその絆を次世代へ継承することを目的とした。市長を団長に中学生10名と市民が派遣され、ベニヤ大統領夫妻と直接対話し、スペイン語で歓迎の意を伝えるなど、首脳級交流を体験した。事前学習を重ねて臨んだ万博会場での参加を通じ、各国文化への理解と国際感覚を深化させた。長年培ってきた友好関係を未来志向へと発展させる確かな礎を築いた。	

第3章 個別プロジェクトの実施内容

3-1 青森県三戸町×ヨルダン

1. 背景と目標等

(1) 背景

三戸町は、第五次三戸町総合計画で、「国際性豊かな人づくり」を掲げており、「国際化の時代を担う人づくり」、「町民の国際認識・理解の醸成」を明記している。海外との交流では、三戸町ロータリークラブにより30年以上オーストラリア国タムワース市と友好関係を継続しており、2001年には姉妹都市調印を締結して交流を続けており、三戸町の条例に外国出張にかかる項目があるぐらい海外との国際交流に対しては意識的に取り組んでいる。

(2) 課題

上記1.(1)のとおり、三戸町ではタムワース市との姉妹都市交流に加えて、中学生海外派遣や学校へのALT配置や弘前大学との英語教育連携などを行っている。「国際化の時代を担う人づくり」、「町民の国際認識・理解の醸成」に寄与していくためには、英語圏だけでなく、アジア地域、アフリカ大陸、中東地域、中南米地域など、英語圏以外の地域との接点が必要であるが、現状、そうした地域との接点がほぼ皆無であることから、先ずはつながりをつくる必要があり、課題でもある。

(3) 目標

今年度は、広く世界に意識を向けるために、従来のオーストラリア国との姉妹都市交流に限定せず、万博国際交流プログラムを活用して①万博国際交流プログラムでヨルダン国に登録を行ったことを町民が認知する取り組み(イベント・メディア対応)を三戸町内で実施すること、②万博会場に中高生を含む三戸町民を連れていき、ヨルダン館を含むパビリオン視察をとおして世界や未来への好奇心を醸成すること、③ヨルダン・ハシミテ王国に出張して現地での交流を行うこと、を3本柱として取り組む。その結果、「国際化の時代を担う人づくり」、「町民の国際認識・理解の醸成」に寄与していく。

2. 事業内容

(1) 事業名：万博ヨルダン館でのヨルダンの方々との交流

① スケジュール

以下の日程で万博会場を訪問した。派遣人数は

日程	内容	派遣人数(内 行政人数)
5月6～9日	ヨルダン万博ナショナルデーイベント参加	1 (1)
6月8～10日	ヨルダン館との交流にかかる事前打ち合わせ	4 (4)
7月1～3日	三戸町長の万博への派遣および打ち合わせ	3 (3)
7月22～24日	三戸町中学生の派遣および国際交流	5 (5)
9月11～13日	三戸高校生の派遣および国際交流	8 (6)
10月5～8日	三戸町民の派遣および国際交流	4 (5)

合計人数 65人 (24人)

② 体制

三戸町長を含めて、延べ人数65人が万博会場に訪問した。

毎回行政職員が随行したことに加え、中高生派遣の際には学校長や教員も随行した。

③ 内容

万博ヨルダン館を訪問し、①シファ・ヨルダン政府代表代行によるプレゼンテーション聴取、②ヨルダンパビリオン視察・体験、③ヨルダン館砂漠エリアでの三戸町魅力発信、の3つを軸にした国際交流を行った。また、自由時間で各自会場視察を行ったほか、ヨルダン館の手配により、万博内「ウーマンズパビリオン」、「Dialogue Theater いのちのあかし」、「パソナ館」、「いのちの遊び場くらげ館」といった人気パビリオンも訪問し、世界の現状や未来のテクノロジーも知る機会を得た。

④ 効果

三戸町からの参加者全員(65名)に万博体験にかかる感想文を記載いただいた結果、参加者全員から、「世界に触れるきっかけを得ることができた」という趣旨の感想を記載している。

具体的には、「中東が危険というイメージではなかったことが意外だった」、「ヨルダン国のおもてなしに感激した」、「中東のヨルダンで雪が降ることにびっくりした」、「iPS心臓細胞をみて、将来医者になりたいとの想いを強くした」、「SDGsクイズをやったが全問不正解で、もっと世界を学ばないといけないと思った」、「ご飯にヨーグルトをかけて食べるという食文化に驚いた」等の記載があった。

副次的な効果として、万博に参加した随行者たち(行政職員、町議会議員、教

員、商工会青年部など）同士の交流機会にもなった。町民同士の関係性が良好になることにも大きく寄与した。例えば、本年9月に三戸高校でのインターン受入が実現したが、万博に随行した教員と行政職員の関係が良好であったため、初めての取り組みであったが、きわめて円滑にインターン受入を実現することができた。

(2) 事業名：クラシックライブ演奏会

① スケジュール

2025年11月2日、三戸町祥鷹閣にて開催。

② 体制

三戸町役場まちづくり課主導で実施。ヴァイオリンとピアノによるライブ演奏を実施。

③ 内容

ヨルダン国歌、青森県民の歌「青い森のメッセージ」など10曲を演奏。町民72名が参加した。

④ 効果

万博は、「本物に触れるリアルな体験をする機会」である。しかしながら万博会場を訪問できる人数は限られており、東北6県からは、全体の0.8%しか万博訪問ができていない。

そこで、青森県にいながらにして、そうした体験を実現させるひとつの機会として、本クラシックライブを企画した。本企画は、町内回覧板での全戸周知、防災無線での開催案内など、三戸町役場の全面的な支援をいただきつつ実施することができた。

参加した町民は、初めてヨルダン国歌を聴く機会となり、「中東という地域の国歌や曲を聴くきかいは人生で初めてだったので、とても新鮮な経験ができた」と喜んでいった。企画終了後に、町内を歩いているときに「素晴らしい機会をつくってくれてありがとうございます。」と声をかけられた回数は5回を超えた。このようにその後もお礼を言われることは通常ではないため、それだけ参加した町民にとって印象にのこる企画だったと推察される。企画後に町民からのクラシックライブ開催への期待も大きかったことから、この企画をきっかけとして、三戸町ふるさと納税で「クラシックライブの開催等、音楽文化芸術振興コース」という項目が新設され、2025年12月26日時点で、すでに50万円以上の納税を同コース指定でいただいている。その結果、三戸町の来年度予算でクラシックライブ開催予定であり、万博国際交流プログラムでの開催をきっかけとして、今後もふるさと納税を含む自主財源での定期的な開催が期待できるレガシーのひとつが生まれた。



(3) 事業名：ヨルダン・ハシミテ王国出張

① スケジュール

2025年12月4日～16日

(12月4日は在京ヨルダン大使館でナーセル・シュライデ大使表敬、5～16日に海外出張)

② 体制

出張者：越後千寿（万博国際交流プログラム三戸町アドバイザー）

高田健二（三戸町役場まちづくり課 さんのへ魅力発信監）

③ 内容

- ヨルダン国の3施設合計75人以上の子どもたちと国際交流
交流人数：12月7日約30人、12月10日約25人、12月14日約20人
- シファ万博ヨルダン館政府代表代行、ヨルダン政府観光局との打ち合わせ
- 在ヨルダン日本国大使館・渡邊次席との打ち合わせ
- 帰国後に三戸町で開催予定の万博&ヨルダン訪問報告会用の写真撮影

④ 効果

ヨルダン・ハシミテ王国の子どもたちと国際交流（絵画授業の協働、音楽交流、手品交流）を行った。JICA 海外協力隊が派遣されている学校長およびJICA海外協力隊の方々から三戸町からの出張者に対して、「素晴らしい機会をいただき感謝する」とのお礼の言葉をいただいた。

シファ政府代表代行からは、万博国際交流プログラムを活用してのヨルダン国来訪を喜んでいただくことができ、2027年の横浜園芸博でもシファ政府代表代行がとりまとめを行う予定だと伝えられた。三戸町としても、2027年横浜園芸博でもヨルダン国との連携ができるよう検討していく予定。

在ヨルダン日本国大使館の渡邊次席と打ち合わせを行い、令和8年1月に渡邊次席が日本に一時帰国する時期に合わせて三戸町を訪問いただき、三戸町でヨルダン談話会を開催の了解を得た。

3. 事業の目標に対する成果

万博国際交流プログラムをとおして、三戸町総合振興計画にある「国際化の時代を担う人づくり」、「町民の国際認識・理解の醸成」に寄与するという本事業の目的については、本事業に参加した方々からのレポートをとおして、成果がでていることは確認できた。

具体的には中東地域に馴染がない三戸町の方々が、「中東の人はテロのイメージで怖いと思っていたが、出会ったヨルダンの方々の優しい人柄に感銘を受けた」とか、「聞いたことのない国がこんなに多くあることに驚いた」といった感想もあり、中高生を含めて、三戸町民の国際意識・理解の醸成に大きく寄与したことが確認できた。

これは、これまでの三戸町が姉妹都市を締結しているオーストラリア国との交流だけでは得られなかった異文化経験であり、今回の万博国際交流プログラムに参加したからこそ得られた貴重な経験である。町長からも「万博国際交流プログラムに登録したおかげで、三戸町の国際性豊かな人づくりが推進できた」とのコメントもいただくことができたことから、事業目標に対する成果は十分に認められると思料する。

4. 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

ハードレガシーとしては、万博ヨルダン館のワディラム砂漠の砂 70Kg を譲渡いただいたので、三戸町のイベント（総合文化祭、さんのへ感謝祭など）の機会に展示して、実際に来場者に砂漠の砂を触っていただくという企画を実施して好評を博している。今後も、様々な機会を活かして砂漠の砂を活用する予定。

ソフトレガシーとしては、次の3点が具体的な成果である。

- ① 万博に訪問した方々が、万博訪問後にも意見交換を継続した結果、本年9月に役場が受け入れていた地域おこし協力隊インターンを、三戸高校で数日受け入れることが実現した。また、小中一貫三戸学園と県立三戸高校による万博にかかる合同報告会も令和8年2月5日に開催される予定。今後も、学校や役場に限定せず、さまざまな連携を行っていこうという話となっている。レガシーは、良好な人間関係があることで創造されていくものであり、そうした良好な人間関係づくりのきっかけとして、今回の万博国際交流プログラムを実施した意義は極めて大きい。
- ② 万博国際交流プログラムで実施したクラシックライブについて、参加した地元住民から再度開催してほしいとの要望が多くあがったことから、「ふるさと納税の支援項目：クラシックライブの開催等、音楽文化芸術振興コース」を新設するとともに、来年度には、町予算での開催をすべく予算措置済。
- ③ 当初は、三戸町国際交流推進委員会を含めて、オーストラリア国タムワース市との姉妹都市以外との国際交流（今回のヨルダン国との交流）について消極的であったが、万博国際交流プログラムに参加してから「国際理解を進めるために、姉妹都市となっているオーストラリア国以外についても知っていくことや交流することが重要」という理解を得ることができ、今後もオーストラリア国に限定しない国際交流を行っていくことについて前向きな意識を醸成することができた。今後の三戸町が幅広い国や地域との国際交流を行っていく方向に舵を切ることができるきっかけとなったと考える。

5. こども（または参加者）にとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

万博会場訪問をした参加者の満足度を確認した結果、次のような結果を得ることがで

き、参加者にとって満足度が高い万博訪問になった。

内容	満足した	やや満足	やや不満足	不満足
中学生派遣	92% (23名)	8% (2名)	0%	0%
高校生派遣	84% (15名)	16% (3名)	0%	0%
町民派遣	86% (12名)	14% (2名)	0%	0%

中高生や町民だけでなく、万博出張に随行した行政職員や教員も含めて、万博出張者全員に感想文の提出を義務付けたところ、以下のような感想文が提出され、将来に希望を感じることができるインパクトをもたらしたと史料する。

- ① 沼澤修二町長は、「これまでに三戸町が行ったことがない事業だったが、国際感覚を持った人材を育てる上で、非常に有効な事業だった。今後も、ヨルダンとの交流を続けていきたい」と評価と今後の展望について言及されている。
- ② 万博会場で5問のSDGsクイズに挑戦した中学3年生男子は、「世界には解決しなければならない問題が多いことや、SDGsを達成するためにはジェンダー平等を実現することが不可欠だとわかった」と視野を広げた。
- ③ 人工多能性幹細胞(iPS細胞)技術を活用した「動く心臓」の拍動を見た中学2年生女子は、「将来は医療関係ので、生命の新しい光を見たように思えた」と将来の夢と医療の未来に感動していた。
- ④ 高校1年生女子は、「万博会場で世界を少しでも知ることができたからこそ、三戸町の良さを改めて感じる事ができた」と地元への誇りを強くした。
- ⑤ 高校2年生男子は、「これからは自分の当たり前を大事にしたいし、三戸が好きなのを実感できた」と素直な感想を伝えてくれた。
- ⑥ 三戸町国際交流推進委員の方は、「最初にヨルダンとの交流を聴いたときは疑問だらけだったが、プログラムに参加してヨルダンを身近に感じるようになった。生まれた交流は育てていかなくては絶えてしまう。今後は三戸とヨルダンの交流を大切にしたい」と決意を記していた。

6. 特に良かった点、苦勞した点

(1) 良かった点

- ・ このプログラムでの各種企画や出張のおかげで、三戸町内の小中学校・高校、国際交流推進委員、行政職員、三戸町民たちが連携する人間関係づくりに寄与できた。その結果、以下にあるような展開が実現した。また、いくつかの企画が計画中である。

- ① 万博出張をともにした行政職員と学校教員により、地域おこし協力隊インターン

の学校での受入を初めて実現することになった。同受入をした結果、学校、生徒、インターンの三方よしでの満足度の高い機会を実現することとなり、今回の受入が好評だったことから、今後の学校での受入についても前向きに考えていただけることとなった。

- ② 万博国際交流プログラム三戸町アドバイザーの越後さんが、自身がパーソナリティをつとめるカシオペアFM というラジオ番組で万博やヨルダンについて何度も語ったことから、万博やヨルダンに関心をもった方々が実際に万博会場を訪問して、多文化共生や異文化理解の必要性について理解を深めることができたとの感想を寄せていた。
- ③ 令和8年2月5日（予定）では、小中一貫三戸学園と県立三戸高校が連携して、三戸学園での中高合同万博報告会を自主的に開催するという展開も実現する見込み。
 - ・ ヨルダン・ハシミテ王国出張でも、JICA との連携により、JICA 海外協力隊員が派遣されている学校での国際交流を行ったところ、子どもたちだけでなく学校教員たちも大喜びされていた。後日、JICA 海外協力隊の方々とやりとりをしたところ、その後も話題にしておられるとのことで、ヨルダン国での交流が感動体験を与えることにつながったことが良かった。
 - ・ 三戸町長および三戸町副町長の両名が万博会場を訪問しており、万博国際交流プログラムに対して首長が関与することが実現し、三戸町が国際交流を行うことについて本気度がある状況をつくることができた。
 - ・ 地元新聞が、1面トップでの取り扱いも含めて何度も万博国際交流プログラム関連の記事を掲載いただいた。新聞記者も、これまで体験したことがない未知の事業である万博国際交流プログラムに対し、三戸町民のために最大限活用しようという役場職員たちの真摯な姿勢を実感したと語っていた。また、広報さんのへ令和8年1月号（新年号）でも、全14ページ中3ページを万博国際交流プログラム特集が生まれ、町民に本プログラムの価値や意義を伝えることができた。

(2) 苦勞した点

- ・ 大阪・関西で開催される万博であるという思い込みがあり、三戸町での万博国際交流プログラムに理解いただけない町民も一定数おられた。万博開催初期のマスメディア報道や YouTube などによるネガティブ情報の拡散の影響は大きいと感じた。本件については、上記6.(1)で言及したように地元新聞や三戸町広報により、徐々に解消していったが初期の段階では苦勞をした。
- ・ 青森県から万博会場は約1,200kmの距離があるため2泊3日での出張日程となり、日程的に調整が付きにくい状況に加えて、経済的な負担も大きいものであった。特に10月は大阪での宿泊費が想定以上に高騰したため、なんとか取りまと

めることができたが、予算上限を超えないように執行することに難儀した。

- ・ 中高生たちの万博会場訪問時（7月、9月）は酷暑の時期であり、子どもたちだけでなく、随行する教員たちや行政職員たちの体調面でも負荷が大きかった。
- ・ 万博ヨルダン館が、びあ万博パビリオン満足度ランキング1位をとったことから、ヨルダン館に累計100万人以上の訪問者がきて、その対応でヨルダン館関係者が忙殺されたため、各種調整が当日を含めた直前の対応とならざるを得なかった。
- ・ 令和7年6月にイスラエル国とイラン国との間でミサイル発射の応酬があり、治安状況の悪化を懸念して、当初8名の三戸町民をヨルダン国派遣する予定が、2名に削減せざるを得なかった。

7. 今後の展開

- ① 今年度中（令和7年度中）に、三戸町での万博総括報告会を複数回開催し、町民たちに広く、万博国際交流プログラムから得たものについて共有する予定。現時点でも、令和8年2月5日に小中一貫三戸学園・県立三戸高校による「万博訪問合同報告会」の開催が確定している。
- ② 令和8年1月に、在ヨルダン日本国大使館の渡邊次席が一時帰国で青森にこられるタイミングに合わせた「女性外交官とヨルダンや外交の仕事について語る会（仮称）」を三戸町にて開催する予定。
- ③ ヨルダン国出張時に、令和9年度（2027年度）に開催される横浜園芸博（Green EXPO）のヨルダン国責任者が、今回の万博責任者であるシファ・ズグール政府代表代行に決まったことを伺ったため、シファ政府代表代行と連携しつつ、横浜園芸博での国際交流をしていく予定。横浜園芸博でも内閣官房予算がつく場合は、積極的に活用させていただきたいと考えている。
- ④ ナーセル・シュライデ在京ヨルダン特命全権大使と三戸町で国際交流を実施していきたいと考えている。
- ⑤ 今回お会いしたJICA海外協力隊員を軸として、JICA海外協力隊が派遣されている学校・施設で、ヨルダン国の中学生と三戸町の中学生とがオンライン交流をできるよう各種調整をしていく予定。
- ⑥ 小中一貫三戸学園との調整し、令和9年度の中学生修学旅行で、横浜園芸博訪問も検討していきたい。

8. 今後の展開における課題

ヨルダン国訪問での国際交流を行うためには、旅費も渡航期間もそれなりの規模で必要となる。そのため、限られた町予算という制約状況では、大規模な国際交流を行うこと

は身の丈にあわない。当面は日本国内でのヨルダン国との交流を行うことを軸足にする
ことで、万博を契機に構築されたヨルダン国との国際交流の芽を育てていくこととした
い。

ヨルダン国との国際交流予算については、三戸町の自治体財政も余力があるとはいえ
ない状況であることから、今後も国際交流に関連する国予算や県予算など外部予算獲得
が必要な側面がある。今後、横浜園芸博を含めて、国が国際交流にかかる予算を確保した
場合には、三戸町としてそうした予算を積極的に活用していきたい。

ヨルダン国での交流についても、JICA 海外協力隊の方々を軸とした国際交流を行って
いくことが肝要であり、JICA との関係性も良好に維持していくことも今後の展開として
強く意識する必要がある。

3-2 群馬県富岡市 × ミクロネシア

(1) 背景と目標等

1) 背景と目的

本市は群馬県南西部に位置する人口約4万5千人の自治体であり、外国籍住民が人口の約3%を占めている。

また、世界遺産・国宝である「富岡製糸場」を有しており、都内からのアクセスも良好で観光客等も比較的訪れやすいことから、県内有数の観光地である。

他方、市内の就業者数を産業分類別に見ると、製造業が最も多くなっており、多くの外国人が従事している。

本市においては、総合計画における基本構想「世界遺産にふさわしいまち とみおか」を実現するため、個別目標である「富岡ブランドの推進（シティプロモーション）」に取り組んでおり、多様な文化や諸外国との交流を進めている。本プログラムにおける交流相手国であるミクロネシア連邦とは、本市国際交流協会との間で30年ほどの交流の歴史を有し、東京オリンピック・パラリンピックにおけるホストタウンとして登録を行った経過があることから、万博を契機として一層の交流を図るものである。

2) 目標

小中学生を中心とする市民を対象とした事業を通じて、相手国の歴史や文化、風土について学ぶ機会を設けることで、相手国に対する理解を深め、多文化共生や国際交流推進を図ることを目標とする。

(2) 事業内容

1) 国旗だるま製作

①スケジュール

4月 業者選定・発注・打合せ

5～7月 製作・納品

②体制

本市：事業全般における企画調整

国際交流協会：デザイン検討・説明文作成における協力

③内容

本市周辺地域では、だるまの生産が盛んであり、地域の伝統文化として根付いている。

この文化に触れていただくことを目的として、本邦及び相手国の国旗入りだるまを製作し、

相手国の交流先各機関へ提供する。

④効果

本市内でだるま製作を行っている作家の掘り起こしのほか、地域の伝統工芸品の提供を通じて、相手国との更なる友好関係を築けたことは大きな成果である。

また、相手国は約2割が日系人と、本邦にルーツを持つ国民が多くいることから、本邦の文化について認知していただくきっかけを創れた点も非常に有意義であった。



【国旗だるま（前）】



【国旗だるま（後）】

2) ミクロネシア連邦紹介パネル製作

①スケジュール

4月 業者選定・発注・打合せ

5月 写真提供（大使館）・製作

6～8月 追加加工・納品

②体制

本市：事業全般における企画調整

大使館：写真提供及び本国との連絡調整

国際交流協会：写真選定及び大使館との協議調整補助

③内容

広く市民に対し、相手国の風土や当市国際交流協会等との交流の歴史を認知してもらうことを目的として、相手国を紹介するパネルを製作し、各種イベントにおいて掲示するもの。

④効果

相手国の魅力を市民に周知するきっかけとなったことに加え、パネルの製作・掲示を通じて相手国関係者との交流を図れた点が有意義であった。



【パネル展示の様子①】



【パネル展示の様子②】



【パネル展示の様子③】

3) 交流イベントの開催及び万博関係者等の本市来訪

①スケジュール

～5月 大使館及び国際交流協会との協議・調整

6月 交流イベントへの招待

②体制

本市：関係者の来訪に係る大使館との連絡調整

大使館：国際交流協会及び本国関係者との連絡調整

国際交流協会：イベント企画運営

③内容

本市国際交流協会の主催により、ミクロネシア連邦関係者を招待するイベントを実施し、相手国の歴史や風土、伝統の紹介を通じて、市民と交流したほか、万博をPRした。

また、小学生のダンスチームが発表を行い、相手国関係者と子ども達の交流を図った。

相手国の都合により、当初予定していた本国のダンスチームの来訪は叶わなかったものの、駐日大使及び万博関係者によるステージイベントを実施した。

④効果

本市の市民に対しては、相手国の文化や伝統について知ってもらう機会となった。
また、大使をはじめとする大使館スタッフや、相手国の万博関係者との交流を通じて、更なる友好が図られた。



【大使館ブース】



【イベント全景】



【万博関係者（左）による伝統披露】



【大使館顧問（左）と大使によるステージ】



【市長（右）から大使へ だるま提供】

4) 万博会場訪問

①スケジュール

～7月 大使館、業者協議
会場訪問

②体制

本市：事業全般における企画調整

大使館：本国との連絡調整

国際交流協会：大使館との協議調整補助

③内容

令和7年7月31日に実施された相手国ナショナルデー及び記念レセプションへの招待を受け、市長及び国際交流協会等の関係者が出席し、相手国大統領をはじめとする政府関係者との交流を図った。

④効果

本市及び国際交流協会の関係者による訪問を通じて、相手国との更なる友好と交流、信頼関係が構築された。



【万博パビリオン訪問】



【ナショナルデーの様子】



【レセプション (左から) 榎本市長、



【レセプション市長挨拶】

ウェズリー・W・シミナ大統領、ジョン・フリッツ大使】

5) 本市の紹介動画制作

①スケジュール

9月 業者選定・打合せ

10～12月 動画制作・納品

②体制

本市：事業全般における企画調整

③内容

本市の歴史や特色を紹介する動画を制作し、相手国大使館及び本国関係機関に提供することで、本市に対する理解を深めていただく。

④効果

これまで相手国関係者に対し、本市の歴史等の詳細を伝える機会が無かったことから、本事業により制作した動画を提供することで、本市に対する理解を深めていただく良い機会となった。

本市においても、教育機関等への動画提供を通じて、子ども達に本市の歴史を学んでもらうきっかけとすることを検討したい。



【動画サムネイル】

(3) 事業の目標に対する成果

今年度は、万博を中心とした交流の実践と位置付けており、本市及び相手国の歴史や文化紹介を通じて、相互理解を深めることを重視した。

とりわけ、6月に実施した交流イベントでは、相手国関係者が直接会場を訪問し、伝統文化について市民に対して直に紹介いただく等、これまでになく交流が図られた。

また、万博ナショナルデー及びレセプションへ市長及び国際交流協会関係者が参加し、大統

領をはじめとする相手国政府関係者と交流したことで、本市との更なる友好が図られた点が大きな成果である。

（４）大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価))

前述のとおり、万博を中心とした交流を実践するために、本市及び相手国の歴史や文化等について理解を深めることを重視した。

また、本事業の実施にあたり、相手国大使館との強固な信頼関係を築けたものと考えており、万博終了後も相手国との継続的な交流が図られることが期待される。

加えて、対象事業とはしていないものの、前年度に実施した「学校給食における相手国関連メニューの提供」を今年度も継続して実施している。子ども達の中で相手国に対する認知が広がっていることから、次年度以降も本取組が継続されるよう、関係機関との協議調整を行っていく。

（５）こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

交流イベントの実施により、本市の子ども達が相手国の文化に触れる機会となったことに加え、外国語（特に英語）でのコミュニケーションが図られたことで、海外を身近に感じ、グローバルな視点を持つことに繋がったと考える。

アンケート結果によると、回答者の79%が、今後も相手国との交流や関係強化を望むと回答しているほか、イベントを通じて、地域内の交流にとどまらず、「新しい人に出会う」交流機会の創出にも繋がったとの回答を得ている。

（６）特に良かった点、苦労した点

1) 良かった点

事業を通じて相手国の歴史や文化について、こども達を中心とする市民に広く紹介できたこと。

また、相手国との密接な関係を構築できたこと。

2) 苦労した点

事業全般について、相手国（本国）との連絡調整に時間を要することが多かったこと。

（７）今後の展開

本事業を通じて築かれた本市と相手国の友好関係を更に発展させると共に、市民に対し、多

文化共生への理解を深めていきたい。

また、国際交流協会を中心とした民間レベルでの積極的な交流が継続することを期待する。行政においては、既存事業の中で相手国との交流促進を図る余地がないか検討し、無理なく継続して交流できる方法を模索していく。

(8) 今後の展開における課題

相手国との交流は本市国際交流協会との繋がりを契機としており、行政とはさほど長い交流の歴史を有していない。そのため、相手国と継続的な交流を図る上で、より密接で強固な関係を構築していく必要があることが課題となる。

3-3 群馬県甘楽町×ミクロネシア

1 背景と目標

(1) 背景

甘楽町は人口約 12,000 人で、農業や工業団地を中心とした産業を行っている自治体である。新幹線を利用すれば東京駅から約 90 分に到達できる位置にある。海外との交流では、甘楽町はイタリア国チェルタルド市との姉妹都市交流を 40 年以上、中華人民共和国ハルビン市との友好都市交流を 30 年以上続けている。オリパラ東京 2020 大会でもニカラグア国のホストタウンとして登録されており、国際交流を活発に行っている自治体であり、今後も国際交流を可能な範囲で取り組んでいく意思がある自治体である。甘楽町総合計画でも、「豊かな心と自分らしさを育むまち」として、「国際交流・都市交流の推進」を明記している。

(2) 課題

甘楽町がこれまで国際交流をしてきた国の言語は、イタリア語、中国語、スペイン語といった言語であり、英語圏がひとつもない。そのため、常に通訳を介したやりとりしかできないというところに課題があった。万博国際交流プログラムをとおして英語圏であるミクロネシア連邦とつながることで、小学校高学年以上から直接相手国の方々と会話できる可能性ができるため、そうした機会醸成を図るために、万博国際交流プログラムにミクロネシア連邦を登録した。

(3) 目標

令和 6 年度に「万博の機運を高める」ことを念頭にミクロネシア連邦飲食メニュー企画、甘楽中学校での有識者による講演、ミクロネシア連邦木工企画及びミクロネシア連邦への海外出張を実施した。

令和 7 年度は、これらの取組みの成果をもとに、ミクロネシア連邦との相互理解と国際交流を推進するため、万博ナショナルデーイベントおよびバビリオンにおける交流プログラムを実施することとした。

2 事業内容

(1) ジョン・フリッツ駐日ミクロネシア連邦特命全権大使と森平町長との面談

令和 7 年 6 月 2 日、甘楽町にジョン・フリッツ駐日ミクロネシア連邦特命全権大使と百恵大使夫人をお迎えし、森平町長と大阪・関西万博を契機として、ミクロネシア連邦と甘楽町との交流が促進されることへの期待などについて意見交換を行い、万博ナショナルデーイベントおよびバビリオンにおける交流プログラムについて、連携を深めていく

ことを確認した。

この訪問は、オリパラ東京 2020 大会でのミクロネシア連邦のホストタウンとなった富岡市でのイベントへの出席にあわせる形で実現したもので、万博国際交流プログラムを実施する中で富岡市や近隣自治体との将来に向けての広域連携にも貢献するものとなった。

上記面談の様子を甘楽町 HP に掲載することにより、地域住民や外部への発信を促進した。



写真左側から、森平町長、
フリッツ駐日特命全権大使、
百恵大使夫人

<https://www.town.kanra.lg.jp/kikaku/tokumei/expo/20250605152821.html>

(2) 万博ミクロネシア連邦ビジネスフォーラム及びナショナルデーイベント出席

上記フォーラム及びナショナルデーイベントに出席するため、甘楽町より以下の訪問団を派遣した。

【団員構成】

山田 光男	甘楽町議会副議長
中條 道明	甘楽町議会議員
萩原 一章	甘楽町議会議員
近藤 秀夫	甘楽町教育長
森田 隆博	企画課特命担当

【ミクロネシア連邦・日本ビジネスフォーラム】

①日時

令和7年7月30日（水）13時～15時

②会場

関西経理専門学校

③内容

フォーラムへの参加を通じ、ミクロネシアと日本との歴史、日本からの投資促進を通じた次世代に向けた持続的な経済協力関係の強化の方向性など、二国間の歴史的経緯とビジネスのトレンドについての理解を深めた。

また、フォーラムの合間に、甘楽町訪問団としてミクロネシア連邦シナ大統領とフリッツ駐日ミクロネシア連邦特命全権大使を表敬、甘楽町の特産品をお渡し、甘楽町とミクロネシアとの交流に触れならご挨拶をし、交流促進の機運の醸成に貢献した。

【ナショナルデーイベントへの出席】

①日時

令和7年7月31日（木） 11時～12時

②会場

EXPO ナショナルデーホール「レイガーデン」

③内容

式典では、「サカウの儀式」、「ウロンの儀式」が披露され、シミナ・大統領のスピーチに続き、伊東万博担当大臣より両国間の長年の友情を次世代にしっかりと引き継いでいきたい旨のご挨拶あり、その中で、甘楽町との交流についても言及があった。なお、式典に参加していた富岡市長他訪問団と会場にてご挨拶した。本イベントの参加を通じ、ミクロネシア連邦の豊かな自然と独自の文化及び日本との関係についての理解を深めた。

上記の取組みについて、甘楽町 HP に掲載することにより、地域住民や外部への発信を促進した。

<https://www.town.kanra.lg.jp/kikaku/tokumei/expo/20250806142944.html>



シミナ大統領にご挨拶する山田副議長
(左からシミナ大統領、フリッツ大使、山田副議長)



シミナ大統領と甘楽町訪問団(左から近藤教育長、山田副議長、シミナ大統領、萩原議員、中條議員)

(3) イベント事前打ち合わせのための国内出張

9月13日に開催を予定している万博会場でのイベント事前打ち合わせのため、甘楽町より以下の出張者を派遣した。

【出張者】

森田 隆博 甘楽町企画課企画係特命担当
宮本 夏歩 甘楽町企画課企画係
稲葉エンツァ 甘楽町地域おこし協力隊員

①日時

令和7年9月3日（水）

②会場

EXPO 会場

③内容

ミクロネシア連邦事務局クリス氏、万博協会ミクロネシア担当佐藤氏と万博会場にて打ち合わせを行い、会場確認、イベントタイトルと内容、役割分担、設備の準備、告知の方法など、具体的に確認を行った。この打ち合わせを対面で現場にて実施することにより、イベント運営関係者間の信頼関係を構築し、イベント成功に向けての機運を高めることが出来た。

(4) ミクロネシア連邦国際交流プログラムイベント開催

万博会場でのミクロネシア連邦国際交流プログラムイベント開催に伴い、甘楽町より以下の訪問団を派遣した。

【団員構成】

森平 仁志	甘楽町長
新井 六美	甘楽町議会議員
山崎 隆	甘楽町商工会会長
小林 保	甘楽町商工会副会長
新井 嘉之	甘楽町国際交流振興協会理事長
森田 隆博	企画課特命担当
宮本 夏歩	企画課企画係
稲葉 エンツァ	甘楽町地域おこし協力隊員

①イベントタイトル

【英】 Film & Talk show “Festival Exchange between Federated States of Micronesia and Kanra town”

【和】 フィルム&トークショー “ミクロネシア連邦と甘楽町の祭事交流”

②日時

令和7年9月13日（土）13時～14時30分

③会場

コモンズAファンクションルーム

④参加人数

約50名

⑤内容

在京ミクロネシア大使館スエナガ1等書記官の司会進行のもと、ミクロネシア万博委員会プログラムマネージャーのクリストファー氏、森平町長のご挨拶に続いて、ミクロネシアの国の魅力と伝統祭事サカウ（イベントの前に胡椒の木の根から作った飲み物を参加者で

飲む儀式)と、甘楽町の歴史、文化、伝統行事(武者行列で神前に献杯する様子を含む)を紹介する動画を上映した。

動画上映の後、質疑応答の時間を設け、クリストファー氏と森平町長より補足説明などを行い、それぞれの行事に対する参加者の理解と関心を深める機会とした。最後にスエナガ書記官より、ミクロネシアのサカウと甘楽町の神前で献杯には飲み物を共有することにより平和や繁栄を願うという共通点があり、戦後80年にあたる本年に万博イベントでお会いしたご縁を踏まえて一同で世界の平和と繁栄を願うこととしたいとのコメントを以て閉幕とした。

続いて参加者との交流時間を設け、甘楽町の伝統祭事で使われる地酒の試飲、ミクロネシアとの交流を契機に現地の主要農産物である胡椒とココナッツで味付けしたうどんスナック「menmen」の試食会を開催した。

参加者アンケートの結果(回答数22)では、以下の通り高い評価を得た。



コモンズ A ミクロネシアパビリオン



ミクロネシアとのイベントでの森平町長挨拶



イベント参加者の様子



交流タイムでの地酒試飲



ミクロネシア関係者と甘楽町訪問団



記念品贈呈

上記の取組みについて、甘楽町 HP に掲載することにより、地域住民や外部への発信を促進した。<https://www.town.kanra.lg.jp/kikaku/tokumei/expo/20250916143053.html>

3 事業の成果・効果

今回の万博国際交流プログラムの実施を通じて、以下のような成果・効果を得ることが出来た。

【Ⅰ】 地域社会への波及・活性化

一連のイベント対応について甘楽町ホームページや甘楽町議会を通じて発信し、またイベントに甘楽町議員、商工会、国際交流振興協会も参加し、これら主要な町のステークホルダーが一体となってイベントに関与したことで、国際交流の裾野を拡大し、地域社会への波及・活性化を図ることが出来た。

【Ⅱ】 教育・人材育成への貢献

学校での講演や生徒との交流（平成6年度）は、国際社会への理解を深めるきっかけとなった。また、今回の万博イベント準備、運営にあたって、役場の若手職員が積極的に関わってきたことで、役場の国際人材育成に貢献した。

【Ⅲ】 連携・創造による新たな価値創出

万博会場でのミクロネシア連邦国際交流プログラムイベントで、参加者との交流タイムで提供した「menmen」（ミクロネシアとの交流を契機に現地の主要農産物である胡椒とココナッツで味付けしたうどんスナック）は、ミクロネシア大使館にも高く評価頂き、別途製造元である甘楽町の富田製麺に大使館から発注を頂く展開となった。今回のイベントがビジネスチャンスに繋がり、連携・創造による新たな価値創出に繋がった。

また、今回のプログラムに、森平町長、町議会、商工会、国際交流振興協会から積極的に参加したことにより、町としての国際交流へのコミットが一層強化された。

【IV】 継続・発展に向けた基盤構築

9月の万博会場でのミクロネシア連邦国際交流プログラムイベント開催には、4月から足かけ半年程度かけて準備を行った。その間、ミクロネシア関係者とオンラインや対面でコミュニケーションを取り、また当日のイベントを協働して成功裏に導いたことで、相互の信頼関係が強固なものとなった。これらの相互信頼は、今後に発展のために必要不可欠な基盤であり、貴重な成果である。

また、万博閉幕後に、ミクロネシア連邦パビリオンでの展示物をミクロネシア万博委員会から町に無償で譲渡頂いた。甘楽町として万博の記憶を形として継承していくために、活用していきたい。

4. 大阪・関西万博レガシー創出に向けての取組

ミクロネシア連邦との自治体交流は、甘楽町だけでなく隣接する自治体である富岡市も行っている。富岡市は、ミクロネシア連邦とは40年以上にわたる交流実績があり、万博国際交流プログラムでも、ミクロネシア連邦との交流で大きな存在感を示されている。

現在、甘楽中学校でミクロネシア大使よりご講演を頂くことについて、大使館との調整を続けているが、来町のタイミングについては、富岡市国際交流まつりの開催時期との調整も図ることとしたい。

甘楽町は富岡市とも連携しつつ、甘楽・富岡地域での国際交流の発展に貢献する形で、大阪・関西万博愛豊できない取組を進めていきたい。

5. こども（または参加者）にとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

ミクロネシア連邦との交流を通じ、英語圏の国との直接的なコミュニケーションの可能性が具体化し、子どもたちにとって「英語を使って世界とつながる」実感を持てる契機となった。

また、ナショナルデーや万博会場での国際的な式典に触れることで、世界の多様な文化や価値観への理解が深まり、将来海外と関わる進学・就業への関心を高める効果が期待される。さらに、町として国際交流を積極的に推進している姿勢を示したことが、次世代に対し「地域から世界へ挑戦できる」という前向きなメッセージとなった。

6. 特に良かった点、苦勞した点

(1) 良かった点

ミクロネシア連邦大統領及び関係者との直接交流が実現し、町としての国際交流の存在感を万博の場で示すことができた。

また、町議会、商工会、国際交流振興協会等が一体となって参画したことで、行政のみならず地域全体で国際交流に取り組む体制を強化できた。

(2) 苦労した点

海外関係機関との調整や万博会場でのイベント運営準備にあたり、言語や時差、会場運営ルールへの対応など実務面での調整に時間を要した。

また、限られた人員体制の中で継続的に準備を進める必要があり、担当部署の負担が大きかった。

7. 今後の展開

万博を契機に構築した信頼関係を基盤とし、ミクロネシア連邦との教育・文化交流を継続的に推進する。

具体的には、学校現場での講演やオンライン交流の実施、地域イベントとの連携などを通じ、子ども世代を中心とした国際理解の深化を図る。

また、富岡市など近隣自治体との広域連携を強化し、甘楽・富岡地域としての国際交流の発展につなげる。

8. 今後の展開における課題

万博終了後も交流を継続するためには、安定的な予算確保と人的体制の維持が不可欠である。

また、単発的なイベントにとどめず、教育分野や地域経済分野へ波及させる仕組みづくりが求められる。

さらに、英語による直接交流を継続的に行うための人材育成や学校現場との連携強化が今後の重要な課題である。

3-4 千葉県横芝光町 × ベリーズ

(1) 背景と目標等

1)背景と目的

横芝光町は、東京 2020 オリンピックを契機にベリーズのホストタウンとして交流を進めてきた。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大により各種交流事業が中止となり、交流の継続・発展が困難な状況が続いた時期があった。これまで学生を中心とした国際交流イベントの開催や、2024 年には外務省後援「日・カリブ交流年 2024」において絵はがき交流事業が認定されるなど、一定の成果を上げてきたが、一方でベリーズとは時差がマイナス 15 時間あるため、特に小学生同士のライブ型オンライン交流が難しく、また地理的に距離が遠いことから、子どもたちを現地へ派遣することも容易ではない。また、国内在住のベリーズ人が少ないことから、対面での交流機会を確保することも課題となっている。

本プログラムでは、大阪・関西万博を契機に来日するベリーズ関係者との交流を通じて、横芝光町とベリーズとの関係性を一層深め、万博終了後も継続可能な国際交流の基盤を構築することを目的とする。あわせて、在ベリーズ日本国大使館や国際協力機構（JICA）と連携し、長期的な友好関係の構築を図るとともに、交流事業を町民に広く周知することで、ホストタウン事業から続くベリーズとの繋がりへの理解を深める。また、国際交流を通じて、今後一層進展するグローバル化に対応できる国際的な視野を持った人材の育成を推進し、次世代を担う子どもたちや若者が世界に目を向けるきっかけづくりとする。

2)目標

来日したベリーズ人に対し、横芝光町がこれまで継続してきた国際交流の取組や交流の歩みを知ってもらう。

町民がベリーズ人との交流・参画していただくことで、町内にいても国際交流を感じていただき、多文化共生を推進する。ベリーズの公用語は英語なので、学生には日ごろの英語学習から生の英語を体験していただき、将来の国際的な人材となることを視野にした進路が選択肢となるよう交流を図る。

(2)事業内容

1)事業名:大阪・関西万博ベリーズナショナルデー訪問

①スケジュール（交流事業の計画策定及び実施にあたっての実際の経過）

月日	内容
6月11日 ～	在ベリーズ日本国大使へベリーズナショナルデーの情報を共有。在ベリーズ日本国大使より外務省カリブ室へ繋いでいただき、最終的に大阪・関西万博儀典局を紹介していただく。

7月10日 ～	大阪・関西万博儀典局と連絡をとりはじめ、日程調整開始
7月17日	ベリーズナショナルデーについて、当日の予定など決定し、役場内関係各所へ情報共有
7月28日	大阪・関西万博儀典局へベリーズナショナルデー参加プログラムの参加情報提出
8月2日	ベリーズナショナルデーに参加のため、大阪府内に宿泊
8月3日	ベリーズナショナルデー当日。交流実施
10月1日	町広報紙へ記事掲載

②体制（交流事業の達成に向けた自治体及び相手国、交流関係団体の実施体制）

自治体・・・横芝光町企画空港課

相手国・・・ベリーズ

関係団体・・・在ベリーズ大使館、大阪・関西万博儀典局

③内容（日時、場所、取組内容、参加者、報道対応等）

日時	場所	取組内容	参加者	備考
8月3日 (11:00 ～12:00)	EXPO ナショナルデーホール「レイガーデン」	ベリーズ式典参列	佐藤晴彦(町長)、加瀬淳一(企画空港課長)、布施泰盛(主事)	
(12:15 ～13:30)	迎賓館	午餐会参加	佐藤晴彦	特別職のみ参加
(13:00 ～15:00)	コモンス-D館 ベリーズブース	チラシを用い、10月の文化交流イベントの案内	佐藤晴彦、加瀬淳一、布施泰盛	10月イベントチラシ配布

④効果

A:自治体内への波及効果・・・ベリーズ国の首相と交流ができ、横芝光町内部でのベリーズへの関心が高まった。

B:実施により達成できた成果・・・次期の交流計画で実施する交流イベントの案内交渉ができた。

C:相手国への波及効果・・・首相と町長の直接交流により、関係強化の土台ができ、ベリーズとの交流をさらに推進するきっかけとなった。



町広報紙 10月号記事

「ベリーズナショナルデー」に出席しました

大阪・関西万博

8月3日に開催された、大阪・関西万博の「ベリーズナショナルデー」に参加し、ベリーズとの友好関係を一層深めるとともに、国際的な舞台で貴重な交流の機会を得ることができました。

EXPOナショナルデーホールでは、ベリーズならではの音楽やダンス、飲食を交えた文化披露に、観客は魅了されていました。続いての午宴会では、佐藤町長が出席し、ベリーズのジョン・プリセーニョ首相との親交を深めることができました。ベリーズブースでは伝統的な工芸品や特産品、地域の魅力を伝える動画も上映され、ベリーズの豊かな歴史と文化に触れ、来場者に深い印象を与えていました。

今後もさまざまなイベントを通じて、ベリーズとの友好関係をより深めていきます。



「ベリーズナショナルデー」のイベントの
再ベリーズブース

（左）佐藤町長（右）ベリーズ首相
ジョン・プリセーニョ氏

2)事業名:ベリーズ文化交流イベント

①スケジュール (交流事業の計画策定及び実施にあたっての実際の経過)

月日	内容
8月5日～	大阪・関西万博儀典局からいただいた情報から、国際協力機構(JICA)経由で文化交流イベントを万博ベリーズ関係先へ案内を開始
8月20日	万博ベリーズ関係者より、ベリーズパビリオンスタッフ3名参加いただける連絡有り
8月28日	文化交流イベント内容の詳細が決定(昨年ベリーズ音楽イベントを実施したため、今年は料理を入れた講演式の交流イベント)
9月12日～	町担当者とベリーズパビリオンスタッフ代表者へ直接メールで連絡し企画調整、プレゼンテーション資料など作成依頼。また、宿泊・交通手配開始
9月25日	ベリーズパビリオンスタッフ1名が諸事情により来訪できない旨の連絡有り(宿泊・交通手配修正手続き)
10月4日	ベリーズパビリオンスタッフ2名を成田空港で出迎え、空港近隣ホテルに宿泊。翌日の確認
10月5日	ベリーズ文化交流イベント開催
12月1日	町広報紙へ記事掲載

②体制 (交流事業の達成に向けた自治体及び相手国、交流関係団体の実施体制)

自治体・・・横芝光町企画空港課

相手国・・・ベリーズ

関係団体・・・独立行政法人国際協力機構(JICA)

③内容 (日時、場所、取組内容、参加者、報道対応等)

日時	場所	取組内容	参加者	その他
10月5日 (11:00～12:30)	横芝光町町民会館調理実習室	・ベリーズパビリオンスタッフの2名が町民参加者へ、ベリーズ代表料理「エスカベーチェ」の調理教室を行う。	町民5名	通訳として国際協力機構(JICA)協力
(13:00～15:00)	横芝駅前情報交流館「ヨリドコロ」	・ベリーズパビリオンスタッフの2名が参加者へスクリーンを用い、「ベリーズ」と「万博での展示」についてプレゼンテーションを行い、終盤は午前中に調理したエスカベーチェを参加者で食す。	町民20名程度	通訳として国際協力機構(JICA)協力

④効果

A:自治体内への波及効果・・・今回の交流イベントを通して、国際協力機構(JICA)様とも深い交流ができました。また、午後のプレゼンテーション参加者の紹介から、来年度以降の事業案としてベリーズとのスタディツアーの情報を得ることができました。

B:実施により達成できた成果・・・料理教室という体験型交流を通じて、参加者がベリーズの食文化や生活を身近に感じることができ、ベリーズの方々と直接関わることで国際交流を実感していただいた。さらに、その後の国紹介や大阪・関西万博におけるベリーズ展示のプレゼンテーションを通じて、ベリーズの歴史・文化・魅力への理解が一層深まるとともに、異なる文化や考え方に触れることで、多様な価値観を理解し、自身の視野を広げるきっかけとなった。また、ベリーズと横芝光町の交流について、行事年表を配布しこれまで続けてきた国際交流の取組や交流の歩みを知っていただけた。

C:相手国への波及効果・・・ベリーズ料理を一緒に作り、食べる体験は、言語や文化を越えた濃い交流を生み、ベリーズに対する好意的な印象の形成につながる。また、将来的に観光・人脈交流としてベリーズ観光、留学・滞在、スタディツアーなどへの関心喚起につながった。



万博が繋いだ奇跡

ベリーズ文化交流イベント

10月5日、大阪・関西万博のベリーズブースで活躍されていたチャントル ヒルさんとチェルシー エヴリンさんをお迎えし、ベリーズとの文化交流が行われ、異文化の素晴らしさを分かち合いました。

午前の部は、町民会館でベリーズの代表的な料理「エスカパーチェ」を共同で調理。鶏肉と玉ねぎがメインのスープは酸味と辛味が特徴で、スパイスを細かく調合する姿からは、ベリーズの食文化への深い情熱が伝わりました。私たちが普段使わない複雑なスパイスの扱いに異文化の奥深さを改めて知りました。

午後の部は、横芝駅前情報交流館「ヨリドコロ」で、ベリーズの観光スポットや万博での展示について、パビリオンスタッフならではの視点で紹介いただき、ベリーズの公用語である英語での案内は参加者全員の心に深く残り、国境を越えた感動を与えてくれました。またプレゼンテーション後、午前の部で作ったエスカパーチェを全員で味わいました。

この交流を通じて、互いの文化の違いを尊重し認め合い、共に成長できる真の多文化共生社会を築いていきます。



ベリーズ代表料理の一つ「エスカパーチェ」を調理。チャントル ヒルさんがメインで調理指導、チェルシー エヴリンさんが参加者をサポート。



参加者全員で記念撮影

②体制（交流事業の達成に向けた自治体及び相手国、交流関係団体の実施体制）

自治体・・・横芝光町企画空港課

月日	内容
8月19日	国際協力機構(JICA)へ元 JICA 海外協力隊でベリーズに派遣されていた白井様の情報提供
8月25日	白井様及び国内大学に在学しているベリーズ人留学生3名のイベント参加希望の連絡有り
9月1日～	学生交流イベントの日程や実施内容等を白井様、ベリーズ人留学生3名と共有
10月1日～	白井様及びベリーズ人留学生3名へプレゼンテーション資料依頼。英会話の催し物について企画開始
11月1日	白井様及びベリーズ人留学生3名を成田空港で出迎え、空港近隣ホテルに宿泊。翌日の確認
11月2日	ベリーズ学生交流イベント開催
R8年1月1日	町広報紙へ記事掲載

相手国・・・ベリーズ

関係団体・・・独立行政法人国際協力機構(JICA)

③内容（日時、場所、取組内容、参加者、報道対応等）

日時	場所	取組内容	参加者	その他
11月2日 (10:00～11:30)	横芝光町町民 会館大ホール	・元 JICA 海外協力隊でベリーズに派遣されていた白井亜奈様による「ベリーズってどんな国？」のプレゼンテーション ・ベリーズ人留学生による自己紹介から大学での研究内容について発表 ・催し物「インタビューゲーム」による英会話の実施	町民	白井様通訳対応

④効果

A:自治体内への波及効果・・・国際協力機構(JICA)との更なる関係構築ができ、次回のベリーズ交流を国内で行う際の案内先として白井様やベリーズ留学生の方々との繋がりができた。また、日本に在住しているベリーズの方と間近で接することで、参加者に限らず自治体側も外国人との多文化共生の社会を間接的に感じる事ができた。

B:実施により達成できた成果・・・ベリーズの公用語が英語という点と、町内の子どもたちへの英語学習の向上が合致しており、催し物である「インタビューゲーム」を行うことで、生の英語を体験していただき、将来の国際交流を視野にした進路選択としての

交流を行うことができた。

C:相手国への波及効果・・・日本側へのベリーズ人材の価値や可能性を可視化する機会となり、将来的な学術・人的交流の拡大につながった。



「ベリーズってどんな国？」を開催

11月2日、町民会館大ホールで「ベリーズってどんな国？」が開催されました。

元JICA海外協力隊ベリーズ派遣員と、ベリーズからの留学生3人を招いて交流を行い、ベリーズの文化や留学生が取り組んでいる研究を英語で紹介した

いた後、参加者から留学生に英語で質問する「インタビューゲーム」が行われ、ベリーズの魅力や文化への理解、町民のみなさんとのつながりがさらに深まる一日となりました。



左から、白井亜幸講師、Mr.Edgar Correa、Ms.Cecy Catillo、Mr.Jose Tillet

(3) 事業の目標に対する成果

招致したベリーズ人の方々に対し、会場装飾や配布資料として当町とベリーズとのこれまでの交流行事を年表形式で紹介し、通年にわたる相互の交流を理解していただく機会を設けた。これにより、これまで築いてきた友好関係を改めて共有し、相互理解の深化につなげることができた。

また、町民向けには、料理体験を取り入れた文化交流イベントを実施し、食を通じて異文化を身近に感じていただくきっかけを作った。参加者からは、国際交流を実感できたとの声が多く寄せられるとともに、今後も他国の文化に触れる交流事業を継続してほしいという要望が寄せられた。さらに、学生交流イベントでは、ベリーズの文化や教育事情について学ぶ機会を提供するとともに、ベリーズ留学生による「生の英語」に触れられるプログラムを実施した。英語学習の一環として行った「インタビューゲーム」では、参加者が実際に英語を使ってコミュニケーションを体験し、英語への関心や学習意欲の向上につながった。

これらの取組を通じて、参加者が海外や他国に目を向け、外国人をより身近な存在として捉える意識が醸成され、学生から大人まで幅広い世代において国際交流への興味・関心を高めるといふ、事業目標に沿った成果を得ることができた。

(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価))

この1年大阪・関西万博を契機として、相手国であるベリーズとの継続的かつ多層的な交流関係の構築を目的に実施した。8月3日の大阪・関西万博におけるベリーズ・ナショナルデーでは、町長および関係職員が現地参加し、ベリーズ関係者と直接対面で話したことで、横芝光町とベリーズの関係性を再確認するとともに、万博を通じた交流の第一歩を築いた。

10月5日にはベリーズパビリオンスタッフ2名を横芝光町に招き、万博での展示内容やベリーズの魅力に関するプレゼンテーションを実施した。この交流イベントのアンケート結果から「若い世代にグローバルな視点を育むため、小・中・高等学校間での交流を含めた国際交流の機会を充実させてほしい」との意見が寄せられた。その後、参加者の方から情報提供をいただき、ベリーズの学校で教員を務めている方を紹介いただいた。来年以降の事業案として、現在その教員の方と企画調整を行い、ベリーズと当町との学生スタディツアーに向け検討を進めている。

11月2日には、元JICA海外協力隊としてベリーズで活動経験のある講師による講演や、ベリーズ人留学生による研究発表、英会話を体験する「インタビューゲーム」を実施し、万博をきっかけとした国際交流を教育・人材育成の分野へと発展させた。これにより、万博終了後も国内でベリーズとの継続可能な人的交流の基盤を構築することができた。

これら一連の取組は、万博という期間限定な国際イベントを契機としながらも、食・文化・教育・人的交流といった複数の分野に広がる交流へと発展し、万博閉会後においてもベリーズとの関係性を継続・深化させるためのレガシー創造に寄与するものと考えられる。今後も、ベリーズとの交流を継続的に実施することで相互理解と地域の国際化を推進していく。

(5) こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

本プログラムを通じて町民へ紹介したベリーズは、広大な熱帯雨林に生息する多様な野生動物や、世界的にも貴重な珊瑚礁が広がる美しい海などの豊かな自然環境に加え、先住民文化、アフリカ系、ヨーロッパ系などが融合した多様な文化を併せ持つ国である。こどもたちは、写真や映像、実際の交流を通して、教科書だけでは知ることのできない世界を体験することで、日本とは異なる生活様式や価値観、文化背景を持つ人々が世界には数多く存在していることを、より具体的かつ実感をもって理解する機会を得た。また、実際に国外で学び、活躍している人物の話聞くことで、「将来は日本の外でも学んでみたい」「外国の人と関わる仕事をしてみたい」といった前向きな意識が芽生え、こどもたち自身の将来像を広げるきっかけとなった。異文化への関心や英語をはじめとした言語学習への意欲向上にもつながり、自分の可能性は身近な地域にとどまらず、世界へと広がる可能性について希望を感じさせる効果があったと考えられる。

参加者アンケートからは、これからの国際社会を生きていく上で、国際理解やグローバルな視点を持つことは不可欠であり、自治体においてもグローバル化が進む中、こうした交流事業が住民の意識改革につながるとの意見が寄せられた。また、国際交流を単に視野を広げる機会とするだけでなく、文化や価値観、モラルやマナーの違いについて相互に理解を深めることが重要であり、それが安全で友好的な多文化共生社会づくりにつながるとの考えが示された。

差別や分断を生まないための相互理解のきっかけとして、外国人と日本人が助け合い、共に暮らせるコミュニティ形成の大切さが指摘されるとともに、このような交流を通じて双方の国や人々への理解を深め、知見を広げることが大切であるとアンケート結果から示唆された。

本プログラムは、こどもたちが世界の広さや多様性を知り、将来に対して前向きな夢や目標を描くための一助となり、将来への希望を育む効果を発揮したものと思われる。

(6) 特に良かった点、苦労した点

1)良かった点

東京 2020 オリンピックから交流があった当町だが、まだまだ町内のベリーズとの交流に対する認知度は低い様子。交流イベント用に作成した資料を説明・配布したところ、関心を示していただけた。ベリーズ側も、横芝光町の自然風景に驚き、町民との触れ合いを楽しみながら協力いただけた。

2)苦労した点

国際交流担当者の英語能力が低いため、メールでの交渉・依頼・指示や、当日咄嗟に英語で意思疎通を図ることが困難であった。今年度のプログラム着手について、経費申請が最終回目前であったため、それに伴い取り掛かりに出遅れが生じた。また、今年度の交流計画を具体化するにあたって、発案から企画、実行まで非常にタイトな日程となった。イベントの集客においては、少子高齢化が顕著に進行している当町におい

ては、参加対象者の確保に困難が伴い、集客面において課題が生じた。

(7) 今後の展開

今後は万博国際交流プログラムで繋がったベリーズパビリオンスタッフやベリーズ人留学生と連絡を取り、町内で実施可能なベリーズとの国際交流を継続していきたい。

また、上記(4)でも記載したとおりベリーズの学校とのスタディツアーの候補先として、東京2020オリンピックから交流が深い横芝光町を希望いただいております、まずはこの貴重な申し出を来年以降に実現するため、検討を進めていきたい。

ベリーズとの取組を継続するにあたり、今回ご協力いただいた関係団体や元JICA海外協力隊員の白井様、ベリーズ留学生とは今後も定期的な連絡を入れ、関係構築を深めていきたい。

(8) 今後の展開における課題

今後の課題としては、ベリーズパビリオンスタッフやベリーズ人留学生との継続的な連絡・調整を行うための体制整備が必要となると考えられる。担当者の異動や関係者の帰国等により人的つながりが途切れないようにするため、組織としての連絡先や情報共有の仕組みを構築することが必要である。

次に、スタディツアーの実施に向けては、受入体制の確保が重要となる。宿泊先や受入学校、交流プログラムの内容など関係各所への調整とそれに伴う準備に時間を要することが想定される。

また、ベリーズとの交流事業を継続的に実施していくためには、安定した財源の確保も大きな課題である。国や県の制度から補助金や助成の活用に加え、町単独事業としての位置付けや予算化することについても検討が必要である。

国際交流全般に言えることだが、町民や学校現場の理解と協力を得ることも重要であると考えられる。近年、外国人増加から外国人に関する問題も増えてきた印象がある。そういった背景の中、国際交流を行うことは人によっては治安の悪化を懸念する可能性がある。国際交流への関心には個人差があるため、事業の意義や効果を分かりやすく発信し、幅広い世代の参加を促す工夫が今後は求められる。

これらの課題を踏まえ、関係団体やベリーズ側関係者と定期的に情報共有しながら、交流を継続・発展させていくことが今後の重要な取組となる。

3-5 東京都渋谷区 × トルコ

(1) 背景と目的

1) 背景

本プロジェクトは、大阪・関西万博を契機として国際交流を促進し、地域の文化的多様性を高めることを目的に実施した。

今回の取り組みはその延長線上に位置付けられる。地域における異文化理解の促進、教育的価値の提供、音楽を通じた国際交流の活性化を背景として、本プロジェクトを企画した。

2) 目的

本プロジェクトは、以下の目的を達成することを目指し、企画・実施した。

- ・2025年 大阪・関西万博を契機に、地域と世界をつなぐ音楽・国際文化交流の場を創出する。
- ・大阪・関西万博参加国であり、渋谷区と友好都市であるウスキュダル区を有するトルコ共和国に、渋谷区の学生を派遣したり、大阪万博トルコパビリオンに訪問することで、トルコ共和国及びウスキュダル区に対する知見と交流を深め、グローバルな視点で活躍できる青少年人材を育成することを目的とする。

(2) 事業内容

1) トルコ共和国学生派遣事業

日程：令和7年8月16日（土）～23日（土）

内容：渋谷区と友好都市であるウスキュダル区を有するトルコ共和国に、渋谷区の学生を派遣することで、トルコ共和国及びウスキュダル区に対する知見と交流を深め、グローバルな視点で活躍できる青少年人材を育成することを目的とした派遣事業。

主な訪問先：

- ・イスタンブール（ウスキュダル区役所・トプカプ宮殿・ブルーモスク 他）
- ・カッパドキア（ギョレメ野外博物館・カイマクル地下都市 他）
- ・アンカラ（日本大使館・土日基金）
- ・ブルサ（ブルサ防災博物館 他）

派遣団員：渋谷区在住の高校生、1次審査は書類、2次審査は面接にて審査・選考を行った

主な交流内容

● 土日基金での発表会

日本とトルコの共通課題である「防災」をテーマに高校生が土日基金（JICA 関連機関）にてプレゼン発表を実施した。今回、トルコ現地でプレゼンテーションを行ったことは、トルコ側はもちろん渋谷区側（学生、学び支援係、防災課関係者）にとっても防災に対する意識を再向上させる機会となった。現地職員や学生から直接意見をいただくことで、万博が目的とするグローバルな視点を持つ人材育成に寄与できた。



● ウスキュダル区役所訪問

渋谷区と友好都市協定を締結しているウスキュダル区役所を訪問した。訪問時には、ウスキュダル区における防災の取組について傾聴し、記念品の交換を行った。また、友好都市の象徴である渋谷公園を現地職員とともに訪れ、交流を深めた。



2) 関西・大阪万博トルコパビリオン訪問

日程：令和7年9月7日（日）

場所：大阪万博トルコパビリオン 他

内容：大阪・関西万博参加国であり、渋谷区と友好都市であるウスキュダル区を有するトルコ共和国パビリオンを訪問・交流を行うことで、渋谷区とトルコ共和国及びウスキュダ

ル区の交流を深める。訪問メンバーは8月のトルコ共和国学生派遣事業に応募した渋谷区に在住の高校生をスカウトした。

トルコパビリオンでの交流は、文化や価値観の違いを超えて共通点や新たな視点を見出し、国際理解を深める貴重な体験となった。



3) トルコ学生派遣事業報告会

日程：令和7年9月21日（日）

場所：渋谷区の生涯活躍ネットワーク「シブカツ！」にて運営している渋谷ハチコウ大学
※内の公開講座で8月16日～23日の派遣事業の帰国後報告会を実施。万博に関する説明も行った。

※渋谷区内の55歳以上を対象として、生涯活躍を考える・探すきっかけとして、新たな学びの機会を提供する区民大学

〈タイムスケジュール〉

11:00～11:05 渋谷区とトルコの友好都市や今回の事業に関する説明

11:05～11:50 今回の訪問（訪問先、思い出）、トルコの魅力を紹介

11:50～12:00 質疑応答・まとめ



4) 世界最強！？～伝統のトルコ弓を体験しよう！

日時：2025年10月5日（日） 10:00～13:00

場所：渋谷区スポーツセンター第3武道場（渋谷区西原1-40-18）

内容：渋谷区在住・在学の小中学生を対象としたトルコ弓道教室。トルコ弓道の歴史や特徴についてレクチャーを受けながら弓道体験を行い、トルコの歴史や文化を体を動かしながら体験することができた。



5) くみんの広場渋谷ふるさとフェスティバル トルコブース運営

日時：令和7年11月1日（土）～2日（日）

場所：代々木公園イベント広場 他

内容：2025年8月16日から23日にかけて、大阪・関西万博参加国であり、渋谷区と友好都市であるウスキュダル区を有するトルコ共和国に、渋谷区の学生を派遣した。その記録と、今年度で20周年を迎える渋谷区とトルコ共和国ウスキュダル区との友好都市関係の記録を区民に広く周知するため、毎年開催している「渋谷区くみんの広場 渋谷ふるさとフェスティバル」において、ウスキュダル区友好都市ブースを設置した。ブースの展示にはトルコ大使館、ユヌス・エムレ・インスティトゥート東京にも協力いただき来場者に渋谷区とウスキュダル区の友好都市連携について知ってもらえる貴重な機会となり、さらに、現地を訪れた高校生が体験談を語り、交流の意義を直接伝える場をつくることができた。



①実施に至った経緯

渋谷区とトルコ共和国は、古くから関わりが深く、1937年には渋谷区大山町に、トルコ人児童のための小学校が建設された。同地には、現在トルコ共和国により、イスラム礼拝場である東京ジャーミイが建設され、国内最大級のイスラム寺院として、現在でも地域で親しまれてきた。1978年には、トルコ共和国大使館が渋谷区神宮前に移設され、渋谷区と長く交流を行っており、このような関わりから、渋谷区民とトルコ共和国民との友好交流を進展させるため、2005年9月には友好都市協定が締結された。

そして今年は渋谷区とトルコ共和国ウスキュダル区の友好都市協定20周年を迎え、内閣官房「万博国際交流プログラム」の一環として、小中校生を中心とした交流、派遣事業を実施するに至る。

②実施スケジュール

- ・ 令和7年8月16日～23日 トルコ共和国学生派遣事業
- ・ 令和7年9月7日 関西大阪万博トルコパビリオン訪問
- ・ 令和7年9月21日 渋谷ハチコウ大学 トルコ共和国学生派遣事業報告会
- ・ 令和7年10月5日 トルコ弓道教室
- ・ 令和7年11月1日～2日くみんの広場渋谷ふるさとフェスティバル トルコブース運営

③実施体制

- ・ 主催：渋谷区役所
- ・ 委託事業者：
株式会社JTB（トルコ共和国学生派遣事業）
株式会社エイチ・アイ・エス（関西大阪万博トルコパビリオン訪問）
協力：ユヌス・エムレインスティトゥート東京・トルコ大使館
助成：内閣官房万博国際交流プログラム

（3）事業の目標に対する成果

渋谷区の小中高生を中心にトルコの文化や渋谷区とウスキュダル区の友好の歴史を伝えることができた。

実際にトルコ現地に行くことで、高校生たちがトルコの歴史や文化、そしてトルコの方々の人柄に触れることができ、貴重な体験を提供することができた

各事業では大使館やJICA、ユヌス・エムレ・インスティトゥート東京など、国際交流にまつわる関連団体と協力することができた。今回連携を強めたことにより、今後も様々な事業での協力を期待できる。

（4）大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価))

本プロジェクトでは、国際文化交流・理解を深める体験させることができた。今後もこの交流を継続し、持続可能な文化活動としてさらに広げていくことを期待する。特に今回の事業でつながった団体や、交流が減っていたウスキュダル区役所とも改めて連携することができ、今後の様々な事業への発展に期待できる。

(5) こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

本事業では、渋谷区在住の高校生が実際にトルコ共和国を訪問し、防災をテーマとしたプレゼンテーションや現地学生との交流を行うことで、国際社会における自らの役割を具体的に意識する機会となった。

また、大阪・関西万博トルコパビリオンの訪問や、帰国後の報告会、弓道体験教室、区民向けイベントへの参画を通じて、学びを地域へ還元する経験を得たことは、主体的に社会と関わる姿勢の醸成につながった。

異文化の中で対話し、自らの考えを発信する体験は、将来グローバルな視点で活躍する人材としての可能性を実感させる機会となった。

(6) 特に良かった点、苦勞した点

【良かった点】

- ・ 土日基金での高校生による防災プレゼンが、日本とトルコ双方の防災意識を高める機会となった。
- ・ 現地職員や学生から直接意見をもらうことで、万博の目的である国際的な視野を持つ人材育成に寄与できた。
- ・ ウスキュダル区役所訪問で、防災の取組を学び、記念品交換や渋谷公園訪問を通じて交流を深めた。
- ・ トルコパビリオンでの対話を通じ、異なる文化や価値観を超えて共通点や新たな視点を見出し、国際理解を深める体験となった。
- ・ トルコ弓道教室で、歴史や文化を学びながら実際に体験することで、子どもたちに楽しく学べる機会を提供した。
- ・ 渋谷ふるさとフェスティバルでウスキュダル区友好都市ブースを設置し、現地体験談を高校生が直接語ることで交流の意義を広く周知できた。

【苦勞した点】

- ・ 現地トルコ人の方で英語が使えない方が多く、翻訳や通訳面で苦勞することがあった。
- ・ トルコ派遣事業については、現地での飛行機スケジュール等がタイトになっており、思ったより交流の時間は持てなかった。
- ・ トルコ弓道教室については、弓を打つまでに待ちの時間があつたりして小学生が退屈する場面が見受けられた。時間の使い方について、今後は綿密に事業者と打合せを行いたい。

(7) 今後の展開

本事業を契機に構築した関係性を基盤として、渋谷区とウスキュダル区の交流をさらに発展させていく。

具体的には、渋谷区長のウスキュダル区訪問及びウスキュダル区長の渋谷区訪問を通じ、首長間の相互往来を実現し、友好都市関係を一層強化する。

また、ゴミ問題や防災、文化分野など、両区が共通して取り組む政策課題において連携事業を推進する。あわせて、ユヌス・エムレ・インスティトゥート東京との協定締結を視野に入れ、事業連携を円滑に進める体制整備を図る。

さらに、今回協力した高校生が次年度以降の「くみんの広場」等のイベントにも参画できる仕組みを構築し、継続的な関与を促す。加えて、渋谷ハチコウ大学においてユヌス・エムレ・インスティトゥート東京や東京ジャーミイと連携した講座を実施するなど、生涯学習分野とも接続しながら持続的な交流を展開する。

(8) 今後の展開における課題

継続的な国際音楽・文化交流を実施していくためには、安定的な財源の確保が重要な課題である。

また、首長往来や政策分野での連携を具体的な事業へと発展させるためには、関係機関との調全体制の強化と実務レベルでの継続的な連携が必要である。

さらに、参加した高校生の経験を単年度で終わらせることなく、区全体の教育施策や地域イベントへ継続的に接続していく仕組みづくりが求められる。

3-6 東京都渋谷区 × ペルー

(1) 背景と目標等

1) 背景

渋谷区は、区内に在日ペルー共和国大使館が置かれていることに端を発し、2024年6月にペルー共和国リマ市ミラフローレス区との姉妹都市提携を締結。多様な分野での事業連携を通じて互いの優れた取り組みを共有するとともに、幅広い年齢層の国際交流を促進することにより、国際都市として共に発展する関係を構築することを目指している。

2) 目的

万博国際交流プログラムを契機とした渋谷区民とペルー共和国関係者との交流等を通じて、相手国の新たな視点を取り込んで、今後のさらなる姉妹都市交流の促進へとつなげることを目的とする。

(2) 事業内容

1) 大阪・関西万博ペルー・ナショナルデー訪問

8月9日(日)に行われたペルー・ナショナルデーに合わせて、令和7年2月万博国際交流プログラムでペルーに派遣した区内在住の大学生4人が大阪・関西万博を訪問し、ペルー・ナショナルデーのスタッフとして、セレモニーやパレードのサポートを行った。

【日 程】令和7年8月8日(金)～8月9日(土)



【ナショナルデーの様子】



【日秘学生同士の交流】

2) ペルー共和国学生派遣

ペルー共和国及びミラフローレス区に対する知見と交流を深め、グローバルな視点で活躍できる青少年人材を育成することを目的として、ペルー共和国に、渋谷区在住の大学生4名を派遣した。

【日 程】令和7年9月10日（水）～9月19日（金） 10日間



【ミラフローレス区表敬訪問】



【在ペルー日本大使館】



【ペルー日系人協会訪問】



【ミラフローレス区での発表会】

3) 第48回渋谷区くみの広場での報告会

第48回渋谷区くみの広場 ふるさと渋谷フェスティバル内「姉妹都市PRブース」にて学生の資料の展示、説明とペルーへの寄せ書きを実施。

【日程】令和7年11月1日（土）

※11月2日（日）には同イベントに於いて令和6年度ペルー共和国学生派遣事業の派遣学生が報告会を実施した。



4) 広尾小学校での報告会

渋谷区にある在ペルー日本大使館の付近の広尾小学校の授業一時間で小学校5年生向け帰国後報告特別授業を実施した。（児童が関心を持てるようクイズ形式の体験型授業も実施）

【日 程】令和7年11月18日（火） 10：40～11：25



5) 渋谷ハチコウ大学での報告会

渋谷区の生涯活躍ネットワーク「シブカツ！」にて運営している渋谷ハチコウ大学※内の講座で帰国後報告会を実施した。（※渋谷区内の55歳以上を対象として、生涯活躍を考える・探すきっかけとして、新たな学びの機会を提供する区民大学）

【日 程】令和7年12月8日（月）16:30～17:30



①実施に至った経緯

令和6年6月26日にペルー共和国リマ市ミラフローレス区と姉妹都市提携を締結したことを機に、ミラフローレス区と渋谷区の交流の機会を創出するために、令和6年度に引き続き、令和7年度本プログラムへの申請を行った。

②実施スケジュール

令和7年6月10日 ペルー共和国学生派遣 第1回事前研修

令和7年7月2日 ペルー共和国学生派遣 第2回事前研修

令和7年8月5日 ペルー共和国学生派遣 第3回事前研修、大阪・関西万博ペルーナショナルデー訪問 事前研修

令和7年8月8日～9日 大阪・関西万博ペルーナショナルデー訪問

令和7年9月8日 ペルー共和国学生派遣 第4回事前研修、副区長激励会、在日ペルー大使館訪問

令和7年9月10日～19日 ペルー共和国学生派遣

令和7年10月9日 ペルー共和国学生派遣 第1回事後研修、区長・副区長報告会

令和7年10月24日 ペルー共和国学生派遣 第2回事後研修

令和7年11月1日、2日 ペルー共和国学生派遣 第48回渋谷区くみんの広場報告会
令和7年11月18日 ペルー共和国学生派遣 広尾小学校報告会
令和7年12月8日 ペルー共和国学生派遣 渋谷ハチコウ大学報告会

③ 実施体制

・大阪・関西万博ペルー・ナショナルデー訪問

主催：渋谷区

協力：在日ペルー大使館

委託：株式会社エイチ・アイ・エス

・ペルー共和国学生派遣

主催：渋谷区

協力：ミラフローレス区、在日ペルー大使館、在ペルー日本大使館、JICA ペルー、JF ペルー、APJ※1リマ、APJ クスコ、AELU※2、マチュピチュ村日本語教室

委託：株式会社エイチ・アイ・エス

※1 APJ（アペホタ）＝ペルー日系人協会、※2 AELU（アエル）＝ラ・ウニオン運動場協会（日系人団体運営の総合運動施設）

（3）事業の目標に対する成果

・渋谷区では、令和6年6月26日にペルー共和国リマ市ミラフローレス区と姉妹都市提携を締結し、幅広い年代層での国際交流を促進することを目指していたが、区民同士の具体的な交流計画の目途は立っていなかった。その中で本プロジェクトに採択されたことで、青少年同士の交流の機会を創出し、国際都市として共に発展する関係をスタートすることができた。

・本プロジェクトを通して、姉妹都市であるミラフローレス区とのさらなる交流や事業連携を進めることで、万博参加国であるペルー共和国の魅力を多くの区民に周知することができた。また、渋谷区在住の青少年がペルー共和国及び姉妹都市であるミラフローレス区で、現地の青少年と交流し、両都市の未来を担う青少年同士の相互理解を深める機会を創出することができた。

（4）大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価))

本事業を進める中で、渋谷区とミラフローレス区とで多くの対話の機会があった。その中で、お互いの信頼関係が構築されたり、新たな連携の可能性が生まれたりということがあった。

本プロジェクトを経て強くなったお互いの信頼関係を礎として、両区が国際都市としてさらなる成熟を遂げられるよう、今後も多方面に渡る事業連携を通じて対話を重ねていきたい。

(5) こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

本事業では、渋谷区在住の大学生がペルー共和国および姉妹都市ミラフローレス区を訪問し、現地学生との交流や発表会を通じて対話を重ねる機会を得た。

異なる文化や社会背景を持つ同世代と直接交流することで、自らの視野を広げ、国際社会において主体的に行動する意識が醸成された。

また、帰国後に小学生や区民向けに報告会を実施し、自身の体験を社会へ還元した経験は、将来にわたり国際的に活躍する意欲や社会参画意識を高める契機となった。

(6) 特に良かった点、苦勞した点

【良かった点】

- ・本事業を実施したことで、渋谷区民がペルー共和国や姉妹都市であるミラフローレス区の人々について知る機会を多数創出することができた。
- ・青少年同士の交流を通じて、両区の信頼関係の礎を築くことができた。
- ・実際に現地を訪れた学生の報告を小学生からシニアまで幅広い世代に対して複数の場で行うことで、より多くの区民に現地の様子を知らせることができた。
- ・派遣学生が各自学習テーマを設定して渡航したので、様々な角度からペルーやミラフローレス区を掘り下げて見ることができ、そこで得た視点を他の渋谷区民にも共有することができた。
- ・本事業の実施を目指して、ペルー共和国、ミラフローレス区、両国大使館、両国政府機関等、たくさんの方と対話する機会があり、多方面に渡る繋がりを得ることができ、今後の交流や事業連携の土台作りをすることができた。

【苦勞した点】

- ・ミラフローレス区の姉妹都市担当者は英語を得意としなかったため、自動翻訳機を使ったスペイン語でのやり取りに苦勞することがあった。
- ・現地との調整を行うにあたり、オンラインでの打合せが役立ったが、時差が大きく、打合せ日を設定するのに苦勞した。
- ・社会情勢による航空券の値段変動が読みづらく、連れていく学生の人数の目途を立てるのが難しかった。
- ・応募学生全員をペルーに連れていくことができないので、選考しなくてはならず、公平な選考のために時間と労力がかかった。

・学生をペルーに連れていくにあたり、長時間フライト、時差、治安面、体力面など、気を遣うことが多くあった。

(7) 今後の展開 及び (8) 今後の展開における課題

1) 今後の課題

今後、本事業を展開するにあたり想定される課題の一つとしては、更なる事業連携や交流を推進するための区民からの理解が得られるかどうかが挙げられる。今回のプロジェクトで得た成果をなるべく多くの方に知っていただき、今後の更なる事業展開への理解を得られるようにしたい。具体的には、派遣学生による報告会や、くみんのひろばでの報告、ホームページなどを通じた報告を行っていききたい。

もう一つの課題として予算の問題があげられる。万博国際交流プログラムとしての事業が終わった後にも、引き続き本事業を展開していけるように、様々な機会を模索していききたい。

2) 今後の展開内容

今回の万博国際交流プログラムを通じて得た姉妹都市間、両国間の信頼関係をもとに、更なる事業連携へとつなげていききたい。記念公園の設置や、スタートアップ分野での連携などについて、対話を深め、実現に向けて協力していききたい。

また、派遣した学生たちに対してもこの事業限りではなく、様々な機会を通して、渋谷区とミラフローレス区やペルー共和国との関係について発信してもらう機会を創出したい。

また、今回のような機会を通して、なるべく区民同士が交流できる機会を創出し続けて行けるように工夫したい。

3) 持続的に展開するための工夫

本事業を持続的に展開していくために、本事業の意義を区民に理解していただけるよう、今後多様な場面で成果を発信していききたい。

また、渋谷区とペルー共和国、ミラフローレス区は地球の反対に位置し、地理的にとても遠く離れているが、その距離の大きさを超えられるように、今後も様々な機会を通じて、継続的に連携していききたい。

3-7 富山県南砺市 ×トリニダード・トバゴ

(1) 背景と目標等

1) 背景

本事業は、大阪・関西万博を契機として国際交流を促進し、地域の文化的多様性を高めることを目的に実施した。特に南砺市は、長きにわたり国際的な音楽交流（南砺市では、過去 30 年以上に渡り、SUKIYAKI MEETS THE WORLD をしている。<https://sukiyakifes.jp/>)を推進している。しかしながら、音楽交流は合併前の旧町の一部でのみ行われていること、アーティストの招請に多額の費用を要することなどの課題があったため、地域全体における異文化理解の促進、教育的価値の提供、音楽を通じた国際交流の活性化を推進するため、本事業に取り組んだ。

2) 目的

本事業は、南砺市で生活する子どもたちに、万博を通じて南砺市の歴史や文化を知り、誇りを持ってもらうこと、また、長く南砺市と交流を続けてきたトリニダード・トバゴやその他の世界中の国で継承されている楽器や音楽・文化等を知ること、異文化への興味関心と多文化共生の理解促進を目的とする。

(2) 事業内容

1) こきりこ in 大阪・関西万博

日程：令和 7 年 8 月 11 日（月・祝）16:00～17:00

場所：いのちの遊び場 クラゲ館（万博会場内）

体制：南砺市・市内の小中学生・トリニダード・トバゴのスティールパン奏者

内容：南砺市の五箇山地域に住む小学 4 年生～中学 3 年生が、万博会場で日本最古の民謡「こきりこ」の輪踊りワークショップを実施した。当日は、トリニダード・トバゴのスティールパン奏者 3 名もワークショップに加わり、こきりこのメロディーに合わせてスティールパンを演奏し、こどもたちとの交流を行った。

参加者数：延べ 120 名程度（小学生 14 人、中学生 19 人、高校生 31 人、トリニダード・トバゴのミュージシャン 3 人、その他ワークショップ参加者 50 名程度）





2) KURAGEband による学校訪問

日程：令和7年11月5日（水）

10:25~11:00（福光中部小学校）、14:00~15:00（上平小学校・平中学校合同）

場所：福光中部小学校、上平小学校

体制：南砺市・市内の小中学生・KURAGEband・越中五箇山こきりこ唄保存会

内容：中島さち子万博テーマ事業プロデューサーによる、大阪・関西万博の振り返りを通じた多様性や交流についての講義、KURAGEband メンバーによる出身国の文化・伝統的な楽器紹介により、南砺の子どもたちに世界中の文化や音楽について触れてもらう機会とした。また、実際に楽器を触ってみたり、KURAGEband の演奏に合わせて体を動かしたりすることで、交流を図った。上平小学校でのワークショップでは、地元の民謡保存団体にも協力いただき、KURAGEband とコラボレーションしたこきりこで、輪踊りを行った。

参加者数：（福光中部小学校 43 名、上平小学校 45 名、平中学校 34 名、越中五箇山こきりこ唄保存会 6 名、



(3) 事業の目標に対する成果

大阪・関西万博でのこきりこワークショップでは、国内外の多くの方にこきりこに触れていただく機会となり、子どもたちのシビックプライドの醸成につながった。また、伝統芸能であるこきりこが異国の楽器とコラボレーションするという史上初の試みは、民謡保存団体にも理解をいただいて実施できたことで、伝統に新たな風を入れることの寛容性を確認することができた。

学校訪問ワークショップでは、さまざまな国のアーティストから音楽や文化を紹介していただくことを通じて、広く世界に目を向けるきっかけになったと考えている。また、中島さちこ万博テーマ事業プロデューサーによる万博やクラゲ館での活動の振り返りによって、異なる背景や特性を持つ個人が共存し、その違いを尊重し合うことの大切さを学ぶことができた。

(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価))

南砺市で30年以上にわたり開催しているワールドミュージックフェス「SUKIYAKI MEETS THE WORLD」において、昨年度トリニダード・トバゴのアーティストを本事業で招請したところ、今年度のフェスの際にも、イベント主催者がトリニダード・トバゴから自主的にアーティストを招請し、市民向けワークショップを実施しており、事業を継続する関係性が構築されつつある。今後もアーティスト招請等を通じて、市民との交流が促進されるよう、支援を続けていきたい。

(5) こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

万博会場でこきりこのワークショップを実施し、多くの観覧客が訪れ、ワークショップ終了後に大きな拍手が起こったことは、子どもたちが今後こきりこを保存・継承する担い手となっていく中で、素晴らしいものを継承できることを気づき、希望をもつきっかけになった。学校訪問でのワークショップでは、言葉が通じなくても、音楽で国際交流が可能なことを知るきっかけになった。言葉だけが異文化コミュニケーションの手段ではないことを知るとは、将来における国際交流の促進という面で希望を感じられたと考える。

(6) 特に良かった点、苦勞した点

1) 良かった点

ワークショップに参加した子どもたちからは「もっといろいろな国のことを知りたい」「国際交流のイベントがあれば参加してみたい」という声が多く上がったことが良かった。市内の中学生を対象に、さまざまな国へ実際に訪れ、現地で交流を行うプログラムがあるため、将来のプログラム参加に向けた機運が醸成されたと考えている。また、これまで他と交わることのなかった、日本最古の民謡「こきりこ」について、初めて海外の楽器とのコラボ

レーションを行ったが、こどもから大人まで多くの方から、こきりこを未来につないでいく新たなきっかけとなった、という言葉をいただき、シビックプライドの醸成につながった。

2) 苦労した点

できる限り多くの子どもたちに国際交流にかかわってもらいたい、という思いから、万博会場でのこきりこワークショップの参加者については希望制を取ったが、教育機関との調整や保護者への説明、随同行の依頼等に苦労した。また、学校訪問ワークショップでは、各学校の既存のカリキュラムがある中での調整が難しく、受入可能が学校の選定に苦労した。

(7) 今後の展開

トリニダード・トバゴとの交流を発祥とする音楽イベント「SUKIYAKI MEETS THE WORLD」を開催する実行委員会や、地元スティールパンバンド「SUKIYAKI STEEL ORCHESTRA」と連携の連携を強化していく必要があると考える。継続的にトリニダード・トバゴからのアーティスト招請ができるような支援や、交流促進のためのワークショップの広報支援等、公民で連携して取り組んでいきたい。

(8) 今後の展開における課題

上記(7)今後の展開で記載した SUKIYAKI MEETS THE WORLD の運営には市から支援を行っているが、今後は、支援の規模縮小の可能性もある。トリニダード・トバゴとの交流を継続していくためには、イベントの継続も重要な要素となってくるため、市からの金銭的な支援だけでなく、イベントの収益力強化等のため伴走支援等について検討し、継続的に交流ができる基盤を整備していくとともに、オンラインでの交流の実施等、必ずしも現地訪問に頼らない交流の形態を検討していきたい。

3-8 石川県志賀町 × アゼルバイジャン

(1) 背景と目標

1) 背景

志賀町は、石川県の北部南西寄り、能登半島中央部の外浦海岸に位置し、美しい自然や豊富な観光資源を有している。現在の人口は約 17,000 人で減少傾向にあり、高齢化も進んでいる。

農林漁業が基幹産業であり、多くの特産品があるが、一次産業は減少している。

一方で、工業は電気機械や精密機械へとシフトしており、町中央の海岸部には志賀原子力発電所（原子炉 2 基）が立地している。

本町の総合計画では、国際交流の推進が掲げられており、グローバルな視野を持った人材育成が求められている。

アゼルバイジャンとは、東京 2020 オリンピック・パラリンピック大会を契機に、スポーツ振興や国際交流を図り、アゼルバイジャンレスリングチームやパラリンピック・水泳選手の事前キャンプを誘致し、同国オリンピック委員会及びパラリンピック委員会との覚書も締結した。

さらに、首都バクー市ハタイ地区との間でも、お互いのスポーツ・文化・学生交流を目的とした覚書を締結した。これまでに、和太鼓団体が訪問し、伝統芸能による文化交流が行われたほか、相互の学生がホームステイを通じて異文化交流を実施し、学生間での交流も促進されてきた。

本年度より、同国バクー市にある「バクー世界学校」と地元の志賀高等学校との交流事業を開始した。この取り組みによって、国際交流のさらなる促進が期待されるとともに、大阪・関西万博を契機として、アゼルバイジャンとの関係を一層深めていくことを目指し、今後の持続的な交流に向けた取り組みを図るものである。

2) 目標

これまで、積み重ねてきた人的ネットワークは、志賀町にとってかけがえのない資産である。このネットワークは単なる国際交流にとどまらず、現在では地元高校を中心とした「人材・教育への戦略投資」となり、志賀町の持続可能性を強化するための地方創生の取り組みへと発展している。

継続的な国際交流の推進を目指し、相互のスポーツや文化、学生交流を通じて異文化理解や共生社会について学ぶ機会を創出する。

また、令和 6 年に発生した能登半島地震からの復興の一つとして、相手国の関係者や全国の皆様に元気な志賀町を見てもらい、その結果として地域活性化につながることを目標とする。

(2) 事業内容

1) 大阪・関西万博 アゼルバイジャン共和国ナショナルデー参画

①スケジュール

【出演日】令和7年6月5日（アゼルバイジャン共和国ナショナルデー）

②体制

アゼルバイジャン共和国、在アゼルバイジャン日本大使館、駐日アゼルバイジャン大使館、
公益財団法人2025年日本国際博覧会協会

③内容

大阪・関西万博 アゼルバイジャン共和国のナショナルデーで、志賀町の無形文化財に指定されている「志賀の太鼓」をステージ演奏し、国内外に広くアピールした。演奏したのは、和太鼓団体「志賀天友太鼓」。志賀天友太鼓は、2022年に「外交関係樹立30周年記念」で、アゼルバイジャン共和国を訪問し演奏した団体である。

④効果

今回の大阪・関西万博でのステージ出演で、日本文化である和太鼓を披露することにより、両国の文化的相互理解を深め、国際交流を促進するとともに、令和6年能登半島地震からの地域復興に向けた元気回復のきっかけとなった。

また、伝統芸能・和太鼓団体の技術向上並びに伝統芸能の継承に繋がっていることを期待。

マスコミをとおして、当町の活動と相手国を広くPRすることができた。



2) アゼルバイジャン学生・先生受入事業

①スケジュール

【受入期間】 令和7年8月22日～26日

②体制

在アゼルバイジャン日本大使館、駐日アゼルバイジャン大使館、私立バクー世界学校

③内容

在アゼルバイジャン日本大使館、駐日アゼルバイジャン大使館のご協力をいただき、バクー世界学校から生徒2名と先生を受け入れ、地元志賀高等学校との学生交流を行った。

志賀高等学校では、本年4月に「国際交流部」が新設され、バクー世界学校の日本語教室とのオンラインでの交流を開始した。オンライン交流では、お互いの国の食文化や伝統文化、祭りなどを紹介し合いながら、文化理解を深めてきた。

また、現地交流をした学校では、書道やこま、けん玉などの体験を通じて、日本文化に触れてもらい、一緒にたこやきを作って食べる機会も設けた。その間、生徒たちは、積極的に英語でコミュニケーションをとり、アゼルバイジャンの生徒は自分が学んできた日本語で会話を楽しむ姿が見られた。

受け入れ期間中には、アゼルバイジャンの生徒たちがホームステイや地元の祭りへの参加、浴衣の着付け体験や貝細工制作などをおして、日本の文化について学ぶ貴重な経験を行った。

④効果

異文化交流を通じて、学生同士の相互理解が促進され、日本とアゼルバイジャン間の友好関係が一層強化された。この交流により、言語スキルやコミュニケーション能力が向上し、両国の生徒たちは異なる文化への理解と尊重を深めることができ、視野を広げる良い機会となった。



貝細工体験や浴衣の着付け体験をする学生



3) アゼルバイジャン訪問：ホームステイ交流事業

①スケジュール

【訪問期間】 令和7年12月14日～20日

②体制

アゼルバイジャン共和国、首都バクー市ハタイ地区、在アゼルバイジャン日本大使館、駐日アゼルバイジャン大使館、バクー世界学校、現地コーディネーター

③内容

志賀高校の生徒2名がアゼルバイジャンを訪れ、ホームステイ等を通して異文化に触れるとともに学生交流を行った。具体的には、以下活動を実施した。

- ・在アゼルバイジャン日本大使館を訪問し、特命全権大使 渡辺大使に表敬した。
- ・バクー市ハタイ地区庁舎を訪問し、副区長と対談を実施した。
- ・バクー世界学校の生徒の家庭でホームステイを経験し、異文化交流を深めた。

④効果

これらの貴重な経験から、異文化理解が促進されたことはもちろん、多様な価値観や生活様式への理解も一層深まった。

また、国際的な視野が広がり、今後の学びや社会生活においても役立つことと確信する。

今回の訪問によるホームステイ交流は、事業継続に繋がる重要なものであり、当町の国際交流推進にも寄与した。

実施にあたっては、在アゼルバイジャン日本大使館職員の協力が不可欠であり、真摯に対応していただいた。また、現地コーディネーターとの関係も東京オリンピック・パラリンピック大会から長年続いており、その信頼関係のおかげでスムーズな調整が図られた。

4) アゼルバイジャン訪問：地元高校と友好校締結に向けた学生交流事業

①スケジュール

前事業と同様

②体制

在アゼルバイジャン日本大使館、私立バクー世界学校、現地コーディネーター

③内容

バクー世界学校を訪問し、友好校締結に向けた交流活動を行った。

歓迎セレモニーでは、バクー世界学校長による挨拶や生徒たちによる伝統芸能が披露された。

また、バクー世界学校の生徒からのプレゼンや、志賀高校の生徒からのプレゼンも行われた。

さらに、町職員、志賀高校の教員からも挨拶させていただいた。

セレモニー終了後には、日本語の授業に参加した。バクー世界学校では日本語の授業が行われていることからわかるように、日本に対する親しみが感じられた。

なお、学校訪問には、特命全権大使である渡辺大使にも来校いただき、大変光栄であった。

④効果

今回の訪問を通じて、異文化理解の促進や国際交流の重要性を再認識することができた。

訪問先の学校は、日本語教室を授業に取り入れるほど親日的で、日本語が堪能な先生もいることからコミュニケーションが非常にスムーズであった。このような環境は、友好校締結に向けた大きな一歩となる。

さらに、現地での活動は、今後の教育環境にも良い影響を与えると確信している。

志賀高等学校が魅力ある学校づくりを進める上でも、この経験は大変効果的であると感じている。



バクー世界学校でプレゼンの様子



在アゼルバイジャン日本国大使に来校
いただきました（左から4番目）



バクー世界学校で日本語の授業に参加する生徒



休み時間での交流の様子



(3) 事業の目標に対する成果

多様な国との交流によって得られた知見や経験が地域内で共有され、教育現場にも反映されることで、人材育成が促進された。

次に、地域住民と訪問者との間で築かれた絆が深まり、お互いの文化への理解が進んだことも大きな成果である。

さらに、能登半島地震から復興する過程で、多くの支援者やボランティアが集まり、新しいコミュニケーション形成につながった。これらすべてが志賀町の地域活性化につながり、持続可能な未来への道筋を作っている。

(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価))

大阪・関西万博では、アゼルバイジャンナショナルデーにおいて、志賀町の伝統芸能である和太鼓が披露された。このステージ披露を通じて、地域の文化や魅力が広く知られることとなり、能登半島地震からの復興に向けた一歩を踏み出すことができた。

さらに、志賀高校とバクー世界学校はオンライン交流やホームステイ事業などを実施し、両校の魅力的な学校づくりや異文化教育が進展している。これにより、当町の国際交流促進に向けたレガシー創造にも寄与している。

また、アゼルバイジャンは日本大使館の尽力によって親日国家として知られており、両国の国際交流から得られる効果も期待されている。

そのため、今後も継続的な国際交流が図られることが見込まれている。

当校の魅力ある学校づくりと両国の異文化教育が図られ、当町の国際交流推進のレガシー創造に寄与する。

また、アゼルバイジャンは日本大使館の努力もあり親日国家で、当町との国際交流による効果を期待されていることから、継続した国際交流が図られる。

(5) こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

今回のホームステイや学校訪問を通じて、参加者から以下のような声が寄せられた。

まず、初めての海外滞在は全てが新鮮で刺激的であり、今後も国際交流に積極的に関わっていききたいという意欲が表れた。

また、アゼルバイジャンだけでなく、様々な国の文化や風習について知ることができ、多くの国を訪れてみたいという希望も聞かれた。

このような声からは、学習意欲の向上や視野の拡大、現地での体験が大きな教育効果を持つことが伺える。

さらに、当町には外国人住民も多く生活しているが、その方々がどのような日常を送っているのか、興味も高まった。この感覚を非常に大切にし、この思いをきっかけとして外国人住民と日本人住民とのつながりを深めていきたいと強く感じている。

この活動は、志賀高校にとっても志賀町にとっても、地域活性化につながる取組みとなっている。

(6) 特に良かった点、苦勞した点

1) 良かった点

本事業に携わった多くの関係者に心から感謝申し上げる。

遠く離れたアゼルバイジャンとの交流が、このように継続できていることは、当町にとって非常に意義深いことである。

また、両国の学生たちが異国の地で、食文化や宗教、言語といった様々な文化の違いを体験し、それを肌で感じることもできた点も大変素晴らしい成果であった。

2) 苦労した点

アゼルバイジャンは東ヨーロッパに位置しているが、中東地域とロシアが南北に隣接しているため、行政関係者等から安全面について懸念が寄せられたため、常に日本大使館や現地コーディネーターから情報を収集し、訪問に対する不安を解消するために苦慮した。

さらに、大阪・関西万博に出演する際には、公益財団法人2025年日本国際博覧会協会や関係団体との調整にもかなりの時間を要した。

(7) 今後の展開

志賀高校とバクー世界学校が友好校締結を目標に、オンラインによる交流及び相互学生のホームステイによる訪問を実施し、継続的な国際交流と両校の多文化教育の推進を図る。

また、友好都市バクー市ハタイ地区とは継続した国際交流を目的に、芸能文化・スポーツイベントを通じた交流に向け継続的なコミュニケーションを図る。

(8) 今後の展開における課題

相手国への訪問など、リアルな交流には渡航費や滞在費といった多額の経費がかかる。そのため、今後の事業継続に向けた財源確保が大きな課題となっている。

3-9 福井県 × ブラジル

(1) 背景と目標等

1) 背景と目的

福井県は、人口約75万人の地方自治体であり、少子高齢化の進行や若年層の県外流出が続いている。これにより、地域の活力維持や将来の担い手の確保が喫緊の課題となっており、外国人住民を含めた多様な人材が地域社会の一員として定着・活躍できる環境整備が求められている。

県内の主要産業は電子デバイス、繊維、眼鏡といった製造業であり、これらの分野では多くの外国人労働者が重要な役割を担っている。令和6年時点で県内には19,122人の外国人住民が暮らしており、その中でブラジル人が4,504人ともっとも多く、地域経済を支える重要な役割を果たしている。こうした状況を踏まえ、外国人住民との相互理解を進め、多文化共生社会を実現することは、福井県にとって重要な政策課題の一つである。

福井県とブラジルとの間には長年にわたる交流の歴史がある。ブラジルのサンパウロ州サンミゲール・アルカンジョ市には、福井県が開拓地建設を進めたコロニア・ピニャール（通称「福井村」）や、福井県出身者や福井県ゆかりの人びとによって構成される「ブラジル福井県文化協会」（県人会）があり、いずれの周年行事にも県や県議会、農協等から現地を訪問するほか、福井村や県人会からも役員等が折々に来県するなどの交流が続けてきた。しかし、年月の経過とともに、ブラジルの移住者世代も福井県側で交流を担ってきた人々も高齢化が進み、次世代への継承が大きな課題であり、今後も県とブラジルの関係を継承・発展させていくためには、若い世代を中心とした新たな交流の仕組みづくりが不可欠である。

大阪・関西万博は、これらの課題に対応する良い機会である。万博国際交流プログラムで若い世代が交流を行うことで、福井県とブラジルの交流の歴史を再確認するとともに、新しい世代の交流の歴史が生まれるきっかけとなること、さらには、県内において国際理解や多文化共生を進め、地域の発展につなげることを本事業の目的としている。

2) 目標

本事業では、福井県とブラジル福井村との若者世代の交流を活発化させることで、両地域の歴史的つながりへの理解を深めるとともに、地域住民の国際理解や多文化共生への意識を向上させることを目標とする。

(2) 事業内容

1)事業名：ブラジル館のテーマ「環境」に関する県内交流

①スケジュール（交流事業の計画策定及び実施にあたっての実際の経過）

7月上旬 事業の説明とおおよその時期の交渉

9月中旬 日程調整
9月下旬 来県される方の決定
10月上旬 日程の正式決定
10月中旬 訪問スケジュールの決定

②体制（交流事業の達成に向けた自治体及び相手国、交流関係団体の実施体制）

福井県 : 福井県庁交流文化部インバウンド交流課
ブラジル : ブラジル福井村出身 駐日ブラジル大使館 西川 シンチア 氏
西川さんの同僚 駐日ブラジル大使館 富永 アネッチ 氏

③内容

日 時 令和7年11月8日（土）～9日（日）

場 所 福井県内各所

訪問先等

◆11月8日（土）

◇訪問先 : 金津創作の森美術館

「長坂真護展 Still A BLACK STAR supported by セーレン」

対応者 : 館長 野田 訓生 氏

内 容 : 長坂真護氏は、1984年福井県生まれの美術家である。廃棄物を素材とした作品制作を通じて、環境問題への実践的なアプローチを続け、国際的にも高い評価を受けている。大阪・関西万博では、廃ペットボトルを再利用した作品「ミドルクラゲ“海月”」を展示し、アートを通じて環境への問いかけを行った。この展覧会は、自然との共生やプラスチック汚染への警鐘をアートで表現したもので、環境との共生と文化の多様性を表した万博のブラジルパビリオンとも響き合うものである。

今回は、同美術館館長に長坂氏のこれまでの足跡と、展覧会の概要、それぞれの作品について説明していただきながら鑑賞し、世界の廃棄物 問題とそこから生まれるアートとの関係について学んだ。



訪問先 : ものづくり交流拠点 トンカンテラス

対応者 : (株)ソリッドラボ（トンカンテラス）代表取締役

福井県立大学 海洋生物資源学部 特任講師 黒田 悠生 氏

内 容 : トンカンテラスでは、福井県の海岸に流れ着く海洋プラスチックや廃材をアップサイクルする取り組みを通じて、環境保全と循環型社会の実現に貢献するほか、長坂真護氏と共同開発しガーナの電子廃棄物をアップサイクルしたボール

ペンを商品化も行った。今回は、代表の黒田氏より海洋ゴミについて説明いただいた後、海洋ゴミからコースターを作る体験を行った。



海洋ゴミについて説明



海洋ゴミからのコースターづくり



◆ 11月9日（日）

◇訪問先：三方五湖周辺（電池推進遊覧船、レインボーライン、年縞博物館、道の駅三五湖）

対応者：三方五湖DMO(株)

若狭町議会議員 岩本 克己 氏

内 容：三方五湖は、水深や塩分濃度が異なる5つの湖の総称であり、海水魚から淡水魚まで多様な魚類が生息している。また、水鳥の貴重な生息地でもあり、ラムサール条約に登録されている。各現地では岩本氏の案内のもと、三方五湖の環境や生態系について理解を深めた。

三方五湖をめぐる電池遊覧船は、国内初の再生可能エネルギーを動力とする環境配慮型の船である。電池遊覧船では、湖面で生息する水鳥の生態を間近に感じ、レインボーラインからは五湖を俯瞰しながら地形や環境のつながりを学んだ。視点の異なる体験を通じて、三方五湖の多様性とその価値を立体的に捉えることができた。

年縞博物館では、水月湖の湖底に堆積した「年縞」について学んだ。この年縞は、現在では世界標準の年代測定の基準として活用されており、世界の歴史を計測する物差しとなっている。

道の駅三方五湖では、前日に訪問したトンカンテラスを運営するソリッドラボの機器が導入されており、若狭湾などに漂着したプラスチックゴミから作られた「海ゴミ切符」が販売されている様子を見学した。これにより、前日に訪問した前田氏の活動が地域に還元されていることを実感できた。



三方五湖について説明



電池遊覧船



レインボーライン山頂公園



年縞博物館



年縞博物館



道の駅三方五湖

④効果

A. 自治体内への波及効果

今回の交流は、福井県内が有する観光資源が、ブラジルの方にとっても高い関心を寄せるものであることが確認できた。特に、「年縞博物館」は、専門的な分野を扱っているため反応が未知数であったが、「恐竜博物館に匹敵するほどすごいと思いました。地層で過去の気候変動を体感できました。」というコメントを頂き、福井県の環境資源が国際的にも訴求力を有することが明らかとなった。また、福井県内の環境に関する取り組みを総合的に発信できる機会となった。これらの意見は、今後のインバウンド施策を検討する上で有益な情報となる。

B. 実施により達成できた成果

実際に現地を訪れてもらい、環境・文化資源や地域の取り組みに直接触れていただいたことで、県の魅力や特色を対外的に伝える貴重な機会となった。単に情報を届けるだけでなく、現場で活動する人々の声や地域の空気感を体感してもらうことで、福井の価値をより具体的に理解してもらうことができた。地域資源や地域の方の取り組みが、どのように受け止められるかを客観的に捉え直すことができ、今後の多文化共生やインバウンド対応に向けた発信力の強化や受け入れ体制の検討に活かす視点を定めることができた。

C. 相手国への波及効果

参加者の一人は、ブラジル福井村出身であり、かつて福井県の研修事業を通じて県内企業での研修経験を持っていたことから、今回の訪問は自身のルーツや過去の経験を振り返る

機会となった。福井の環境や文化に改めて触れることで、個人としてのつながりを再確認し、福井に対する理解と親しみが深まった。ブラジルでは、洪水や干ばつなどの課題を抱えていることを踏まえ、福井とブラジル間で、気候変動などの分野においても学術的な交流を行えるのではないかという意見もあった。

2)事業名：福井村太鼓部の招致

①スケジュール（交流事業の計画策定及び実施にあたっての実際の経過）

- 5月上旬 万博演奏日時・場所の決定
- 5月中旬 来日スケジュールのブラジル側との調整
- 5月下旬 来日メンバーの決定・福井県立大学との調整
- 6月中旬 航空チケット手配
- 6月下旬 県内訪問箇所への依頼
- 5月～7月 万博演奏当日の打ち合わせ（演奏時間、待機場所等）

②体制（交流事業の達成に向けた自治体及び相手国、交流関係団体の実施体制）

- 福井県 : 福井県庁交流文化部インバウンド交流課
福井県立大学
- ブラジル : コロニア・ピニャール文化体育協会（福井村）
福井村 太鼓部「飛翔」

③内容

来日スケジュール 令和7年7月14日～21日

◆万博での演奏

- 日 時 7月16日 10:00
- 場 所 万博会場内 シャイン・ハット前
- 内 容 福井県の万博特別ステージイベント「恐竜王国福井DAY」に合わせた、シャインハット前での福井村太鼓部「飛翔」による演奏披露。
- 参加者 福井村太鼓部「飛翔」 6名
- 報道対応 地元の新聞媒体への記事掲載

◆福井県立大学での交流

- 日 時 7月18日 14:00-16:20
- 場 所 福井県立大学
- 内 容 福井県立大学の学長への表敬訪問、農業に関する研究室訪問、ディスカッション
- 参加者 福井県立大学 岩崎学長、生物資源学部の教授・学生等
福井村太鼓部「飛翔」
コロニア・ピニャール文化体育協会 顧問、保護者代表
- 報道対応 地元の新聞媒体への取材対応

④効果

A. 自治体内への波及効果

万博での演奏は、万博特別ステージイベント「恐竜王国福井DAY」の開催に合わせ実施した。万博の来場者他、福井にゆかりのある、主に文化芸術に関わる人々がイベントに参加した。地元の新聞では、このイベントとともに福井村の太鼓部が太鼓演奏をしたことが大きく取り上げられ、福井県内でも、福井県がブラジル福井村と長年交流を続けていることや、その子どもたちが和太鼓を通じて日本文化を継承していることを広く県民に知らせることができた。

県立大学では、学生や教職員がブラジル福井村の子どもたちと直接対話することで、異文化への理解が進み、教育現場における国際交流の意義が再認識された。

B. 実施により達成できた成果

万博会場では、福井村太鼓部「飛翔」による力強い演奏が来場者の注目を集め、福井県とブラジル福井村との文化的つながりを広く発信することができた。演奏を通じて、文化の誇りやアイデンティティを感じる機会が生まれ、国境を越えた心の交流が実現した。県立大学での交流では、言語や文化の違いを乗り越えたコミュニケーションが行われ、学生たちにとってグローバルな視野を育む貴重な経験となった。

福井県立大学で参加してくださった方のアンケートからは、「グローバルな視野が育まれた」「異文化理解が深まった」などの意見が聞かれ、特に「ブラジルや福井村に興味があった」「もっと彼らを知りたくなった」など、顔を合わせて直接交流することが、相手国に対しての関心を高める有効な手段であることが分かった。参加した太鼓部メンバーからは、日本で多くの方に演奏を届けられたことや、福井県立大学の教授・学生との交流を通じて、自分たちのルーツである福井県の魅力を実感できたとの声があった。

C. 相手国への波及効果

福井村の太鼓部メンバーにとって、日本での交流は、自身のルーツを再確認し、福井県とのつながりを実感する貴重な体験となった。福井県立大学での交流では、温かい歓迎を受けたことで、彼らの中に「自分たちは福井とつながっている」という誇りと安心感が育まれた。また、福井村における日本語教育や文化継承の取り組みに対する意欲が高まり、今後の世代に交流を継承していく意識が強まった。こうした経験は、ブラジル側における地域社会の国際的な視野の拡大にもつながり、両地域間の友好と協力の深化に寄与するものである。今回の来日を通じて、日本で勉強したい、という夢ができ、ブラジルへの帰国後、留学試験に挑戦し日本で留学の機会を得たという報告も後日あった。



万博会場での太鼓演奏披露



福井県会議員のみなさまと



県立大学での農場見学



福井県立大学学長表敬

3) 事業名：福井村の日本語学校と県内の小学校との交流

①スケジュール（交流事業の計画策定及び実施にあたっての実際の経過）

6月中旬 日程・内容の調整

6月下旬 日程、内容の決定

7月上旬 内容詳細の打合せ

②体制（交流事業の達成に向けた自治体及び相手国、交流関係団体の実施体制）

福井県：福井県庁交流文化部インバウンド交流課

【交流する学校】坂井市立高椋小学校

ブラジル：コロニア・ピニャール文化体育協会（福井村）

福井村太鼓部「飛翔」

③内容（日時、場所、取組内容、参加者、報道対応等）

日 時 7月18日 8:50-9:15

場 所 坂井市立高椋小学校

内 容 ①コロニア・ピニャール日本語モデル校（ブラジル福井村の日本語学校）からの万博に関する絵画等のプレゼント

②坂井市立高椋小学校の全児童からの歌のプレゼント

参 加 者 高椋小学校全児童

福井村太鼓部「飛翔」メンバー 6名
コロニア・ピニャール文化体育協会 顧問、保護者代表
報道対応 地元の新聞媒体への取材対応

④効果

A. 自治体内への波及効果

坂井市立高椋小学校での交流は、地域の児童にとって国際理解や多文化共生の重要性を体感する貴重な機会となった。ブラジルの福井村の若者とのふれあいを通じて、異文化への関心が自然と生まれ、国際感覚の芽生えにつながった。また、11年前の交流の記録が今も校内に大切に飾られていることから、地域として国際交流を継続的に受け入れ、育んできた姿勢が児童や教職員に共有され、地域の教育現場における国際交流の意義が再認識された。

B. 実施により達成できた成果

今回の交流では、福井村の子どもたちが万博について学び、心に残ったことを絵画に表現して高椋小学校に届けた。一方、高椋小学校の児童からは歌のプレゼントが贈られ、感動のあまり涙を流す子どもも見られた。こうした双方向のやりとりは、言葉や文化の違いを越えた心の交流を生み出し、子どもたちにとって忘れがたい経験となった。また、福井村太鼓部のメンバーが自身や兄弟の名前を11年前の贈り物の中に見つけ、交流が途切れることなく続いてきたことに感動する姿も見られた。このような継続的な交流は、地域間の信頼と友好を深めるとともに、教育・文化分野における国際的な連携の可能性を広げる成果となった。

C. 相手国への波及効果

福井村の子どもたちや太鼓部メンバーにとって、日本での交流は自身のルーツを再確認する機会となり、福井県とのつながりを実感する貴重な体験となった。高椋小学校での温かい歓迎や、過去の交流の記録に触れることで、彼らの中に「自分たちは福井とつながっている」という誇りと安心感が育まれた。また、保護者や関係者にとっても、子どもたちが日本で歓迎され、文化を通じて交流する姿を見ることで、今後の世代に交流を継承していく意義を強く感じる機会となった。こうした経験は、ブラジル側における日本語教育や文化継承の取り組みに対する意欲を高め、今後の交流の継続と発展に向けた基盤づくりに寄与するものである。



全校児童の前での自己紹介



ブラジル福井村からの万博がテーマの絵画

(3) 事業の目標に対する成果

本事業では、福井県とブラジル福井村との歴史的なつながりを広く発信することができた。福井村の太鼓部による万博での演奏は、ブラジルで根付く和太鼓の文化を効果的にPRでき、来場者の関心を集めることができた。福井県立大学や小学校での交流では、児童や学生、教職員がブラジルの若者と直接対話・交流する機会が生まれ、異文化理解や多文化共生について主体的に考えるきっかけとなった。

これらの取り組みにより、教育現場における国際理解促進と、将来にわたる交流の基盤づくりへの一定の成果を得ることができた。

(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価))

本事業は、大阪・関西万博という国際的なイベントを活用し、福井県とブラジル福井村との長年の絆を再確認するとともに、次世代へと継承する新たな交流の形を創出した点で、レガシー創造に大きく寄与した。文化・教育など様々な方法で、そして小学生や大学生など様々な立場の人と、多角的な交流を展開することで、次世代の新しい国際交流のモデルを示すことができた。

福井県立大学では、福井村との包括連携協定を締結し、今後、教育・研究分野での交流展開を具体的に見据えており、万博閉幕後も継続的な関係性を構築する基盤を築きつつあり、レガシー創造への重要な成果と捉えている

(5) こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

本事業では、福井村の子どもたちが日本を訪れ、万博での演奏や県内の教育機関との交流を通じて、自身のルーツや文化に誇りをもてる機会をもつことができた。日本の大学に通いたい、日本のブラジル人学校で教師をしてみたい、など今回の経験をきっかけに具体的な将来の夢を持つ子どもがいた。

一方、県内の児童にとっても、海外の「福井村」に住み日本語とポルトガル語を話す子どもたちとの交流は、世界とのつながりを身近に感じる貴重な機会となり、将来への希望や視野の広がりにつながった。こうした体験は、子どもたちの視野を広げ、将来の進路や生き方に前向きな影響を与えるものであり、国際感覚を育む教育の一環として大きな意義を持つ。

(6) 特に良かった点、苦労した点

1) 良かった点

万博という国際的なイベントを契機に、福井県とブラジル福井村との長年にわたる交流の歴史を、県内外多くの方々に発信できたこと。

福井村の子どもたちにとって、国際的なイベントである万博で、多くの聴衆に自分たちの思いを込めた音楽を聴いてもらい喝采を浴びたことは、日本にルーツのある自分たちが日本でも受け入れてもらえると感じる機会となった。自分たちが大切にしてきた「太鼓」や自分たちのルーツに対して、誇りを持つきっかけとなった。

ブラジル大使館のお二人が実際に福井を訪れ、ブラジルと福井、共通の課題である「環境」に関する様々な取り組みを現場で活動する方々から話を聞くことで、単なる知識ではなく、相互理解の交流を実現できたこと。

2) 苦労した点

万博開幕前の準備段階では、万博会場の情報が少なく、会場全体がどうなっているのか、担当者がいるのか、どのようにコンタクトをすればよいのかなどが手探り状態だった。実際に演奏をすることになると、写真だけではなく、電気や導線などの確認も行う必要があるが、簡単な質問でも電話対応を行っておらず、すべてメール等でしか対応してもらえないため、やり取りに非常に時間がかかった。

海外との参加者を受け入れるにあたり、日本とブラジルでは時差が12時間あるため、調整にも時間がかかることがあった。

(7) 今後の展開

本事業を通じて構築された福井県とブラジル福井村とのネットワークを活かし、万博終了後も交流を継続・発展させる。福井県では、ブラジルの若者を福井県の企業で研修する、という事業があり、今後県内の大学生とのディスカッションや、県民にブラジルを紹介するなど交流の機会をもつ。

福井県立大学においては、ブラジル福井村との交流計画を立て、国際的な視野をもつ地域のリーダーとなる人材の育成につなげていきたいと考えている。

(8) 今後の展開における課題

今後、交流事業を継続・発展させていくためには、交流を担う人材の育成を行いながら

無理なく世代交代していくことが課題となる。特定の関係者だけでなく、教育機関や今回交流した若者同士など、多様な立場の人たちが多角的に交流を続けていきながら交流ができる体制づくりが必要である。

継続的な交流というと、オンラインを通じて定期的に交流を行いたいという案もあるが、ブラジルと日本の時差は12時間であるため同時にオンラインで交流を行うことが難しい。直接会って交流するというのが一番効果的であり継続していきたいところであるが、その費用や渡航時間を考えると毎年行うことが容易ではなく、双方にとって負担の少ない持続的な交流モデルを検討していくことが今後の課題である。

3-10 三重県×ブラジル

(1) 背景と目標等

1) 背景と目的

三重県では、県内産業において自動車、電子機器などの製造業の割合が高く、ブラジルをはじめとする日系3世までの外国人住民の就業先の多くがこれら産業となっていることもあり、ブラジル人の在留数14,035人で、全国3位（2024年12月末時点）となっており、共生社会の構築が重要な取組となっている。

他方で、大都市圏に比べて国際交流の機会が限られた状況にあるという課題を抱えている。このため、万博国際交流プログラムを活用し、ブラジルとの友好深化を進めることで、青少年の相互理解促進や県内若者の国際的な視野の拡大を目指す。

また、本県では令和4（2022）年度から令和8（2026）年度までの5年間の中期の戦略計画である「みえ元気プラン」において、国際展開の推進を位置づけており、「三重の未来を担う若者をグローバル人材として育成するため、友好・姉妹提携先をはじめとする海外との交流機会を提供する」ことを目的に掲げている。

2) 目標

本県唯一のブラジル人学校である伯人学校イーエーエス鈴鹿では小中高校生相当の児童・生徒が母国ブラジルのカリキュラムを用いた教育を受けており、当該学校のほとんどの児童・生徒は保護者の仕事などの関係から三重県に在住している。万博では広く三重の魅力を発信するために関西パビリオン内に三重県ブースを設置しており、この万博を契機として母国と自身が現在住んでいる三重県について学ぶ機会を提供することで国際交流の前提となる、住居地である三重県や自らのルーツへの理解を深めることを目標とする。

※伯人学校イーエーエス

- ・三重県（鈴鹿）、愛知県（豊橋、豊田、碧南）、静岡県（浜松）、群馬県（太田）に6校舎。
- ・住 所：三重県鈴鹿市道伯5-23-29
- ・開校年：1995年
- ・生徒数：6校舎合計で約1,200名（3歳～18歳まで、99%以上がブラジル国籍）

(2) 事業内容

1) 事業名

①スケジュール

令和7年4月～	事前学習、万博会場訪問の日程等について調整
7月	事前学習日、万博会場訪問日決定
8月 5日	事前学習（於：イーエーエス鈴鹿）

8月 8日 万博会場訪問
10月28日 事後学習・事後アンケート実施（於：イーエーエス鈴鹿）

②体制

三重県：政策企画部 国際戦略・プロモーション推進課、
雇用経済部 大阪・関西万博推進プロジェクトチーム
ブラジル政府：在名古屋ブラジル総領事館、ブラジルパビリオン
イーエーエス鈴鹿：校長、通訳、生徒

③内容

本県唯一のブラジル人学校である伯人学校イーエーエス鈴鹿で母国ブラジルのカリキュラムを用いた教育を受けている生徒10人（日本の高校生相当の年齢）に対し、日本国際博覧会協会及び三重県から事前に万博についての学習する機会を提供する。

その後、万博会場のブラジルパビリオンを訪問し、パビリオン関係者による説明・対話により母国について理解を深める機会とする。

また、関西パビリオン内の三重県ブースも訪問し、自身が現在住んでいる三重県や日本の文化について学ぶ機会とし相互理解を深める。

終了後、事後学習として万博を契機とした国際交流の実績について説明を行う。

【事前学習】

○日時：令和7年8月5日（火） 10：00～11：00

○場所：伯人学校イーエーエス鈴鹿

○参加者：日本国際博覧会協会 広報・プロモーション局1人

伯人学校イーエーエス鈴鹿 教諭、通訳、生徒10人 計12人

三重県 政策企画部 国際戦略・プロモーション推進課3人、雇用経済部
大阪・関西万博推進PT2人、環境生活部 ダイバーシティ社会推進課1人 計6人

○内容：日本国際博覧会協会職員による万博についての講演、および三重県による訪問行程やパビリオンについての説明を行う。その後、質疑応答を実施。

【会場訪問】

○日時：令和7年8月8日（金） 12：00～17：00

○場所：大阪・関西万博 ブラジルパビリオン、関西パビリオン

○参加者：伯人学校イーエーエス鈴鹿 教諭、通訳、生徒10人 計12人

三重県 政策企画部3人、雇用経済部 大阪・関西万博推進PT4人、通訳
1人 計8人

○行程：以下のとおり

時間	内容	備考
8：40～9：00	移動（学校→白子駅）	
9：10～10：45	移動（白子駅→鶴橋駅）	近鉄特急

10：55～11：30	移動（鶴橋駅→夢洲駅）	大阪メトロ（阿波座駅で乗換）
11：30～13：00	昼食、自由時間	
13：00～13：45	ブラジルパビリオン	
13：45～14：00	移動	
14：00～14：45	関西パビリオン	
14：45～17：30	自由時間	
17：56～18：24	移動（夢洲駅～なんば駅）	大阪メトロ（阿波座駅で乗換）
18：30～20：11	移動（大阪難波駅～白子駅）	近鉄特急
20：11～20：15	解散	

○内容：上記行程に基づき見学等を実施。ブラジルパビリオンでは館長による説明を受けた後、意見交換を実施。終了後、関西パビリオン三重県ブースでブースの説明を受けた後、意見交換を実施。

ブラジルパビリオン



関西パビリオン 三重県ブース



【事後学習】

○日時：令和7年10月28日（火） 10：00～10：45

○場所：伯人学校イーエーエス鈴鹿

○参加者：伯人学校イーエーエス鈴鹿 教諭、通訳、生徒10人 計12人

三重県 政策企画部 国際戦略・プロモーション推進課2人、雇用経済部
大阪・関西万博推進PT2人、環境生活部 ダイバーシティ社会推
進課1人 計6人

○内容：三重県より万博の概要及び万博を契機とした国際交流について説明。その後、質疑応答及びアンケートを実施。

④効果

三重県ブースでの説明・見学により、本県としても外国にルーツを持つ高校生が三重県のどのような魅力に関心が高いのかを把握できた。アンケート結果から、生徒自身が、居住する三重県について理解を深めることができたことがうかがわれ、当初目標としていた国際交流の促進を大きく進められた。

また、ブラジルパビリオンでも館長自らが、万博の意義やブラジルパビリオンの理念などに加えて、ブラジルと日本の歴史的なつながりについても丁寧に説明をしていたこともあり、生徒にとって母国ブラジルと三重県のことを再認識する機会になったという意見もみられ、自らのルーツや三重県への理解を深めることができた。

さらに、これまで県が積極的なアプローチができていなかった県内ブラジル人学校とのつながりができ、今後の国際交流の促進に生かしていくことが可能となったことも当初想定はしていなかったものの、大きな効果と考えられる。

（3）事業の目標に対する成果

イーエーエス鈴鹿の生徒による万博訪問等を通じて三重県に対する理解促進、並びにブラジル政府と三重県との交流の促進ができた。また、参加した県内若者の国際的な視野の拡大にもつながった。

（4）大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価))

事業の対象となったブラジル人学校は多くの児童・生徒が通っている県内唯一の学校であり、当該学校と協力することで相互理解や国際交流の端緒を開くことができた。

また、本県はブラジル・サンパウロ州と1973年に本県にとって初めてとなる姉妹提携を調印している。今回の事業を通じて在名古屋ブラジル総領事館とも深く連携でき、今後のサンパウロ州をはじめとした、ブラジルとの交流促進につながる契機となった。

(5) こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

万博の場でブラジルパビリオンと三重県ブースを訪問し、母国であるブラジル政府関係者であるパビリオンの館長との意見交換や居住する三重県について改めて学ぶ機会を得ることは、子どもにとってこれからのキャリア形成に大きな機会となったと考える。本事業での経験によって、国際交流の重要性への理解が高まったという意見や三重県のことを好きになったという意見も多く寄せられており、万博開催時期にしかできない事業が実施できた。

(6) 特に良かった点、苦労した点

1) 良かった点

本県として深い関わりのあるブラジル・サンパウロ州と姉妹提携50年の記念として、令和5年(2023年)に実施した三重県知事の同州訪問をはじめ、令和6年(2024年)の国際交流プログラム事業における同州の大志万学院の三重県訪問・交流、令和7年(2025年)の本事業におけるイーエーエス鈴鹿の万博訪問と3か年に渡り、多岐にわたって国際交流を推進できた。万博を契機として、政府や領事館、学校、学生など多数の関係者が密度の高い交流によって関係が強化できたこと等、今後の本県の国際交流を促進する上で効果的であったと考えられる。

2) 苦労した点

万博という場での交流はチケットの関係や入場予約などの手続きが煩雑であった。パビリオンとの交渉・調整においては、言語や文化などの違いが円滑なコミュニケーションの障壁となった場面が見られた。

(7) 今後の展開

在名古屋ブラジル総領事館を通じて、ブラジル側の万博担当者とのネットワークを構築できたこともあり、今後も総領事館とのネットワークも活用して、県の戦略としている国際展開の推進を進めてまいりたい。

(8) 今後の展開における課題

国際展開・国際交流の推進にあたり、文化や言語のほか、制度・組織の違い等が連絡・調整の妨げの一因となっている。

3-1 1 滋賀県 × ブラジル

(1) 背景と課題

1) 背景

滋賀県は、1976年の知事訪伯を契機にブラジル・リオ・グランデ・ド・スール州との交流を開始し、1980年の姉妹提携締結以降、相互訪問や文化交流、日本庭園「プラッサ・シガ」の寄贈などを通じて長年にわたり友好関係を築いてきた。令和7年は姉妹提携45周年にあたり、大阪・関西万博の開催を契機として、これまでの交流を次世代へ継承し、関係を一層深化させる重要な節目となっている。

2) 課題

周年事業を単なる式典的交流にとどめず、若い世代や地域住民が主体的に参画する持続的な交流へと発展させることが求められている。加えて、SDGsや万博理念を共有軸としながら、相互理解を深化させ、今後も継続可能な関係性を構築していくことが課題である。

(2) 事業内容

大阪・関西万博でのリオグランデドスール州・滋賀県姉妹県州交流イベント

1 イベント概要

- 主 催：リオグランデドスール州、滋賀県
日 時：令和7年9月26日（金） 10:00-15:00
場 所：大阪・関西万博会場 ブラジルパビリオン 多目的室
対 象：万博会場の一般来場者 等
内 容：
・パネル展示およびリーフレット配布等により、リオグランデドスール州の概要や両県州の姉妹交流の歴史を紹介
・多目的ホール内の大型モニターで両県州を紹介するビデオを上映
・アンケート回答者にリオグランデドスール州のマテ茶と近江の茶を配布

2 イベントスケジュール

9:40 オープニングセレモニー

- ① 総合企画部次長挨拶
- ② パビリオン代表者挨拶（プロトコルマネージャー ルーカス氏）
- ③ 記念品贈呈
- ④ 写真撮影
- ⑤ 開会宣言

10:00 イベント開催

15:00 イベント終了・撤収

3 結果

イベント参加者数：2,670名（うち、アンケート回答者493名（18.4%））

アンケート結果は以下のとおり。3)～6)は5段階評価。

- 1) 年齢
10代（3%）、20代（13.4%）、30代（18.1%）、40代（14.6%）、50代（27.2%）、
60代（19.5%）、70代（4.1%）、80代以上（0%）
- 2) 職業
会社員（51.5%）、パート・アルバイト（19.7%）、主婦・主夫（10.8%）、
学生（7.1%）、その他（10.9%）
- 3) イベントの満足度（4.0）
- 4) 自治体が今回のようなイベントを開催することについての評価（4.3）
- 5) 今回のイベントを通じて国際交流の取組は価値のあるものだと思うようになったか（4.2）
- 6) 万博会期後も相手国の方と交流や関わりを持ちたいか（4.3）
- 7) 今後どのような国際交流のイベントに参加したいか（以下、回答の一部抜粋）
「体験型のイベントは楽しそうだと思うし、子どもの記憶にも残りやすそう」、「民族性や文化を学べるもの」、「郷土料理の試食会」、「音楽を通して交流を深めたい」、「現地の人と触れ合うイベント」、「自然保護に関するもの」、「没入型のイベントに参加したい」、「万博レガシーに関する交流」

4 総括

イベントの満足度やイベント終了後の国際交流の関心についてのアンケート結果が総じて高い評価であることから、2,500名を超える多くのイベント参加者に対して両県州の魅力や姉妹交流の歴史について知っていただくとともに、国際交流の関心を高めていただけたことが伺える。

当日の様子としては、ブラジルパビリオンで滋賀県に関連するイベントが開催されていることに驚かれる参加者が多くおられ、そこから関心を持って会場内のパネル展示やビデオをご覧いただいていた。また、県のSNSなどを通じて滋賀県内から来場された参加者もいらっしゃり、県内外の方に両県州の魅力や姉妹交流の歴史を知っていただく貴重な機会となった。パビリオン関係者にもイベントに参加いただき、「両県州のつながりやリオグランデドスール州の概要を知ることができた」との声もいただいた。

また、ブラジルにルーツを持つ県内企業のスタッフにもサポートしていただきながら参加者に両県州について紹介することで、より説得力を持ってブラジルと日本の文化および本県とリオグランデスール州の友好の絆ならびに双方の魅力を広く発信することができたと考えている。

5 当日の写真



滋賀県・リオグランデドスール州姉妹県州協定締結 45 周年記念交流団の派遣

1 目的

滋賀県とブラジル リオグランデドスール州（以下「RS 州」）との姉妹提携 45 周年に当たり、2010 年 11 月以来となる県交流団（滋賀県・リオグランデドスール州姉妹県州協定締結 45 周年記念交流団。以下、交流団）を同州に派遣し、現地での対面での県民等交流を再開させることで、未来に向けた新たな友好交流関係を構築する。

2 団の構成

知事団、県議会団、経済交流団、記念事業団、滋賀公園団、治水協力団等総勢 28 名の団

員により交流団を構成。

3 主な成果

1) 滋賀県・リオグランデドスール州知事会談および共同宣言への署名

農業や再生可能エネルギー分野での連携の可能性や人材交流など、RS州との今後の交流について幅広く意見を交わすとともに、両県州の友好関係のさらなる発展に向けた共同宣言に署名することができた。

2) 滋賀県流域政策局職員の現地派遣による治水に関する知見の共有

昨年RS州でブラジル史上最悪といわれる水害が発生したことをうけ、交流団のメンバーとして流域政策局の職員3名が現地を訪問し、関係者との意見交換や現地調査を実施した。レイテ州知事もこの取組を非常に感謝していただき、治水に関する知見の共有や技術者の交流を今後さらに進めていくことで合意した。

3) ブラジルとの人のつながりの再構築

今回、滋賀県知事の訪問が2000年の國松知事以来25年ぶり、滋賀県議会議長の訪問が2006年の赤堀議長以来19年ぶりということで、ブラジル滋賀県人会やリオグランデドスール州の関係者など多くの方から温かく迎えていただき、交流を深めることができた。さらに、県議会団や経済交流団など多様なメンバーで訪問したことで、RS州の州議会や経済関係者などとの交流も生まれた。

4) ブラジルでの滋賀県の魅力発信

ジャパンハウス・サンパウロでの滋賀県セミナー開催とRS日本祭りでの滋賀県ブース出展を通じて、今年9月の大阪・関西万博での両県州の姉妹交流イベントなどの友好交流の歩みを発信するとともに、滋賀の地酒や琵琶湖の環境保全の取組、観光情報などを来場者に広く発信することができた。

4 各行程概要

1) 11月12日(水)

① マウリシオ・デ・ソウザ・プロダクション訪問 県議会団、経済交流団

(9:30-10:40@マウリシオ・デ・ソウザ・プロダクション)

マウリシオ・デ・ソウザ氏(90歳)はブラジルの国民的な漫画家で、日本の学校のことを外国人目線で紹介した、冊子「モニカ&フレンズ 日本の小学校へ行く」などを制作し、県内の学校に寄贈されるなど、日本に住む外国にルーツを持つ子どもたちの環境改善に繋がる支援活動を行われている。平成31年4月、令和5年4月には県庁を訪問いただいている。

今回の訪問ではマウリシオ氏の配偶者をはじめ、マウリシオ氏のご家族と面会・会談し、プロダクションのオフィス内の視察を行った。



② 在サンパウロ日本国総領事との昼食会 知事団、県議会団、経済交流団
(12:00-14:10@在サンパウロ総領事館)

ブラジル事情について在サンパウロ総領事館よりブリーフィングをしていただくとともに、今後の県とブラジルとの交流について意見交換を行なった。



③ ブラジル日本移民資料館の視察 知事団、県議会団、経済交流団
(14:40-15:20@ブラジル日本移民資料館 (日伯文化協会ビル内7階～9階))





④ ジャパンハウス・サンパウロでの滋賀県セミナー 知事団、県議会団、経済交流団、記念事業団
 (16:00-18:00@ジャパンハウス・サンパウロ 2階「セミナールーム」)

外務省の対外発信拠点であるジャパンハウス・サンパウロ（以下、JHSP）で「滋賀県セミナー～日本最大の湖を守る滋賀の知恵と地酒の魅力～」と題して、在サンパウロ総領事館と滋賀県の共催でイベントを実施。ブラジルの政府関係者やメディアら約 80 人が参加。知事が記念スピーチをおこなうとともに、交流会では滋賀の地酒体験、セタシジミ（琵琶湖固有種）のストラップづくり体験、観光PRブース（観光パンフレットの配布、願いだるまの奉納体験）などを実施し、滋賀県の魅力や琵琶湖保全の取組、観光情報等を来場者に発信。



- ⑤ ブラジル滋賀県人会との交流 知事団、県議会団、経済交流団、記念事業団
(19:00-21:00@ブラジル滋賀県人会館)



- ⑥ ポルトアレグレ市調査 治水協力団

ポルトアレグレ市役所のDMAE（市の上下水道、堤防や排水機場の管理部門）との意見交換を実施。市側にこれまでの治水対策等について聞き取りを行ったうえ、滋賀県からは、県の進める流域治水の概要の考え方やなどを共有。その後、ポルトアレグレ港近くの浸水痕跡、排水機場、水門の補強状況、市北部のグラバタイ川付近の堤防整備状況、サランジ地区（ヴィラ）の浸水痕跡、堤防決壊箇所の復旧状況、排水機場などの視察を行った。



- ⑦ 滋賀公園での式典出席ならびに公園内の視察 滋賀公園団
(13:00-17:00@滋賀公園)

滋賀公園での式典に出席するとともに、日本庭園の管理に関する技術指導を実施。



2) 11月13日(木)

- ① ブラジル日本移民開拓先没者慰霊碑 訪問 知事団、県議会団、経済交流団
(9:40-10:10@イビラプエラ公園内)





② 日本館の視察 **知事団、県議会団、経済交流団** (10:10-10:40@イビラプエラ公園内)



③ イボチ市訪問 **知事団、県議会団、経済交流団**

(16:00-17:30@イボチ市移住資料館およびイボチ会館)

RS州内最大の日系人居留区であるイボチ市の視察およびイボチ日系人コミュニティの皆さんと交流。



④ ポルトアレグレ交響楽団青年オーケストラ県代表团歓迎ミニコンサート

知事団、県議会団、経済交流団

(18:30-19:00@モイーニョス・ショッピングモール)

ポルトアレグレ交響楽団青年オーケストラによる交流団のRS州訪問に対する歓迎コンサートに参加。



⑤ 南日伯援護協会との交流会 知事団、県議会団、経済交流団
(20:00-21:30@CASA DO MARQUES)

ブラジルの日本人移民とその子孫に社会援助を提供すると同時に、地域社会全体のための文化、教育、スポーツイベントの推進に取り組んでいる南日伯援護協会（1971年設立の非営利団体）と交流。

⑥ リオグランデドスール州調査 治水協力団

政府の施設（モニタリング室、情報発信室）を案内いただいた後、州政府との意見交換を行い、州政府の治水に係る体制や昨年の洪水土砂災害の状況、現在の復興状況について聞き取りを行った。滋賀県からは、昨日のポルトアレグレ市役所との意見交換と同様に県の進める流域治水の概要の考え方を共有した上で、多段階のリスクマップを用いた都市計画や建築との連携、浸水リスクが高い地域の避難計画の作成支援、学校等での出前講座、土砂災害の区域指定、マイ・タイムラインや防災アプリなどの県の取組を紹介した。午後からは、ムスン市とエンカンタード市に出向き、各市の市長から昨年の被災状況の説明を受けた。



⑦ 滋賀公園での技術指導 滋賀公園団 (9:00-16:00@滋賀公園)
滋賀公園で日本庭園の管理に関する技術指導



3) 11月14日(金)

① 知事会談 知事団、県議会団、経済交流団、滋賀公園団、治水協力団

(11:00-13:30@ピラチニ宮殿)

両県知事が会談し互いに署名のもと共同宣言を行うことで、両県が45年間に築き上げてきた友好交流の歴史を改めて確認するとともに、様々な分野で、未来に向けた新たな友好関係を構築した。



② 滋賀公園記念式典 知事団、県議会団、経済交流団、滋賀公園団、治水協力団

(14:00-15:30@滋賀公園)

姉妹協定締結45周年を記念して、姉妹交流の歴史や滋賀公園(※)のコンセプトを紹介する看板の除幕式のほか、桜の苗木を植樹した。

※ 1983年に滋賀県から同州都へ日本庭園「滋賀公園(プラッサ・シガ)」を寄贈(材料は全て現地調達)。公園には、琵琶湖を型取った池や伊吹山をイメージした築山がある。2024年に同州都ポルトアレグレ市により、修復工事が行われるなど、現地の人々から「小さな滋賀県」と呼ばれ、憩いの場として大切にされている。

(滋賀公園・看板)



③ グアイバ河の視察 知事団、治水協力団

(16:00-17:00@グワイバ河)

RS州政府の船舶から、RS州政府スタッフの説明により、姉妹提携のきっかけとなったブラジル最大の湖・パトス湖につながるグアイバ河を視察。



④ 州議会議長表敬訪問 県議会団

(16:00-16:30@ファロウピーリャ宮殿)

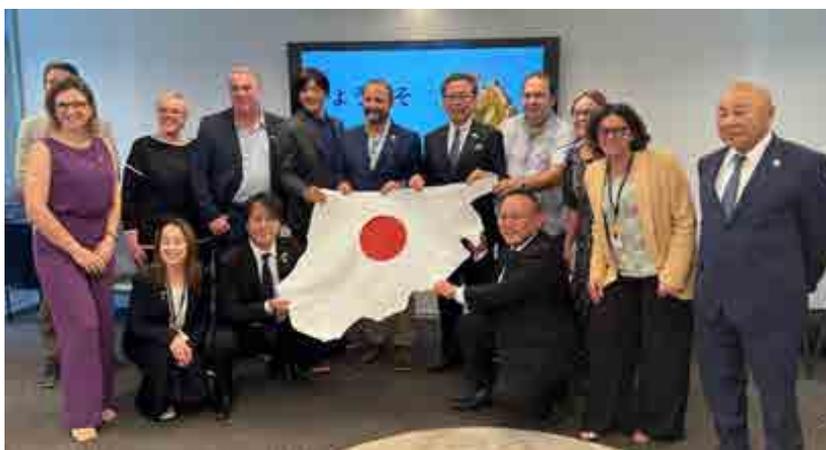
州議会議長を表敬訪問し、議員交流も含めたRS州との今後の交流の可能性について意見交換。



⑤ 州内企業等との交流 経済交流団

(16:00-17:30@InvestRS)

国内投資を呼び込むリオグランデドスール州の外郭団体である InvestRS を訪問し、RS 州内企業 3 社と今後の両県州の経済交流の可能性について意見交換。



4) 11月15日(土)

① リオグランデドスール州日本祭り

知事団、県議会団、経済交流団、滋賀公園団、記念事業団、治水協力団

(11:00-14:30@エストイオ市 国際見本市 (Exposicoes Assis Brazil))

国際見本市内に設置された日本庭園の記念プレートの除幕式に出席。その後、日本祭りの開会式において、知事と議長が挨拶。また、RS日本祭りが開催された11月14日から16日までの3日間設置した滋賀県発信ブースでは、忍者衣装体験や信楽焼やびん手まりなどの伝統工芸品の展示、セタシジミのストラップづくり、竹生島の願いだるまの奉納体験などのコンテンツを提供し、多くの来場者に滋賀県の魅力を体感いただいた。



② グワイバ河の視察 県議会団、経済交流団、滋賀公園団
(16:30-17:30@グワイバ河)

ブラジル最大の湖・パトス湖につながるグアイバ河を船で視察し、ポルトアレグ市の街並みや昨年の水害被害の洪水の跡などを確認した。



(3) 事業の目標に対する成果

本事業により、姉妹提携45周年という節目を契機に、滋賀県とリオ・グランデ・ド・スール州との歴史的な関係性を再確認し、相互理解を一層深化させることができた。単なる表敬訪問にとどまらず、万博理念やSDGsを共通の対話軸とすることで、交流の意義を未来志向で再定義する機会となった。また、若い世代や関係者の参画を通じて、次世代へとつながる関係基盤の強化が図られた。

(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

本事業は、長年継続してきた姉妹交流を万博という国際的舞臺と接続することで、交流の意義を国内外に発信する契機となった。周年事業を通じて構築された人的ネットワークや相互訪問の成果は、今後の教育・文化・経済分野での連携拡大の基盤となる。万博後も継続可能な関係性を築く土台が形成され、交流を一過性に終わらせないレガシー創出につながった。

(5) 特に良かった点・苦勞した点

●良かった点

姉妹提携 45 周年という明確な節目があったことで、関係者間の目的意識が共有され、交流の意義を再確認する機会となった。また、万博開催年という社会的関心の高まりを背景に、交流の発信力を高めることができた。

●苦勞した点

海外との調整や日程調整、周年事業と万博関連事業を並行して進める体制面の負担が大きかった。また、式典的交流に終わらせず、住民や若い世代の主体的参画へと広げていくための工夫が求められた。

(6) 今後の展開

40 周年となる 2020 年以降は、新型コロナウイルスの感染拡大により人の往来による交流の実施は断念せざるを得ない状況が続いていたが、昨年 11 月にレイテ州知事が来県し、両県州知事会談で今後の交流について意見を交わし、今年 1 月に現地に交流協議団を派遣（令和 6 年度万博交流プログラム事業）したうえで、今回の記念交流団派遣の実現につながった。

また、昨年 4 月にブラジル史上最悪と呼ばれる大規模な水害が RS 州で発生した際には、県内で支援金を募り（募集期間：R6.7.29～R7.3.31）、集まった支援金 1,123,588 円を RS 州政府の口座に送金。さらに、今年 9 月には大阪・関西万博のブラジルパビリオンにおいて両県州の姉妹交流イベントを RS 州と連携して開催するなど、止まっていた両県州の交流を、大阪・関西万博等の機会を活用しながら、再起動させることができた。

今回の記念交流団の派遣を契機に、湖沼の重要性の発信や治水に関する知見の共有、企業間交流など、さまざまな分野で両県州の連携・人の往来が生まれるよう交流を活性化してまいりたい。

(7) 今後の展開における課題

姉妹提携 45 周年および万博開催という好機を得た一方で、交流を一過性の周年事業に終わらせず、継続的な取組として定着させる仕組みづくりが課題である。特に、交流が行政間の往来にとどまらず、若い世代や地域住民、関係団体へと裾野を広げ、主体的な参画を促す枠組みの構築が求められる。また、財源や人員体制の確保、継続的な情報発信の強化を通じて、万博後も相互理解と協働を深化させていく体制整備が必要である。

3-1 2 京都府 × チリ

(1) 背景と目標等

1) プロジェクトの背景

京都府立医科大学では京都府と強力な連携のもとで京都府唯一の政策医療の担い手として府民への質の高い医療を提供している。また、教育・研究の面でも優秀な人材育成のために国際化をテーマの一つに掲げており、2024年3月にチリ サンティアゴに位置するロスアンデス大学（以下、「ロスアンデス大学」という。）と学生、医師の国際交流のための協定締結を行った。

一方、チリの種々の文化や地域の状況については日本では十分知られていない状況である。加えて、医療面は保険制度など日本と種々異なり、大腸癌においては10年間で死亡率が1.6倍に増加しているにも関わらず、国民を対象とした検診制度が存在しない。そのため、発見される大腸がんの半数以上がステージ5という治癒が極めて困難な状態で見つかる深刻な課題を抱えている。

こうした背景から2023年にロスアンデス大学より将来的な大腸がん検診の導入を見据えた内視鏡医の教育、検診および最新の内視鏡技術の導入、さらには学生教育を目的とした学生交流および医療交流の連携について、京都府立医科大学へ依頼があった。これを受け、2024年3月に京都府立医科大学とロスアンデス大学間で国際学術協定を締結した。

同時期に募集されていた2024年度万博交流プログラムに対して、京都府立医科大学と京都府の連携のもと、在日チリ共和国大使および在チリ日本大使の協力を得ながら申請を行い、ロスアンデス大学との交流活動事業に対して万博プログラムに採択された。採択後は多大な支援のもとチリおよび京都の双方で現地交流を適宜進めるとともに、万博に向けた機運醸成にも寄与する形で活動を展開してきた。

さらに、2025年度万博交流プログラムにおいても、京都府立医科大学および京都府総合政策環境部大学政策課と協議を重ね、事業を実施する運びとなった。

2) プロジェクトの目標

これらのチリの状況を踏まえて京都府立医科大学とロスアンデス大学の国際学術協定および2025年の万博交流プログラムでの活動を土台に、EXPO2025大阪・関西万博の開催に向けて本事業によりチリの医療、地理、文化、言語などの情報共有を図る事業を行うことでさらに交流を深めることを目的に事業を行った。また日本およびチリにおいて大腸癌が増加している現状を広く国民に伝え、日本での大腸癌検診の啓発、チリでの大腸癌検診の導入を促すような種々の活動を行う。

(2) 事業内容

下記の3つのイベントを開催し、チリの医療、地理、文化面での交流を図り多くの京都府民の参加を促し、日本の大腸癌が増加していることについても触れ、検診や内視鏡の重要性及び最新の医療技術などを伝えた。

■ イベント1

1)府民公開講座 万博 2025 連携京都・チリ交流公開セミナー「大腸癌の予防・検診・内視鏡を知ろう」

① スケジュール

2025年7月6日開催

② 体制

京都府立医科大学消化器内科および同大学附属病院内視鏡室、同大学国際学術交流センター、チリロスアンデス大学、京都府立医科大学事務局企画課、京都府総合政策環境部大学政策課

③ 内容

事前ミーティングおよび交流としてロスアンデス大学より German Lobos Gonzales 医師と Patricio Sepulveda Valdebenito 医師の2名を招へいた。両名は6月27日に東京へ到着し、6月29日に京都にて事前打ち合わせを行った。

6月30日は京都府立医科大学内の見学および交流を目的とし、同大学消化器内科医師とのミーティングを実施した。続く7月1日には、京都府立医科大学において内視鏡の実例を見学および討論を行い、併せて同大学消化器内科医局で開催した講演会において、チリにおける大腸癌の現状について講演をいただいた。

7月2日には、同大学にて内視鏡手技をシミュレーターを用いて実施し、両国の内視鏡手技について意見交換を行った。さらに、7月3日・4日は適宜内視鏡手技の見学を行い、チリの内視鏡医療の現状を踏まえた討論を重ねた。

7月6日には、京都府立医科大学図書館ホールにおいて府民公開講座「大腸癌の予防・検診・内視鏡を知ろう」を開催した。チリから招へいた2名の医師による講演、京都府担当者による

EXPO2025 大阪・関西万博の紹介講演、さらに同大学医師による2つの講演を実施した。講演会の開催にあたり、地元紙である京都新聞朝刊に告知を掲載したところ、50名の一般参加者が来場した。参加者へは、日本とチリにおける大腸癌検診の現状、最新の大腸癌診療、両国の文化の違い、EXPO2025 大阪・関西万博の取り組みについて紹介し、日・チリ間の交流を深め、万博の機運醸成を図った。また、最新のAI内視鏡に触れ、内視鏡の操作を体験できる展示も実施した。

さらに、7月7日には今回の府民公開講座について京都府立医科大学消化器内科および同

大学附属病院内視鏡室等の関係者による総括討論を行い、本公開講座の評価及び今後の課題整理を実施した。

④効果

A. 調査対象自治体内外への波及効果

府民公開講座の実施により多くの京都府民の来場が得られた。イベントにはチリ医師の招へいを行うことで現地の実地の声を京都府民に伝えることで効果を高めることができた。また京都府立医科大学で取り組んでいるチリのロスアンデス大学との国際交流や大腸癌の現状、検診の啓発、内視鏡の進歩や重要性、さらには万博事業の広報を多くの参加者に伝えることができた。

B. 本プロジェクト実施により元々の自治体の課題の解決に本プロジェクトが寄与した点
京都府における大腸がん検診の啓発および国際交流に活性化に寄与したと考えられる。

C. 相手国への波及効果

チリより医師を2名招へいしておりこの活動を帰国後ロスアンデス大学で報告いただいでおり、大腸がん検診の重要性および日本との交流の活性化に寄与したと考えられる。

府民公開講座
大腸癌の予防・検診・内視鏡を知ろう

本イベントでは、増加する大腸がんについての理解を深めていただくため、予防・検診・内視鏡診療に関する最新情報をご紹介します。また、実際に内視鏡や電気メスなどの医療機器にも触れていただける体験コーナーを設けています。京都府立医科大学 消化器内科では、高度な内視鏡技術を海外へ発信する取り組みを行っています。現在開催中の万博の支援を受け、チリでの大腸がん検診の導入や内視鏡技術の普及を進めており、その様子も本イベントでご紹介します。

日時：2025年7月6日(日曜) 午後1:00 - 3:00
場所：京都府立医科大学図書館1階 コトスクエア
<https://www.kpu-m.ac.jp/k/library/sougoannai/access.html>

午後1:00- 開会挨拶
京都府立医科大学大学院 分子標的予防医学 教授 武藤 慎弘 先生
午後1:05-1:30 大腸癌の検診と内視鏡 (講演20分、質疑5分)
京都府立医科大学大学院 消化器内科学 講師 吉田 遼久 先生
午後1:30-1:50 海外の大腸癌の現状とチリの文化の紹介 (講演15分、質疑5分)
チリロスアンデス大学 Patricio Sepúlveda医師, German Lobos医師
午後1:50-2:05 京都の文化とJPO2025大阪・関西万博に臨む取組 (講演10分、質疑5分)
京都府社会政策推進部 大学政策課 参事 異 大輔
午後2:05-2:30 大腸癌の予防 (講演20分、質疑10分)
京都府立医科大学大学院 分子標的予防医学 教授 武藤 慎弘 先生
午後2:30-2:55 参加者の内視鏡の操作体験 (20分)
午後2:55 閉会挨拶および万博との関わりのご紹介
京都府立医科大学大学院 消化器内科学 講師 吉田 遼久 先生

応募方法
下記のフォームもしくは右のバーコードを使って氏名、参加人数をご入力いただきお申込みください。7/5申し込み締め切りです。入場無料ですが定員は先着60名です。定員となり次第締め切ります。
申し込み <https://forms.gle/fz5Anx6Zd2yG4B5C6>

共催：京都府立医科大学がんプロフェッショナル養成センター、消化器内科、富士フィルム、京都大腸がん検診啓発ランナーズK-CG



■ イベント 2

1) 万博2025 関西パビリオン京都ブースでの展示(日本と世界の大腸癌の現状と検診啓発、

チリとの国際交流、最新 AI 大腸内視鏡の展示・体験、チリパビリオンとのクイズイベント開催)

① スケジュール

2025 年 9 月 8 日から 9 月 14 日

② 体制

京都府立医科大学消化器内科および同大学附属病院内視鏡室、同大学国際学術交流センター、チリロスアンデス大学、京都府立医科大学事務局企画課、京都府総合政策環境部大学政策課

③ 内容

万博会場関西パビリオン京都ブースにおいて 9 月 8 日から 14 日の 1 週間、京都府立医科大学付属病院内視鏡室の医師・看護師・技師、同大学事務局企画課、および京都府関係者、さらにチリから招へいした医師 3 名等の協力のもと、日本と世界の大腸癌の現状と検診啓発、チリとの国際交流を紹介する展示物を掲示し、来場者へ適宜説明を行った。また、最新の AI 大腸内視鏡システムや治療器具を展示し、成人・子供ともに実際に触れて体験することができるコーナーを設けた。

さらに、14 日にはチリパビリオンと共同企画として、大腸癌検診およびチリの文化に関するクイズイベントを開催した。京都ブースへの来場者は 1 日約 2,000 名であり、1 週間で延べ 10,000 人以上が展示を見学・体験した。

チリから招へいした 3 名の医師は、9 月 11 日に東京に到着し、9 月 12 日に在京チリ大使館を訪問し、今回の万博での活動についてミーティングを行った。その後 9 月 13 日に大阪へ移動し 9 月 14 日に万博での展示のサポートを行った。特にチリパビリオンとの共同で開催したクイズイベントでは両パビリオンでの国内外の参加者に対して展示物およびクイズ説明を行い交流を深めた。

9 月 15 日には京都へ移動し、16 日に京都府立医科大学にて夜久学長と面談し、本年度の活動内容の総評および今後の交流について協議・合意した。また、京都府立医科大学外科医師、同大学消化器内科医師および学生との交流を目的としたミーティングを行い、医療情報の交換ならびに今後の具体的な交流について意見交換を行った。

④ 効果

A. 調査対象自治体内外への波及効果

万博での展示により多くの京都府内外の来場者に京都府立医科大学で取り組んでいるチリのロスアンデス大学との国際交流や大腸癌の現状、検診の啓発、内視鏡の進歩や重要性を多くの伝えることができた

B. 本プロジェクト実施により元々の自治体の課題の解決に本プロジェクトが寄与した点
本イベントに参加した京都府民およびチリ国民に大腸がん検診の啓発、大腸癌の現状の把握に寄与した。また、チリとの国際交流や万博事業についても多くの参加者に伝えることができた。

C. 相手国への波及効果

万博での展示を行うことでチリを含む国内外の参加者に広く我々の活動を伝えた。



万博会場にて



在京チリ大使館にて



京都府立医科大学にて学長および
消化器内科医師・学生との交流

■ イベント 3

1) チリロスアンデス大学訪問および現地での交流

① スケジュール

2025年12月15日から19日

② 体制

京都府立医科大学消化器内科および同大学附属病院内視鏡室、同大学国際学术交流センター、チリロスアンデス大学、京都府立医科大学事務局企画課、京都府総合政策環境部大学政策課

③ 内容

京都府立医科大学から3名の医師がチリロスアンデス大学を訪れ、現地医師、医療従事者との交流を行い、これまでの万博交流プログラムの支援の成果および今後の展望について意見交換を実施した。さらに日本とチリにおける大腸癌検診の現状をテーマとした講演会を開催し、検診の現状、内視鏡手技について講演を行った。

また同大学附属病院の内視鏡検査にも立ち会い、手技の見学・技術指導を実施したほか、多くの患者（20名）との対談を通じて大腸癌診療および検診について情報共有を行った。期間中にチリ保健省を訪問し、アギレラ大臣およびチリ関係者とともに、今後のチリでの大腸癌検診の導入に向けた協議を行った。加えて、内視鏡手技のハンズオンセミナーを行い、ロスアンデス大学外の多くの医師（20名）とも交流を深め、技術指導を行った。

さらに、同大学附属病院の病院長、がんセンター長、消化器内科部長らとのミーティングを開催し今後の交流についての合意を行い具体策を検討した。

④ 効果

A. 調査対象自治体内外への波及効果

国内外からの参加者に広く大腸癌の世界における増加の現状、大腸がん検診の重要性が伝わり、その問題解決として内視鏡の進歩が図られていることも伝えることができた。

B. 本プロジェクト実施により元々の自治体の課題の解決に本プロジェクトが寄与した点
京都府における大腸がん検診の啓発および国際交流に活性化に寄与したと考えられる。

C. 相手国への波及効果

京都府立医科大学から3名の医師がチリを訪問することで今回得られた交流がさらに深まり、今後の交流の継続への合意が確定された。



（3） 事業の目標に対する成果

京都府立医科大学とロスアンデス大学との協定および2025年の万博交流プログラムでの活動を土台に、チリの医療、地理、文化、言語などの情報共有を図る事業を行うための日本国内で2つのイベント、チリで1つのイベントを行い交流を深めることに成功した。また日本およびチリにおいて大腸癌が増加している現状を広く国民に伝え、本邦の大腸癌検診の啓発、さらにチリでの大腸癌検診の導入を促すような種々の活動を行うことができた。

（4） 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

万博事業の支援をえてチリとの交流が一層深まったことが成果であり、レガシーとして残していきたい。今後の交流は両大学において合意が得られており、学生および医師の交流を継続していく。

最終的にはチリにおける大腸癌検診の導入、そのための内視鏡医の育成のための活動を行っていく。

（5） こども（または参加者）にとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

府民公開講座において来場者を対象としたアンケート調査を実施した。参加者 50 名のうち 25 名から回答を得ており、回収率は 50%であった。回答者のうち 19 名 (76%) が、2025 年の万博を契機として京都府立医科大学および京都府が連携し実施したチリとの国際交流事業について「価値のある取組である」と評価した。また、同事業を通じて国際的な取組や活動に対する関心が高まったと回答した参加者が多数を占めた。

さらに、多くの回答者が、このような国際交流に関する取組は今後も継続していくべきであるとの意見を示した。参加者の多くは成人であったが、「子供たちにも伝えていきたい」との意見も複数寄せられた。限られた参加者数ではあったものの、本事業が将来世代への波及や国際理解の促進につながる可能性を有していることが示唆された。

(6) 特に良かった点、苦勞した点

1) 良かった点

大腸癌の現状や検診啓発を広く行うことができた。またチリとの交流が深まり、万博事業についても広く京都府民と中心に、万博来場者、さらにはチリ国民にも理解を深めることができた。

2) 苦勞した点

- ・ 広報を行ったが、参加者の確保に苦勞した。
- ・ 現地チリとの連絡は主にメールでのやり取りとなり、返信が迅速に得られない場面もあり、調整に時間を要した。
- ・ 経費処理についても海外との取引が含まれるため、対応が難しい部分があった。

(7) 今後の展開

今後は 2026 年 3 月には、ロスアンデス大学からの正式招待により、京都府立医科大学消化器内科吉田医師（本万博事業担当）に加え、現在調整中であるが、内視鏡医 1 名がチリを訪問する予定である。

また、2026 年中には 1～2 回の招へいが予定されている模様である。

ロスアンデス大学訪問に加え、インターネットを活用したオンライン講演や教育プログラムもこれまでに実施しており、いずれも成功を収めていることから、今後も継続して実施する予定である。また、京都府立医科大学の学生 2 名がチリを訪問する計画も進んでいる。一方、ロスアンデス大学からは、2026 年に 1 名の医師が 4 月から 6 月の間に約 1 か月間、京都府立医科大学において内視鏡研修を行う予定となっている。さらに、それ以降についても継続的な受け入れを検討している。

これまで京都府立医科大学で研修を受けたチリ人内視鏡医は、現地においてすでに高度な内視鏡治療を実践しており、教育面においても徐々に成果が現れ始めている。

今後も現地における内視鏡医育成を継続的に進めることで、最終的にはチリにおいて南米で初となる「国民全体を対象とした対策型大腸がん検診」の導入につながるよう、活動を発

展させていきたいと考えている。

(8) 今後の展開における課題

交流の継続にあたり資金面での課題がある。そのため、日本側・チリ側双方において、国家および民間の助成など多様な助成制度への申請を進め、必要な資金の確保を図っていく予定である。

一方で、オンライン形式での交流や他国で開催される国際学会でのミーティングなどを生かし、柔軟に交流を継続する機会を確保していく。京都府および京都府立医科大学が適宜連携し、今回の交流によって生まれた関係性を発展させるため、持続可能な交流活動の在り方を引き続き検討していく。

3-13 大阪府 × アラブ首長国連邦 (UAE)

(1)背景と目標等

1)背景と目的

アラブ首長国連邦ドバイ市と本府は、2002年10月に「大阪とドバイとの友好交流に関する協定」を締結。以来、経済分野を中心に交流を実施してきた。最近では、2022年に大阪府知事がドバイ万博を訪問し、閉幕式など公式式典に次期開催地首長として参加。2023年6月には、在UAE日本国大使が大阪府知事と面談し、教育分野での交流について意見交換を実施するなどしてきたところ。今後は、経済分野における交流事業の拡大及び経済分野以外での交流の裾野拡大が課題となっており、大阪・関西万博の機会をとらえ、その拡大を図ることを目的とする。

2)目標

万博の地元開催により国際交流の機運が高まっている中で、万博を契機に来阪するドバイ市訪問団とのネットワーキングを実施することにより、さらなる相互の交流と理解の促進を図る。

(2)事業内容

1) アブドゥラ・モハメド・アルバスティ・アルマリ事務総長率いるドバイ首長国行政評議会訪問団一行 来阪対応

①スケジュール

- i.5月29日…大阪府スマートシティ戦略部との意見交換会
- ii.5月29日…大阪府立水都国際高校 視察
- iii.5月30日…大阪府知事への表敬訪問

②体制

- ・大阪府側：大阪府スマートシティ戦略部、大阪府教育庁・大阪府立水都国際中学校・高校、大阪府国際課
- ・ドバイ側：アブドゥラ・モハメド・アルバスティ・アルマリ 事務総長をトップとする訪問団8名

③内容（日時、場所、取組内容、参加者、報道対応等）

i.大阪府スマートシティ戦略部との意見交換会

日時：2025年5月29日 14:10～15:00

場所：大阪府咲洲庁舎

取組内容：スマートシティ実現のための取組に関する意見交換

参加者：ドバイ首長国行政評議会訪問団、大阪府スマートシティ戦略部、大阪府国際課

報道対応等：なし

ii.大阪府立水都国際中学校・高校 視察

日時：2025年5月29日 10:00～12:00

場所：大阪府立水都国際中学校・高校

取組内容：大阪府立水都国際中学校・高校における国際バカロレア教育の視察

参加者：ドバイ首長国行政評議会訪問団、学校法人大阪YMCA（指定管理法人）、大阪府立水都国際中学校・高校、府教育長

報道対応等：なし

iii.大阪府知事 表敬訪問

日時：2025年5月30日 14:50～15:10

場所：大阪府庁大手前庁舎

取組内容：府知事への表敬訪問対応、意見交換

参加者：ドバイ首長国行政評議会訪問団、駐日 UAE 大使館、大阪府知事、府府民文化部長、府国際交流監、府国際金融都市推進監、府国際ビジネス・スタートアップ支援課長

報道対応等：なし

④効果

A: 自治体内への波及効果

- ・ドバイ及び大阪府双方の間で、スマートシティや国際教育に関する課題認識の共有が図られた。
- ・府立中学・高校生に対して国際交流の機会を提供できた。

B: 実施により達成できた成果

- ・ドバイとの信頼関係が強化され、継続的な交流の基盤が構築された。
- ・公設民営型の学校運営に対する関心が示され、教育分野での連携の糸口が得られた。

C: 相手国への波及効果

- ・今後の都市開発や教育分野における協力の可能性が広がり、継続的な交流への意欲が醸成された。

2) マルワン・アハマド・ビン・ガリタ長官率いるドバイ政庁訪問団一行 来阪対応

①スケジュール

- .10月3日…ドバイ首長国コミュニティ開発庁長官と大阪府の意見交換会
- .10月3日…万博 UAE パビリオンにおける XDGs セッションへの参加（ガリタ長官、大阪府国際交流監 参加）
- .10月3日…ドバイ政庁長官及び UAE Water Aid Foundation 気候変動・持続可能性最高責任者と大阪府の意見交換会

②体制

- ・大阪府側：府成長戦略局、府教育庁、大阪市教育委員会、府環境農林水産部、企画室、府商工労働部、府国際課、大阪市水道局
- ・ドバイ側：ドバイ政庁マルワン・アハマド・ビン・ガリタ長官、コミュニティ開発庁ヘッサ・ブフマイド長官、UAE Water Aid Foundation モハメッド・アルシャムシ気候変動・持続可能性最高責任者 他 13 名

③内容（日時、場所、取組内容、参加者、報道対応等）

i. ドバイ首長国コミュニティ開発庁長官と大阪府の意見交換会

日時：2025 年 10 月 3 日 10:00～11:00

場所：大阪府大手前庁舎

取組内容：地域社会開発、生活の質の向上、エンパワーメント、日本の社会・教育分野をテーマに意見交換

参加者：ドバイ首長国コミュニティ開発庁長官ほか 7 名、大阪府教育長、府高等学校課長、府地域教育振興課長、府国際金融都市推進監、大阪市教育委員会事務局総務部長、同指導部長

報道対応等：なし

ii. 万博 UAE パビリオンにおける XDGs セッションへの参加

日時：2025 年 10 月 3 日 13:00～14:00

場所：大阪・関西万博 UAE パビリオン

取組内容：2030 年以降の SDGs に関して意見交換（一般公開なし）

参加者：ドバイ首長国コミュニティ開発庁長官ほか 5 名、府国際交流監

報道対応等：なし

iii. ドバイ政庁長官及び UAE Water Aid Foundation 気候変動・持続可能性最高責任者と大阪府の意見交換会

日時：2025 年 10 月 3 日 15:00～17:00

場所：大阪府庁咲洲庁舎

取組内容：廃棄物管理、水害対策、カーボンニュートラルをテーマに意見交換

参加者：ドバイ政庁長官及び UAE Water Aid Foundation 気候変動・持続可能性最高責任者ほか 7 名、府国際交流監、府国際金融都市推進監、府環境農林水産部副理事、府企画室推進課参事、府商工労働部産業創造課参事、大阪市水道局工務部計画課品質管理担当課長

報道対応等：なし

④効果

A: 自治体内への波及効果

- ・友好交流都市であるドバイとの間で地域社会開発や教育、環境分野等における課題認識の共有が図られた。

- ・教育庁や環境農林水産部など複数部局が連携して対応したことで、庁内の横断的な国際対応力が強化された。

B: 実施により達成できた成果

- ・ドバイとの信頼関係が強化され、継続的な交流の基盤が構築された。
- ・教育・環境・水資源など多岐にわたる分野での意見交換を通じて、連携の糸口が得られた。

C: 相手国への波及効果

- ・今回の交流を契機に、大阪府との交流関係を活発化していきたいという意欲が示された。

(3) 事業の目標に対する成果

- ・万博を契機に来阪したドバイ市訪問団とのネットワーキングを通じて、スマートシティ、教育、環境など多分野における意見交換を実施し、相互理解の促進に寄与した。
- ・表敬訪問や視察を通じて、信頼関係の構築が進み、継続的な交流の基盤が強化された。

(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価))

- ・万博を契機とした交流により、ドバイとの関係性が深化し、閉会後も継続的な交流が期待される。
- ・教育・環境・都市政策などの分野において、実務レベルでの対話が実現し、将来的な交流の可能性が広がった。
- ・相手国側からも継続的な交流への意欲が示されており、万博を通じた国際関係強化のレガシーとして位置づけられる。

(5) こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

- ・教育に関しては、ドバイと大阪の取組みに類似点が多く、今後の連携や生徒間交流の可能性が提示された。
- ・大阪府立水都国際中学校・高校における視察を通じて、生徒に国際交流の機会が提供された。

(6) 特に良かった点、苦労した点

1)良かった点

- ・多部局が連携して対応することで、庁内の国際対応力が向上した。
- ・意見交換のテーマが多岐にわたり、双方にとって有益な情報共有ができた。

2)苦労した点

- ・ 多部局にまたがる調整が必要な案件が多く、スケジュール調整や情報共有に時間を要した。
- ・ 意見交換先について、ドバイ側からの依頼が直前であったため、視察や意見交換について事前に内容を詰めることが難しく、満足いただけるか不安があった。

(7) 今後の展開

- ・ 万博閉会後も、継続的な交流ができるよう、府内関係部局が連携しながら、ドバイ市との交流の機会を模索し、ドバイ市との交流のチャンネルを維持する。

(8) 今後の展開における課題

- ・ 継続的な交流を実現するためのドバイ側とのチャンネルの維持。
- ・ 交流成果を府民や教育現場に還元するための仕組みづくり。

3-14 大阪府大阪市（三軒家東小学校） × ブラジル

（1）背景と目標等

1.1.背景

大阪府・大阪市では、新たな時代を切り拓くため、住民・企業をはじめ、あらゆるステークホルダーとともに、大阪が持つ豊かな歴史・文化や人々の多様な魅力、都市のポテンシャルを生かし、チャレンジし続けることにより、大阪を元気にし、府民・市民が誇りや愛着を感じることで、世界に誇る魅力あふれる都市を作り上げることを目指し、「大阪都市魅力創造戦略 2025」を策定している。本戦略では、「大阪・関西万博のインパクトを生かした都市魅力の創造・発信」「安全・安心で持続可能な魅力ある都市の実現」「多様な主体が連携し、大阪全体を活性化」の3つの基本的な考え方のもと、10の目指すべき都市像を定めた。各施策を推進し、また、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に貢献する視点を持って推進している。本事業は10の施策の一つである「出会いが新しい活を生む多様都市」に含まれる「多文化理解の促進」を図るものである¹。

本事業を実施することにより、大阪府・大阪市が進めている上記の戦略をさらに促進させ、大阪府・大阪市が世界に誇る魅力あふれる多文化共生社会を体現する都市とする。

1.2.目標

本事業を実施するにあたり、以下のとおり目標を設定した。

①海外の子どもたちが将来の交流の懸け橋となる可能性を育む

大阪・関西万博を契機に万博参加国・地域の関係者とお互いの国・地域の文化やSDGsに関する取組について交流することにより、お互いの子どもたちが万博の理念についての理解と関心を深める学習活動を行うことにより、将来的に海外の子どもたちが、大阪・関西と交流した経験を通じて、日本の社会・文化に理解や愛着を持つことで、日本と海外の国々の間における経済的なつながりだけでなく、様々な交流の懸け橋となることが期待できる。

②持続可能な社会を担う人材を育成する

大阪・関西の子どもたちには、この国際交流を実施することで、持続可能な社会を担う人材を育成する。

¹ <https://www.city.osaka.lg.jp/keizaisenryaku/page/0000531412.html>

(2) 事業内容

2.1.サンバレッスン (合唱・ダンス・合奏)

2.1.1.スケジュール

大阪市立三軒家東小学校では、昨年に引き続きブラジル連邦共和国（以下「ブラジル」）をテーマに、国際理解教育を展開した。今年度、本事業を実施するにあたり、全校児童は大阪・関西万博を訪問し、2年生から6年生においては、ブラジルパビリオンを訪問し、パビリオン担当者による解説を受けながら、ブラジルの豊かな自然や多様な文化、最新技術を紹介する展示を実際に自分の目で確かめた。児童たちは「本物に触れる」ことで学習への期待や興味を大きくふくらませることができ、今後取り組む国際理解教育に向けた気持ちの醸成につながった。自分たちが学ぶテーマが、世界の中でどのような広がりや意味を持つのかを実感する貴重な機会となった。

ブラジルについて理解を深めるにあたり、昨年度はサンバダンスのみを練習したが、今年度は範囲を広げ、サンバの曲に合わせた合唱（1,2年生）、ダンス（3,4年生）、合奏（5,6年生）を実施することとした。合唱については1回のレッスン、ダンス、合奏については3回のレッスンを実施した。ダンスレッスンのうち第1回レッスンはオンラインで実施した。レッスン計画の詳細は以下の表のとおり。

表 1 サンバレッスン計画

	1, 2年生 合唱	3, 4年生 ダンス	5, 6年生 合奏
9月5日(金) オンライン・対面	レッスンなし	9:40～10:25 (オンライン)	10:45～11:30 (対面)
10月7日(火) 対面	9:40～10:25 ※10月17日(金)	10:45～11:30	11:40～12:25
10月29日(水) 対面	レッスンなし	9:40～10:25	10:45～11:30

出所：大阪市作成

2.1.2.体制

本事業は、低学年、中学年、高学年に分かれてそれぞれレッスンを実施した。全てのレッスンは、これまで多くのサンバダンス講師を担当した経験があり、豊富な指導経験があると同時に、自身もプロのサンバダンサーとしての長年にわたる実績を有している中島洋二氏が統括した。同氏はサンバチームに所属しており、自身のダンスレッスンのみならず、合唱、合奏の指導者とコネクションを有している。本事業では、同サンバチームに所属するメンバーから、低学年の合唱レッスンは中野氏、合奏レッスンは安達氏が担当した。

2.1.3.内容

サンバレッスン（合唱・ダンス・合奏）については以下のとおりの活動を実施した。

日付	実施内容
2025年 10月17日(金) 合唱レッスン	<ul style="list-style-type: none"> - 歌い方のポイント（発声の姿勢、息の使い方、言葉の明瞭さ等）の練習 - 曲の情景をイメージしながら声を出す練習
2025年 ①9月5日(火) ②10月7日(火) ③10月29日(水) ダンスレッスン	<ul style="list-style-type: none"> ① 第1回レッスン（オンライン） <ul style="list-style-type: none"> - サンバダンスの基礎となるステップの練習 - 3年生、4年生と教室を分けてオンラインで実施 - レッスンフォローアップとして、ステップ練習動画を作成 ② 第2回レッスン（対面） <ul style="list-style-type: none"> - 基本ステップの振り返り - 本番と同様の振り付けを、音源を使用せずにカウントに合わせて練習 ③ 第3回レッスン（対面） <ul style="list-style-type: none"> - 音源を使った振り付け練習 - ステップのポイントやリズムの取り方を重点的に練習 <div data-bbox="539 999 1289 1559" style="text-align: center;"> </div> <p style="text-align: center;">第1回オンラインレッスンの様子</p>
2025年 ①9月5日(火) ②10月7日(火) ③10月29日(水) 合奏レッスン （全て対面）	<ul style="list-style-type: none"> ① 第1回レッスン <ul style="list-style-type: none"> - 楽器ごと分かれて基本的なリズム打ちの練習 - 楽器ごとのリズムを全体セッション ② 第2回レッスン <ul style="list-style-type: none"> - 楽器ごとのリズム打ち練習 - 本番と同様のリズムに合わせて、音源を使用せずに練習 ③ 第3回レッスン <ul style="list-style-type: none"> - 音源を使った練習



第1回レッスンの様子

2.1.4.効果

練習開始当初、児童のブラジルに対する印象は「サッカーの国」という程度であったが、日本では馴染みの薄い曲調やリズムに合わせて練習を重ねるうちに、大阪・関西万博への訪問も後押しし、次第にブラジルへの興味や関心が高まった。さらに、実際のサンバの情景を思い浮かべながら練習に取り組むことで、現地の文化や雰囲気思いを馳せる姿が見られた

合唱については、歌い方のポイント（発声の姿勢、息の使い方、言葉の明瞭さ等）に注意しながら、曲の情景をイメージし、低学年らしい明るく元気のよい歌唱ができていた。ダンスについては、サンバ独特の膝を柔らかく使うステップの練習に苦戦しながらも、日本で馴染みのあるリズムとの違いを楽しみながら練習を重ねた。合奏では、各楽器でリズムのパターンが異なるため、他の楽器の音につられてテンポが乱れる場面も見られたが、回数を重ねるごとに全体の一体感が高まり、曲としての完成度が向上していた。

2.2.ブラジルデー

2.2.1.スケジュール

2025年11月28日(金)、ブラジル日本人学校との交流を通じた国際理解促進、およびこれまでのサンバ練習の集大成として、ブラジルデーと称した児童集会を実施した。当日の進行は以下表2のとおり。

表2 当日の進行

時間	活動
10:00	エスコラ・アレグリア・デ・サベール鈴鹿校（以下、アレグリア校）到着
10:45	サッカー交流・カルタ大会（2グループに分かれて同時進行）
12:25	給食・昼休み
13:25	ブラジルデー

14:35	記念撮影
-------	------

出所：大阪市作成

2.2.2.体制

ブラジルデイ全体を通しては、昨年度に続き三軒家東小学校と交流のあったアレグリア校を招待し、サッカー交流、カルタ大会、ブラジルデイを実施した。

- サッカー交流：カクススポーツオフィス代表である角田氏の企画・運営のもと、元サッカー日本代表のラモス瑠偉氏を招き、児童との試合および交流指導を行った。
- カルタ大会：アレグリア校教諭および本事業のサポート機関である株式会社かいはつマネジメント・コンサルティングの協力を得て、活動を実施した。また、全体通訳としてウェブソリューションズジャパン藤田フェリペ氏がポルトガル語通訳業務を担当した。
- ブラジルデイ：駐日ブラジル大使館よりロナウド・アマラウ公使参事官、大阪市大正区より、北吉秀輔副区長、前田年昭こども・教育担当課長、二階義明教育政策担当課長代理、などの臨席を賜り、アレグリア校との交流活動を実施した。また、大阪市教育委員会事務局から、阿部首席指導主事、竹田指導主事、海谷指導主事も参加した。行事の締めくくりとして、三軒家東小学校およびアレグリア校の児童がサンバを踊り、サンバレッスンを担当した中島氏率いるサンバチームの奏者、およびダンサーも加わり、会場全体で一体となって盛り上がった。

2.2.3.内容

サッカー交流、カルタ大会、ブラジルデイの実施内容は以下のとおりである。

日付	実施内容
2025年 11月28日(金)	<ul style="list-style-type: none"> - 参加者を4チーム(A, B, C, D)に分け、さらに1チームを2グループ(A-1, A-2, B-1…D-2)に分けた。 - ウォーミングアップに必要な準備体操やボールを使った練習はどんなものがあるかグループで話し合った上で、ウォーミングアップを実施。 - ラモス氏の巡回指導を得ながら、3試合プレー。各試合は前後半制とし、途中3分間チーム内での対話の時間を設けた。 - 各グループで相談のもと、1名ずつ選手を選抜し、選抜チーム対抗戦を実施。
サッカー交流	

<p>カルタ大会</p>	<ul style="list-style-type: none"> - アレグリア校教員によるポルトガル語でのアルファベット、単語の発音練習。 - 全体を10グループ（1グループ7名ずつ、うちアレグリア校児童1名）に分けて、ポルトガル語のカルタを制作。 - 制作したカルタを使ってグループ内での個人戦やグループ対抗戦を実施。感想を伝え合う。 - <p>カルタを制作する様子</p> 
<p>ブラジルデイ</p>	<ul style="list-style-type: none"> - 校長挨拶、駐日ブラジル大使館挨拶、来賓紹介 - 三軒家東小学校による大阪クイズ - アレグリア校によるブラジルクイズ - アレグリア校によるダンス発表 - 三軒家東小学校によるサンバ発表 - サンバチームによるサンバ披露 - アレグリア校 校長挨拶 - 記念撮影  <p>大阪クイズの様子</p>



サンバ発表の様子



サンバチームによるサンバ披露の様子

2.2.4.効果

サッカー交流では、①サッカーが持つ良質な効果を体験する、②ゲームを成立させる、③ゲームをする、みる、④ゲームについて対話（交流・共通理解）する、の4つの目標を掲げて交流を実施した。活動中は、各グループにサポート役の講師を配置し、全体の総括としてラモス瑠偉元サッカー日本代表から随時アドバイスを受けながら、「協働」をキーワードに学習を進めた。序盤は活動に消極的な姿も見られたが、時間の経過とともに児童は次第に主体性を持ち、仲間を応援したり、チーム運営に関わろうとしたりする行動へと変容していった。両校児童は、言語が異なる中でも、互いのルールを尊重しながらプレーすることができ、活動後には児童同士でハイタッチする姿や笑顔が溢れていた。本活動では、万博のテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」の趣旨に沿った活動を実施することで、児童が自ら

考え、表現し、協働する資質や能力が生まれ、多様性を尊重する気持ちが醸成された。また、ラモス瑠偉氏からは、自身がプレーする中で大切にしてきたことが語られ、児童たちは真剣な表情で耳を傾けた。

カルタ大会では、三軒家東小学校は、慣れないポルトガル語に戸惑いながらも、中には事前にポルトガル語を調べてまとめてきた児童もおり、相手の言葉を覚えようと真剣に取り組む姿や、互いに教え合いながら笑顔で楽しむ様子が見られた。言葉の壁を越えて一緒に遊ぶ中で、相手を思いやる態度や協力する姿勢が自然に生まれた。「相手の立場に立って考える力」を育成することは、万博のテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」に通ずる部分が多い。

ブラジルデイでは、互いの国に関するクイズを出し合いながら、文化や生活の違いを学び合い、理解を深めた。三軒家東小学校の児童が披露したサンバでは、アレグリア校の児童が自国の音楽や踊りを日本の友達を楽しそうに表現している姿に誇りと喜びを感じているようであった。サンバチームによるサンバ披露では、会場全体がサンバを通して「ブラジル」というテーマで一体となり、サンバを楽しみながらも国や文化の違いを超えて互いを尊重し合う温かい雰囲気に包まれた。アマラウ公使参事官から「今日の行事は、学校での学習成果を発表する機会を超えて、両国の友好を深める国家間の重要な出来事である」とのコメントがあったように、大阪・関西万博を契機とした本事業が児童の国際理解教育の促進に大きく寄与するものとなった。

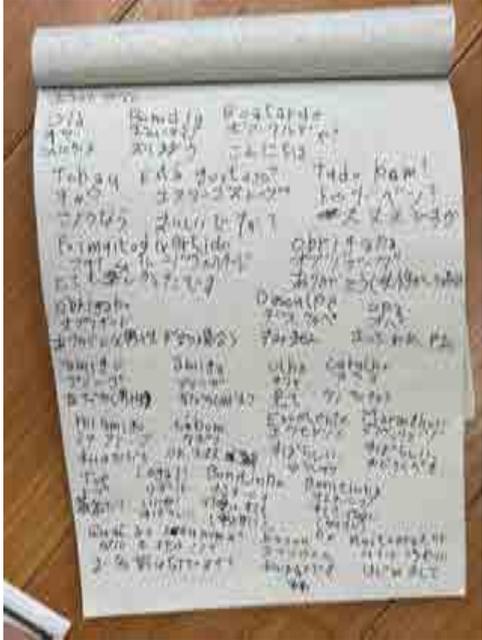
(3) 事業の目標に対する成果

3.1.1.成果

本事業は、大阪・関西万博におけるブラジルパビリオンの訪問から始まった。パビリオン訪問では、ブラジルの文化に触れることでこれからの学習への関心、意欲を高めることができた。

各目標における成果は以下のとおりである。

目標	成果
①海外の子どもたちが将来の交流の懸け橋となる	<p>事業開始時は「サッカーの国」という限定的な印象だった児童が、大阪・関西万博ブラジルパビリオン訪問での経験に始まり、サンバのリズムや曲調に触れることでブラジル文化への興味・関心が高まり、異文化理解と興味の深化を図ることができた。サッカー交流やカルタ大会においては、日本語とポルトガル語の壁に苦労しながらも、言語の違いを越えて協力し合うことで絆を深め、最後には友情や信頼関係が形成された。</p> <p>異文化に対する関心を促し、実際にブラジルの同級生と交流をすることで、単なる知識としてではなく、体験として異文化を受け止める機会を得たことで、異国の文化を慮る気持ちや、異国の人を思いやる気持ちが醸成され、将来にわたって国や文化の違いを越えた交流の担い手となるための素地が形成された。</p>

	<p>事後アンケートにおいても「これからブラジルの人と関わりを持ちたいと思いますか？」との問いに、約8割の児童が「とても思う」「まあまあ思う」との回答があり、将来にわたって自分がブラジル、ひいては海外との繋がりを持つことへの自覚や責任感が芽生えた様子が垣間見えた。これらの経験は、将来、国際社会において他者を理解し、尊重しながら関係を築いていく上での基盤となるものであり、本事業は、児童が将来的に日本と海外をつなぐ「交流の懸け橋」として成長していくための重要な第一歩を形成したと評価できる。</p>  <p style="text-align: center;">自主学习でポルトガル語をまとめたメモ</p>
<p>②持続可能な社会を担う人材を育成する</p>	<p>本事業を通して、児童は、多様な価値観や文化の違いを理解し、他者と協力しながら課題に向き合い、よりよい社会を主体的に築いていくことで、持続可能な社会を担う人材の基盤となる資質を実体験の中で育むことができた。サンバレッスンでは、合唱・ダンス・合奏という集団表現活動を通じ、仲間と息を合わせることの大切さや、互いの役割を尊重しながら一つの作品を完成させる協働の姿勢が養われた。サッカー交流では、言語や文化の異なる相手と同じフィールドに立ち、試合を成立させるために声を掛け合い、話し合い、工夫しながらチームを運営する経験を重ねることで、主体性や問題解決力、相手を思いやる態度が育まれた。活動の中で当初は消極的であった児童が、次第に積極的に仲間を支援、応援し、チームのために行動する姿へと変容していった点は、持続可能な社会に求められる「自ら考え、行動する力」が育成されたといえる。さらに、カルタ大会や児童集会を通じて、言葉や文化の違いを前向きに受け止め、互いの違いを認め合いながら交流する態度が自然に育まれたことは、多様性を尊重する社会の担い手とし重要な成果である。</p> <p>事後アンケート「あなたはこれから、この学習をどのように自分</p>

	<p>の生活に活かしていきたいと考えていますか？」の問いに対し、「日本のことを外国の人に分かってもらう」「他の国のことももっと調べてみる」「外国の言葉を学ぶ」などの回答が多く、他者と協働し、多様な価値観を尊重しながら行動する力を身につけつつあり、本事業は、将来の持続可能な社会を支える人材育成において確かな教育的成果を挙げたと評価できる。</p>
--	---

(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価))

本事業は、三軒家東小学校開校 150 周年という大きな節目の年に実施された取り組みであり、学校の歴史に新たな 1 ページを刻む意義深い事業となった。大阪・関西万博を契機とした国際交流事業を実施できたことは、学校の記念すべき年に花を添える取り組みになったのと同時に、記憶に残る教育活動として今後の学校運営・教育実践において語り継がれる学校としてのレガシーの一つになるといえる。また、本年度は大阪・関西万博を通してブラジルへの関心が高まる中で活動を進めることができ、児童にとっても「世界とつながる学び」をより現実的なものとして捉える機会となった点は、本事業ならではの大きな成果であった。

三軒家東小学校とアレグリア校との交流を通して育まれた絆は、児童や教職員の心に深く残るものとなった。言語や文化の違いを越えてともにサンバを踊り、サッカーで汗を流し、カルタ制作やクイズを通して学び合った経験は、単なる一時的な交流にとどまらず、「海外の友達と心が通じ合った」という実感として、児童一人ひとりの記憶に刻まれている。こうした心に残る体験は、今後の外国語学習や国際理解、さらには多様性を尊重する態度の形成など、将来にわたる学びの基盤として大いに生かされていくものであり、子どもたちの人格形成に寄与するレガシーであるといえる。

今後、レガシー創造にさらに貢献していくためには、こうした体験を一過性の行事として終わらせるのではなく、次年度以降の学年へと継承していく仕組みづくりが重要である。例えば、交流の記録や児童の感想を教材として残し、次年度の総合的な学習や外国語活動に活用すること、交流経験のある児童が下級生に学びを伝える場を設けることなどが考えられる。学校としては継続的な国際理解教育を実施していきたいと考えている。本事業は、その両面において、大阪・関西万博を契機とした意義あるレガシー創造の第一歩を確かに築いたものと評価できる。

(5) こども（または参加者）にとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

本事業では、大阪・関西万博を契機にブラジルをテーマとした国際理解教育を展開し、万博ブラジルパビリオン訪問やサンバレッスン（合唱・ダンス・合奏）、サッカー交流、カルタ大会、ブラジルデイ等を実施した。

パペリオン訪問では、児童がブラジルの自然・文化・技術に「本物に触れる」体験を通じて学習への期待と意欲を高めることができた。また、カルタ大会では慣れないポルトガル語に挑戦し、事前に調べ学習を行う児童も見られるなど、主体的に学ぼうとする姿勢が育まれた。

サッカー交流では、元日本代表選手の指導のもとチーム内での対話時間を設けながら試合を行い、協働する力や相手を尊重する姿勢を体験的に学んだ。さらに、ブラジルデイでは両校児童がサンバを通じて一体となり、国や文化の違いを越えて交流する経験を重ねた。

アンケートでは、「ブラジルを知るために役立ったか」「生活の中でブラジルのことを考えるようになったか」「今後どのように活かしたいか」といった設問を通じて、学習が日常や将来の意識に結びついていることを確認している。

これらの取組により、児童は異文化への理解を深めるとともに、「自分たちの学びが世界とつながっている」という実感を得ることができた。本事業は、将来の交流の懸け橋となる可能性を育むとともに、持続可能な社会を担う人材として成長していくための視野の拡大と主体性の育成につながり、子どもたちにとって将来に希望を感じさせる経験となったと考えられる。

(6) 特によかった点・苦勞した点

6.1.良かった点

本事業を通して、児童がブラジルの文化や音楽に直接触れながら学習することができた点が大きな成果であった。サンバの合唱・ダンス・合奏という体験的な活動を段階的に取り入れたことで、児童は単なる知識としてではなく、身体表現や協働の学習を通して異文化理解を深めることができた。また、オンラインと対面を組み合わせたレッスン形態を採用したことで、事前学習と実技指導の双方を効果的に行うことができ、学習の連続性を確保することができた。

さらに、学年ごとの発達段階に応じた指導内容が整理されたことで、すべての学年で学習効果の高い取組となった。児童からは「ブラジルについてもっと知りたい」「違う国の文化でも一緒に楽しめることが分かった」といった感想が多く聞かれ、国際理解教育への関心が着実に高まったことが確認できた。これらのことから、本事業は児童の国際感覚の育成および学級・学年を超えた一体感の醸成に寄与する有意義な取組であったといえる。

6.2.苦勞した点

一方で、事業を進めるにあたり、いくつかの課題や困難も見られた。まず、サンバ特有のリズムや身体の使い方は児童にとって馴染みが薄く、当初は動きがぎこちなくなる場面や、各楽器のリズムが合わず全体のテンポが乱れる場面が見られた点である。そのため、基礎動作やリズム練習に十分な時間を確保する必要があると、通常の授業計画との調整に苦慮する場面があった。

また、オンラインレッスンでは映像越しの指導となることから、細かな動きの確認や児童一人一人への個別指導が難しい場面が見られた。さらに、複数学年・複数教室で同時進行となる場面では、機器操作や通信環境の確認、教室間連絡や進行補助など、教職員による技術的・運営的サポートが不可欠であった。この結果、準備・調整・当日運営に係る業務量が大きく増加し、授業外時間における対応が増えるなど、教職員の負担は大きかった。

しかし、こうした課題については、指導者との事前打合せの充実、教材動画の活用、役割分担の明確化等により改善を図り、教職員間の協力体制のもと、最終的には安全かつ円滑に事業を実施することができた。

(7) 今後の展開

本事業において、今年度は全学年が何らかの形で学習に関わる形で展開されたことにより、三軒家東小学校全体として国際理解教育に取り組む土台が形成された点に大きな意義がある。今後はこの成果を生かし、単年度の行事として完結させるのではなく、全学年が継続的にこの取り組みを活用し、それぞれの発達段階に応じた国際理解学習へと発展させていくことが期待される。例えば、低学年においては、音楽や遊び、簡単な言語体験を通して「外国の文化に親しむ」ことを中心に据え、中学年では異文化の生活や価値観の違いに目を向けさせ、高学年では国際課題やSDGsと結び付けた学習へと段階的に深化させていくことが可能である。

特に、総合的な学習の時間や道徳科との関連付けは、児童の情操教育に有益なものとなる。たとえば総合的な学習の時間においては、「ブラジルの人々の暮らしと日本との違い」「サンバに込められた歴史や人々の思い」「サッカーが国を越えて人をつなぐ力」といったテーマ設定により、文化理解から国際協力、共生社会の在り方へと学びを広げることができる。また、道徳科においては、「相手を尊重する」「違いを受け入れる」「協力し合う」といった価値について、実際の交流体験を基にした教材化が可能であり、実感を伴った深い学びにつなげることができる。

さらに、今回の取組の発展として、JICAが提供している国際理解教育用教材や出前授業なども積極的に取り入れることで、より広い視野から世界を捉える学習への発展が期待される。たとえば、今回はブラジルのポジティブな文化について学習を進めたが、今後はこれにとどまらず、ブラジルが抱える社会課題として、暮らしや水、教育、貧困といったテーマを設定することで、今回の音楽や交流体験を入口に、国際協力や持続可能な社会の実現といったより大きな視点へと学びをつなげていくことができる。このように、本事業は今後、教科横断的な学習の基盤として、さらなる広がりを持って発展させていくことが可能である。

(8) 今後の展開における課題

本事業の成果は大きい一方で、今後の継続的な展開に向けてはいくつかの課題も明らかとなった。第一に、サンバの指導に関し、当日の児童の発表は素晴らしいものであった

が、入場時の隊形づくりや楽曲の変調への対応、学年ごとの動きの整理など、事前準備および当日対応において教員にかかる負担が非常に大きかった点が挙げられる。限られた授業時間の中で、通常の学習と並行して高度な表現活動の指導を行うことは、教員の業務負担の増大につながりやすく、今後継続するうえで無理のない指導体制の構築が求められる。

第二に、今年度は予算措置により、ラモス瑠偉氏やサンバチームなどの専門家から協力を得ることができたことで質の高い体験活動が実現したが、次年度以降に同程度の予算を確保できるとは限らない点も大きな課題である。専門指導者の存在は児童の意欲や学びの深まりに大きく寄与する一方、外部人材への依存度が高すぎると、事業の継続性が財政状況に左右されてしまうおそれがある。

第三に、今年度は大阪・関西万博という社会的な大きな契機があったことにより、国際理解教育に対する関心や意義づけが非常に高まりやすい環境にあった。しかし、万博という特別な追い風がなくなった後においても、同様の熱量で国際理解教育を継続できるかという点については、今後の工夫が必要である。社会的な機運に頼るだけではなく、学校の教育課程の中にいかに位置付けていくかが、持続的な実践の鍵となる。

継続するための方策

本事業を一過性の取組として終わらせることなく今後も継続していくためには、学校全体として無理なく取り組める仕組みづくりが不可欠である。まず重要なのは、今回の活動内容や指導方法、運営上の工夫点などを「実践記録」として体系的に整理・保存することである。指導案、写真、動画、児童の感想、運営メモなどをデータ化し、次年度以降の教員が参考にできる形で共有することで、担当者が代わっても一定水準の実践を再現できる体制を整えることができる。

また、教員の異動や役割分担の変更は学校現場では避けられない現実である。そのため、特定の教員の熱意や個人の力量に依存する形ではなく、学年団や分掌単位で役割を分担し、複数名で事業を支える体制づくりが求められる。さらに、校内研修の場などで本事業の意義や成果を共有し、学校全体として国際理解教育の方向性を共有しておくことも、継続性を支える重要な要素となる。

予算面については、すべてを外部講師に依頼するのではなく、簡易的なリズム指導や動画教材の活用、校内での指導の充実など、コストを抑えながら実施できる工夫も必要である。加えて、JICA や自治体、国際交流団体などが提供する無償教材や出前授業、オンライン交流などを組み合わせることで、費用負担を抑えつつ学習の質を高めることが可能である。

このように、「記録の継承」「複数教員による運営体制」「外部資源の効果的活用」という三つの視点を軸とした仕組みづくりを進めることで、本事業は今後も学校の教育活動の中に持続的に位置付き、学校としてのレガシー、そして児童一人ひとりの心に残るレガシーの両面を育み続けていくことができると考えられる。

3-15 大阪市（西淀川区） × ペルー

（1）背景と目標等

これまでの交流について

西淀川区では、南米国籍の方が多く暮らしており、特にペルー国籍の方は大阪市で最も多くの方（153人※令和7年9月末現在）が居住している。

出来島商店会は、10年以上前から南米の方を中心に多文化共生の取組みを進めてきた。

2017年からは、商店会のアイデンティティを打ち出し、地域とのコミュニケーションを深めようということで「インターナショナル出来島きら★きら通り」という愛称がつけられた。

2023年には出来島商店会主催で、ペルーとの交流イベントを開催している。

2024年は「国際交流プログラム」の交流相手国を「ペルー共和国」として調査対象に選定され、西淀川区役所主催で大規模な国際交流イベントを開催した。

今年度の交流について

大阪・関西万博会場での交流に向けて、関係先である、在日ペルー大使館並びに、ペルーのイベント会社などに交流方法について提案を行った。

当初は、ナショナルデーホールのステージでの歌唱や、ダンスの披露といった内容で、大使館を通じペルーのイベント会社に提案を行ったが、公式式典の内容がほぼ決まっていたこともあり、公式式典前の動画上映、一部ダンサーのステージ出演、ダンスグループによる大屋根リング下のパレード参加で交流計画を策定した。

また、アフター万博のレガシーについて、地域から大阪市へと国際交流を広げて継続していくためイベントを実施した。

（2）事業内容

1 「出来島商店会の多文化共生の歩み」動画の作成

これまで出来島商店会が取り組んできたことをたくさんの方に知っていただくことを目的に、動画を作成した。

（1）在日ペルー大使館への訪問

2025年7月30日（水）に西淀川区役所職員と出来島商店会の理事により、在日ペルー大使館を訪問し、在日ペルー大使館の一等書記官や大使館関係者、大使館のある渋谷区職員同席のもと、動画を視聴していただく。

視聴後は一等書記官と、ペルーと日本の共通点や今後の繋がりについて話し合う。

（訪問者）大阪市西淀川区役所職員2名、出来島商店会4名、渋谷区職員2名

（在日ペルー大使館）フリオ・テノリオ一等書記官、職員1名



(写真左) 動画視聴の様子



(写真右) 一等書記官と出来島商店会会長との写真

(2) 大阪・関西万博会場での上映

2025年8月9日(土)のペルー・ナショナルデーに、大阪・関西万博会場のナショナルデーホールにて、公式式典前に動画の上映を行った。

また、ナショナルデーホールでの公式式典では、出来島商店会と動画の出演者が招待席に着席し鑑賞を行った。



(写真左) 動画の様子



(写真右) ナショナルデーホールでの上映の様子

2 公式式典での西淀川区役所・出来島商店会の紹介

2025年8月9日(土)、ペルー共和国大統領や国際博覧会担当大臣や政府関係者が出席している式典中に、西淀川区・出来島商店会の紹介を司会者よりしていただいた。



(写真) 司会から西淀川区の紹介をしている様子

大阪・関西万博ペルー/ナショナルデー参加者

- ・西淀川区役所 区長・副区長・区政企画課職員 4名
- ・出来島商店会・動画出演者 16名

3 西淀川区在住のダンサーによるダンス・パレード参加

2025年8月9日(土)、公式式典でのダンスパフォーマンスに、西淀川区在住のダンサーが参加した。



大阪・関西万博ペルー/ナショナルデー交流記録
大阪府西淀川区役所広報
チャンネル登録
チャンネル登録

(写真) 公式式典のダンスパフォーマンス 1番右が西淀川区在住のダンサー

西淀川区在住のダンサー含むダンスグループが、大屋根リング下を1/4パレードを行う。



大阪・関西万博ペルー/ナショナルデー交流記録
大阪府西淀川区役所広報
チャンネル登録
チャンネル登録

(画像左) パレードのルート (写真右) 大屋根リング下のパレードの様子

(3) 事業の目標に対する成果

本事業では、大阪・関西万博を契機に、これまで地域で継続してきた多文化共生の取組を万博会場および広域イベントへと発展させることができた。

ペルー・ナショナルデーにおける動画上映や公式式典での紹介、ダンサーによるパフォーマンス参加を通じて、西淀川区および出来島商店会の取組を国内外に発信する機会を得た。これにより、地域主体の多文化共生の取組が政府関係者や万博来場者に広く認知される成果を上げた。

また、在日ペルー大使館との関係構築をさらに深めるとともに、大使館所在地である渋谷区とのつながりも生まれ、地域レベルの交流から都市間・行政間の交流へと広がりを持たせることができた。

さらに、万博後も地域イベントや市内イベントを実施し、交流の成果を地域へ還元するとともに、ペルー文化への理解促進と多文化共生意識の醸成につなげた。これにより、万博を一過性の機会にとどめず、継続的な国際交流の基盤形成に向けた具体的な一歩を踏み出すことができた。

(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価))

大阪・関西万博会場での交流イベントを記録した動画の作成を行った。

記録動画の作成は、今後の交流イベントにおけるプロモーション活動や、レガシー（活動の記録・継承）として非常に重要な役割を果たしていくと考えられる。



国際交流の繋がりを地域に還元する

2025年10月26日（日）に出来島地域にて、国際交流イベント「きら☆きらフェスティバル」を実施した。

今回の国際交流イベントは2部制により実施した。

午前中は、出来島コミュニティ会館（西淀川区出来島1-12-25）にて、招待者のみ参加可能なイベントとし、日ごろから地域に関わりのある方々を中心に、「出来島商店会の多文化共生の歩み」動画、大阪・関西万博での交流記録動画の視聴をしていただいた。

また、旅行添乗員にペルー共和国の魅力について語っていただき、より深くペルー共和国のことを知っていただいた。



(写真左) 旅行添乗員によるペルーの魅力発見トークの様子 (写真右) ナショナルデーでの記録動画上映の様子

午後からは、出来島第二公園（西淀川区出来島1丁目12）にて、どなたでも参加可能なイベントを開催。

ステージでは、ペルーのダンス、日本の漫才、地域主催のラッフル抽選会を催し、地域ブースでは、ペルー雑貨、地域のワークショップブース、キッチンカー出店など様々な地域での国際交流が行われた。



(写真左) ペルーダンスの様子

(写真右) 日本の漫才の様子

今後もペルー国籍の方含め様々な国籍の方と国際交流を継続し、多文化共生への取り組みを積極的に進めていく。

(参加者)

(午前の部)

- ・西淀川区役所 区長、職員 3名
- ・出来島商店会・動画出演者・各地区地域活動協議会会長、約 15名
- ・国会議員・府議会議員・市議会議員 5名

(午後の部)

- ・参加者 500名

西淀川区での国際交流の繋がりをさらに広げる

2025年12月14日（日）の14時から阪急グランドビル30階（大阪市北区角田町8番47号）にて、大阪市内在住・在勤の方を対象に国際交流イベントを実施した。

また、午前中は、「ホームメイドクッキング梅田」（料理教室）（住所：大阪市北区梅田1-2-2 大阪駅前第2ビル1階）にて、在日ペルー大使館によるペルー料理の料理教室を開催した。

午前中の料理教室では、ペルーを代表する料理「セビーチェ」を参加者とともに調理した。

参加者は、出来島商店会・ペルーダンサー・渋谷区職員約10名。



（写真）料理教室の様子 セビーチェを調理

午後からは、前回の地域イベントで好評であった「旅行添乗員によりペルーの魅力紹介」にて、ペルーの基本情報・日本人旅行添乗員によるペルー旅行の情報を説明。

その他、大阪・関西万博での交流記録動画の上映、ペルーダンス、ペルー料理の提供、在日ペルー大使館の一等書記官から、大使館・領事館の役割などの説明を行った。

参加者からは、様々な質問をいただき、また、普段食べる機会の少ないペルー料理を試食いただく、貴重な機会となった。



（写真）在日ペルー大使館一等書記官からの説明の様子



(写真 左セビーチェ、 右ロモサルタード)

(5) 特に良かった点、苦労した点

1) 良かった点

大阪・関西万博をきっかけに、在日ペルー大使館と大使館のある渋谷区と繋がりを持つことが出来た。

これまで地域(商店会)が取り組んできた多文化共生の取組みをたくさんの国籍の方々にアピールできる機会となった。

大阪・関西万博のペルー・ナショナルデーの公式式典に出席、司会から西淀川区の紹介などがあり、ペルーと日本の政府関係者に知っていただく機会を得た。

2) 苦労した点

大阪・関西万博の公式式典前の動画上映、パレード参加について、言語の違いもあり、情報伝達が難しかった。また、詳細決定が開催の直前となり、調整の難しさも感じた。

アフター万博のイベント開催にて、今後の繋がりを構築するための仕立てをプログラムにどう盛り込むか、議論に時間を要した。

(6) 今後の展開

1) 出来島商店会との繋がり

12月のイベントの翌日、在日ペルー大使館の一等書記官が出来島商店街を訪れ、多文化共生の取組みについて、実際に見ていただき、紹介を行った。

その際、既に多言語対応を行っている「薬局で使用する問診票」(スペイン語)について、在日ペルー大使館に確認いただき、よりネイティブな表現(言葉)とするため修正案を提案いただく。

また、多文化共生のモデル地域となるべく、今後も様々なイベントで地域の方と国際交流を行っていく。

2) 西淀川区役所との繋がり

在日ペルー大使館と引き続き国際交流の取組みを行うため、様々な場面において協

力をお願いする。

また、今後は名古屋にある、ペルー領事館とも交流を深めるため、イベント協力の依頼を行う。

出来島商店会の国際交流の取組みをバックアップし、今後も多文化共生を積極的に進めていく。

(7) 今後の展開における課題

今後、国際交流を継続していくためには、言語や文化の違いによる調整の難しさへの対応が課題である。特に、情報共有や役割分担を早期に明確化する体制づくりが必要である。

また、交流を単発イベントで終わらせず、地域に定着させるための継続的な連携体制の構築が重要である。あわせて、安定的な運営体制や財源確保についても検討を進める必要がある。

3-16 大阪府大阪市（上福島小学校） × ボリビア

（1）背景と目標等

1.1.背景

大阪府・大阪市では、新たな時代を切り拓くため、住民・企業をはじめ、あらゆるステークホルダーとともに、大阪が持つ豊かな歴史・文化や人々の多様な魅力、都市のポテンシャルを生かし、チャレンジし続けることにより、大阪を元気にし、府民・市民が誇りや愛着を感じることで、世界に誇る魅力あふれる都市を作り上げることを目指し、「大阪都市魅力創造戦略 2025」を策定している。本戦略では、「大阪・関西万博のインパクトを生かした都市魅力の創造・発信」「安全・安心で持続可能な魅力ある都市の実現」「多様な主体が連携し、大阪全体を活性化」の3つの基本的な考え方のもと、10の目指すべき都市像を定めた。各施策を推進し、また、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に貢献する視点を持って推進している。本事業は10の施策の一つである「出会いが新しい活を生む多様都市」に含まれる「多文化理解の促進」を図るものである²。

本事業を実施することにより、大阪府・大阪市が進めている上記の戦略をさらに促進させ、大阪府・大阪市が世界に誇る魅力あふれる多文化共生社会を体現する都市とする。

1.2.目標

本事業を実施するにあたり、以下のとおり目標を設定した。

①海外の子どもたちが将来の交流の懸け橋となる可能性を育む

大阪・関西万博を契機に万博参加国・地域の関係者とお互いの国・地域の文化やSDGsに関する取組について交流することにより、お互いの子どもたちが万博の理念についての理解と関心を深める学習活動を行うことにより、将来的に海外の子どもたちが、大阪・関西と交流した経験を通じて、日本の社会・文化に理解や愛着を持つことで、日本と海外の国々の間における経済的なつながりだけでなく、様々な交流の懸け橋となることが期待できる。

②持続可能な社会を担う人材を育成する

大阪・関西の子どもたちには、この国際交流を実施することで、持続可能な社会を担う人材を育成する。

（2）事業内容

2.1.JICA 海外協力隊員によるオンライン講話、および文通

2.1.1 スケジュール

大阪市立上福島小学校では、昨年に引き続きボリビア多民族国（以下「ボリビア」）を対象に、同校5学年児童を対象とした国際理解教育を展開した。ボリビアについて理解を深

2 <https://www.city.osaka.lg.jp/keizaisenryaku/page/0000531412.html>

めるにあたり、導入として、ボリビアおよび国際理解教育に関する講話を実施した。その後、ボリビアで活動する JICA 海外協力隊員とオンラインで交流し、現地の様子を学んだ後、同隊員が活動する小学校の 5 年生と上福島小学校の 5 年生による文通を実施した。

2.1.2.体制

本活動の導入においては、本事業を支援している株式会社かいはつマネジメント・コンサルティング（以下、「KMC」）が担当し、ボリビアに関する講話を実施した。JICA 海外協力隊員によるオンライン交流は、ボリビア・コチャバンバ市で小学校教育隊員として活動する藤田美桜隊員が実施した。文通については、ボリビアは郵便が不通のため国際郵便できないことが明らかになったため、JICA 関西および JICA ボリビア事務所に相談したところ、JICA 定期便にて郵送していただけることとなった。ボリビアからの返信については、休暇で帰国予定であった松山ボランティア調整員にハンドキャリーで日本へ届けていただける運びとなった。松山調整員がボリビアに戻る際、上福島小学校からの再度の返信をボリビアに届けていただけることとなった。

2.1.3.内容

ボリビアに関する講話、JICA 海外協力隊員による講話、ボリビアの小学校との文通については以下のとおりの活動を実施した。

日付	実施内容
2025 年 6 月 17 日 (火) ボリビアに 関する講話	① 児童に対する講話 - スペイン語での挨拶 - ボリビアに関する基礎情報（歴史、文化、国の成り立ち、特産品、観光地） - 国際理解教育に対する心構え ② 教員に対するワークショップ - 日本の開発協力の歩み - 国際協力のステークホルダー - 開発プロジェクトの策定、実施、検証 - 国際協力の意義と価値
	 

<p>2025年 7月9日 (水)</p> <p>JICA 海外 協力隊員に よる講話</p>	<ul style="list-style-type: none"> - 藤田隊員（講師）が活動する町と学校の紹介 - ボリビアに関するクイズ（人口、面積、衣服、食事、お金など） - ボリビアの特徴（行事、気候、標高など） - ボリビアの子どもたちと日本の子どもたちの同じところ、違うところ - ボリビアの小学校での一日の流れ - ボリビアの子どもたちが興味のあるものやこと 
<p>ボリビアの 小学校との 文通</p>	<ol style="list-style-type: none"> ① 上福島小学校からボリビアへ手紙送付（第1回目）＜8月21日手紙到着＞ <ul style="list-style-type: none"> - PCを用いてワードファイルに日本語で手紙を作成。 - 翻訳ソフトを使ってスペイン語に翻訳。 - 印刷した手紙に漢字で自分の名前を直筆し、絵を描く。 - 折り紙で作成したミャクミャクなどを同封し、JICA 関西より JICA ボリビア事務所に送付。 - JICA ボリビア事務所松山調整員より、藤田隊員に手交。 ② ボリビアから上福島小学校への返信送付。＜10月9日手紙到着＞ <ul style="list-style-type: none"> - 上福島小学校からの手紙を読み、一人ずつ行き渡るように手紙の返事を作成。 - ボリビアからは全て手書きであったため、一部読みにくい点については藤田隊員が清書や日本語での補記を対応。 - ボリビアからの手紙を松山調整員が日本にハンドキャリーし、同調整員が上福島小学校へ郵送。 - 子どもたちは翻訳ソフトを介してカメラでスペイン語を撮影し、手紙の内容を読んだ。 ③ 上福島小学校からボリビアへの手紙送付（第2回目）＜11月19日手紙到着＞

	<ul style="list-style-type: none"> - 第2回目の返信は、上福島小学校5年1組から1通、2組から1通でまとめて送付。 - 松山調整員がボリビアへ帰国する際にハンドキャリーし、藤田隊員に手交。 藤田隊員がボリビア交流校の児童と共に手紙を開封。
	

2.1.4.効果

日本からの手紙は、全員同じ用紙に同じフォントで印刷された日本語とスペイン語に色鉛筆で絵を描くなどしてあしらい整ったものであったが、ボリビアからの手紙は、それぞれが違う用紙、違うペンで作成されたものであった。これに対して上福島小学校の児童は、文化の違いを認識し、相手がどのような状況におかれているかに思いを馳せた。ボリビアから届いた手紙の中には、一部判読が困難な文字や、翻訳ソフトでは十分に訳しきれない表現も見られたが、上福島小学校の児童たちは、そうした意味の取りづらい部分も含めて、ボリビアの子どもたちの手紙に込めた思いを楽しみながら積極的に感じ取ろうとしていた。その過程で、ボリビアという国や人々に対する親しみや関心がいっそう深まった。

2.2.ケーナ作りワークショップ

2.2.1.スケジュール

2025年9月30日(火)、1.1.1. アンデス(ボリビアおよび南米諸国)の伝統的な民族楽器であるケーナ作りワークショップを実施した。当日は午前中に5年生、午後6年生がワークショップに参加した。ワークショップに際する事前活動として、給食時間中にケーナ演奏やケーナ制作に関するビデオを視聴した。

2.2.2.体制

日本人のケーナ奏者であるRen氏を講師に迎え、ワークショップを実施した。ワークシ

ヨップでは、予め Ren 氏が用意した穴の開いた竹（ケーナの素材）の吹き口をやすりで削り、児童それぞれが好きな絵を油性マジックで描いた。ワークショップ中は、Ren 氏のマネージャーである高橋氏のサポートを得た。ワークショップに係る材料と資材の調達および加工、運送手配は Ren 氏が担った。ワークショップ開始前には Ren 氏によるミニコンサートが行われたほか、終了後にはケーナの吹き方指導が行われた。

2.2.3.内容

ケーナ作りワークショップの実施内容は以下のとおりである。

日付	実施内容
2025 年 9 月 30 日 (火)	<p>① ミニコンサート</p> <ul style="list-style-type: none"> 「コンドルは飛んでいく」「君をのせて（上福島小学校 5 年生が音楽の授業で練習中の曲）」演奏。
ケーナ作り ワークショ ップ	<p>② ケーナ作りワークショップ</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 組をケーナ作り（図工室）、2 組をケーナ絵付け作業（音楽室）に分かれて実施し、その後交代。 ケーナ作りでは、予め印が付いた部分まで児童がやすりで削り、削り具合を Ren 氏が確認。削り方の説明については、Ren 氏が作成したビデオ教材を視聴。 絵付け作業では、ケーナの胴体部分に油性マジックで児童が思い思いの絵を描いた。 <p>③ ケーナ吹き方講座</p> <ul style="list-style-type: none"> Ren 氏指導のもと、口の当て方、息の吹き方、指の押さえ方などを練習。
	 

2.2.4.効果

プロのケーナ奏者である Ren 氏による演奏を鑑賞し、児童たちは音色と力強い旋律に心を奪われた様子であった。ボリビア国内でもケーナ奏者が減少傾向にある中、日本でこのような本格的な演奏を間近に聴く機会は非常に貴重であり、児童にとってボリビアの音楽文化を体感的に学ぶ貴重な経験となった。

ケーナ制作後は、音楽科の授業にもケーナの練習を取り入れ、児童たちは日々熱心に音を出す練習に励んだ。休み時間を利用して自主的に練習する児童の姿も多く見られ、制作から

2週間後には、音楽の授業で学習しているリコーダーの曲をケーナで演奏できるまでに上達する児童も現れた。

2.3 調理実習

2.3.1 スケジュール

2025年10月15日（水）にボリビア伝統料理および日本風アレンジしたボリビア料理の調理実習を実施した。

2.3.2.体制

日本ボリビア協会より紹介を得て、日本在住歴30年以上であり、自身で料理教室を開催するデイジー長谷川氏を講師に招き、5年生児童を対象に調理実習を実施した。デイジー氏は、レシピおよび必要な調理器具の確認、食材の下ごしらえ、当日の進行を担当し、上福島小学校職員がサポート役を担った。

2.3.3.内容

調理実習の実施内容は以下のとおりである。

日付	実施内容
2025年 10月15日 (水) 調理実習	<p>① クニャペ（チーズパン）</p> <ul style="list-style-type: none"> - 児童がクニャペの材料となるタピオカ粉、チーズ、牛乳、卵、塩などの材料を手でこねて成型し、ノンフライヤーで焼いた。 <p>② キヌア団子</p> <ul style="list-style-type: none"> - 児童が白玉粉をこねた生地にあんこを詰めてキヌアをまぶし、教員が油で揚げた。 - キヌアは生食が厳禁であり、十分な水洗い、茹で、炒りの作業が必要であり時間を要することが想定されたため、児童が調理しつつ、デイジー氏があらかじめ下ごしらえをしたキヌアを使用した。 <p>③ 試食</p> <ul style="list-style-type: none"> - クニャペとキヌア団子はそれぞれ4グループに分かれて調理をした。調理後、それぞれの料理を交換して試食した。 

2.3.4.効果

ボリビアにおいてクニャペは、朝食、昼食、夕食、さらにはおやつの時間にも食されるほ

どポピュラーな食べ物であり、今回の活動を通して児童はボリビアの食文化の一端を実際に体験することができた。キヌア団子は、中華料理であるゴマ団子のゴマの部分でボリビアの代表的な食材であるキヌアに置き換えたアレンジ料理であり、日本の伝統的なおやつとボリビアの食材が融合した新しい味覚との出会いに、児童にとっても興味深い体験となった。

児童からは、「和食と洋食の間のような味だった」「どんな料理なのかと思ったがおいしかった」などの感想が挙がったほか、一部の児童からは、「家でも作ってみた」「他のボリビア料理にも興味をもったので調べてみた」といった声も聞かれた。これらから、単なる試食体験にとどまらず、食を通して異文化への理解と関心を自ら深めようとする意欲が育まれていることがうかがえた。

2.4.ボリビアデー

2.4.1.スケジュール

2025年11月11日(火)は、これまでの大阪・関西万博を契機に始まったボリビアとの交流および学習の集大成として、ボリビアデーを実施した。ボリビアデーでは、本事業の主な対象である5年生による成果発表、Ren氏およびバンドメンバーによるボリビア伝統楽器を用いたコンサート、5年生から4年生へのレガシーの相伝、ボリビア料理(クニャペ)の試食が行われた。バンドメンバーは、Ren氏を含む3名が日本人、ドラム担当の1名がボリビア人という構成であった。

2.4.2.体制

当初、駐日ボリビア大使館よりサラサール臨時代理大使の臨席を賜る計画であったが、ボリビア国内の情勢により、臨時代理大使を含む全大使館員がボリビアへ帰国することとなったため、当日は福島区より中道副区長、森本教育担当係長、クニャペ作りをサポートくださったデイジー氏、そして日本ラテンアメリカ友好協会理事長・墨田区議会議員の井上ノエミ議員の列席を賜った。ボリビアデーには上福島小学校の全学年(1年生から3年生はコンサートのみ)が参加した。試食用のクニャペは、上福島小学校の家庭科室において、上福島小学校保護者ボランティアの協力を得ながら調理した。

2.4.3 内容

ボリビアデーの実施内容は以下のとおりである。

日付	実施内容
2025年 11月11日 (火) ボリビア デー	① 5年生による成果発表 - 本事業の主体となった5年生が大阪・関西万博のボリビアブースを訪問したことを契機に始まった、「オンライン授業」「手紙作成/到着」「JICA 関西訪問」「手紙到着」「ケーナ作り/練習」「調理実習」についてそれぞれの活動・成果・感想が述べられた。 - 最後に、本事業全体を通じて学んだことを発表した後、本事業関係者への感謝の言葉が送られた。 ② Ren氏によるボリビア伝統楽器コンサート

- 本事業でケーナ作りを指導いただいた Ren 氏によるボリビアの伝統楽器を活用したコンサートを行った。
- Ren 氏のケーナの他に、チャランゴ、サンポーニャなどの伝統楽器が演奏され、児童はケーナ以外の新しいボリビアの音楽文化に触れた。
- 上福島小学校の児童は、自分たちで制作したケーナで Ren 氏と共に「コンドルは飛んで行く」をセッションした。
- ③ 5年生から4年生へのレガシーの相伝
 - 本事業で活動主体であった5年生から、今後の活動主体となる4年生に向けて、ボリビアとの交流で得た成果・経験を伝えた。
 - 5年生は、自分たちが現在の6年生から受け継いできたものを4年生にも引き継いでほしいという強い思いで4年生にバトンを渡した。
- ④ 井上ノエミ氏による講演
 - ボリビアで生まれた井上ノエミ氏が、自身の経験も交えて日本とボリビアの関係について講演を行った。
 - 講演内容はボリビアの歴史や文化、さらにはスポーツ選手などの紹介も含まれ、児童は集中して耳を傾けていた。
- ⑤ ボリビア料理の試食
 - 4年生、6年生は教室に戻ってクニャペを試食した。
 - ボリビアで生まれた井上ノエミ氏やデイジー氏、さらにはコンサートを行ってくださった Ren 氏も試食し、ボリビアの味を堪能していた。



2.4.4.効果

ボリビアデイでは、大阪・関西万博を契機に始まった本国際交流プログラム全体を振り返るきっかけになったと同時に、上福島小学校におけるボリビア教育に関するレガシーの構築につながった。上福島小学校が注力する「音楽」をイベントの中心に置いたことで、上福島小学校児童全体の取り組みに昇華させることができ、5年生だけでなく、上福島小学校とボリビアとのつながりを児童に意識させることができた。また、同イベントを通じて、上福島小学校と井上ノエミ氏との関係を構築できたことも成果の一つである。日本におけるボリビア第一人者である井上ノエミ氏とのつながりを活用することで、今回練習したケーナのさらなる発表の場などを作れる可能性があるなど、本事業後のボリビアと上福島小学校との交流を続けるひとつの機会を創出できた。

(3) 事業の目標に対する成果

3.1.成果

本事業を実施するにあたり、学校では、アンケートによる国際理解教育に対する意識調査を事前に実施した。その中に、本事業における学校の願いを的確にとらえた回答が散見された。本校ではこれを「光る言葉」と称し、本事業における目標に対する活かしていきたい考え方として事業を進めた。

ともすれば、教員は、教科書に書かれていることのみを教えていけばいいのかもしれない。しかし、それでは子ども達にとって面白い学習とは言い難いものであり、それは教員にとっても同様である。教育の中で楽しいと感じる場面は、①興味を持って調べている時、②できないことができるようになった時、③わかったことを人に伝えている時、④楽しいことに出会った時、⑤何かに役立った時、が考えられる。これ以外にも考えうる場面はあるだろうが、いかなる学習活動においてもこれらの機会が与えられ、学習を活用できるチャンスに恵まれなければ、面白い学習とは言えないだろう。

昨年度よりボリビアをテーマに取り組んでいる国際交流事業では、子どもの積極的な取り組みとともに、教員自身も多くの学びの機会を得た。大人は新しい出会いやつながりに対して、あえてやらなくてもよいのではないかという考えが多いように思うが、子ども達にとっては大きなチャンスであり、学校だからできる取り組みを大切にしていきたいという思いで本事業を展開した。それは、積極的にかかわろうとする子ども達の姿が、教員の意欲向上にもつながり、新たな取り組みへの原動力ともなるとの考えからである。この点を踏まえ、本事業においては、児童一人一人が主体的に学びに向かう姿勢を身につけ、異文化への理解や尊重の気持ちを深めることができた点が大きな成果である。また、教員にとっても、大阪・関西万博を契機に始まった本事業が、国際理解教育の新たな可能性を実感する貴重な機会となった。

本事業の目標およびそれに対する成果は以下のとおりである。

目標	成果
①海外の子どもたちが将来の交流の懸け橋となる	事前アンケートでは、「あなたは世界の国々と交流することがどうして大切だと思いますか。」の問いに対し、「信頼や協力し合うため」、「分かり合うため」、「考え方が狭くならないように」、

	<p>「他の国のことを考えることが大切」との回答があり、これらを「光る言葉」に設定した。目標①を特に実感できた取り組みとして、上記第2章2.1のボリビア交流校との文通が挙げられる。ボリビアから送られてきた手紙は、日本から送った手紙とは異なり、用紙、筆記用具、字の書き方や文章の構成などが統一されておらず、日本との違いを感じる一方で、その違いはボリビアらしさそのものであるとポジティブに受け止め、ボリビアに住む同じ歳の子どもたちの置かれている環境や文化の違いを慮ることができた。</p> <p>事後アンケートにおいても、ボリビアの学習を活かして他国のことも調べてみたい、困っている人や、立場の違う人の気持ちを考えて行動したい、世界の人々のために、自分にできることを考えたい、などの回答があり、将来にわたって自分がボリビア、延いては海外との繋がりを持つことへの自覚や責任感が芽生えた様子が垣間見えた。</p>  <p>ボリビア交流校に届いた手紙とプレゼントの折り紙</p>
<p>②持続可能な社会を担う人材を育成する</p>	<p>事前アンケート「あなたは大人になったときどんな人になりたいですか。」の問いに対し、「子どもたちを幸せにできる人」、「みんなを支える、頼られる人」、「他の人のことを考えられる人」など、学習を展開していく中で生かしていきたい考えがいくつか散見された。事後アンケートにおいては、上記第2章2.1の活動について「魚をあげるのではなく釣り方を教えてあげられるようになりたい(相手のニーズに合わせた行動をとれるようにしたい)」、「自分の行動がどんな影響を与えるか考えられるようになりたい」との感想があり、小さな行動でも、他者を思いやり、共により良い未来を目指す姿勢が育まれた。</p> <p>また、ボリビアデイにおける5年生の学習成果の発表では、社</p>

会を自分の身の回りだけでなく、ボリビアや世界中と捉え、自分事として考えていこうとする志を持つことができた。



ボリビアデイでの学習成果の発表

(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

本事業は、昨年度から継続して実施している国際理解教育の取り組みであり、今年度は主に5年生を対象として展開された。2年続けてボリビアをテーマに学習を進めたことで、児童、教員の間では継続性のある活動として定着しつつある。特に今年度は、大阪・関西万博開催年であり、実際にボリビアブース、またはその他のパビリオンを訪問できたことは、児童たちが日本にいながら海外の文化や歴史に触れる絶好の機会となり、国際理解教育の促進に大きく寄与するものであった。

現6年生は、今年度の事業における対象ではないものの、本事業の一環として行われた「キーナ作りワークショップ」に参加し、当時の体験を通してボリビアの音楽や文化への関心を深めた。今年度の活動が始まると、6年生の間からは「去年の活動が懐かしい」「またボリビアの話を知りたい」といった声が聞かれ、学びが一過性ではなく、児童の記憶や関心の中に確実に残っていることが確認できた。これは、単発的なイベントに終わらず、継続的な教育効果をもたらしている証左であるといえる。

さらに、本年度実施した「ボリビアデイ」では、4年生へのレガシー相伝の場を設け、4年生が主体となって自分たちの学びを下級生に伝える活動を行った。

こうした姿からは、自らが学んだことを他者に伝え、学校全体の学びとして発展させていこうとする意欲と責任感がうかがえる。単に授業を受ける立場にとどまらず、「上福島小学校のレガシーとして自分たちの学びを残していく」という主体的な姿勢が育っていることは、本事業の大きな成果の一つである。

このように、学年間の連続性と児童の主体的な関わりが生まれていることは、学校における国際理解教育の新たな形を示している。今後も、児童が自らの学びを次の学年へと継承し、学校全体で学びの文化を育てていけるよう、引き続き工夫と支援を重ねていきたい。



ボリビアデイでの5年生から4年生へのレガシー相伝

(5) こども（または参加者）にとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

本事業を通じて、児童はボリビアの子どもたちとの文通やオンライン交流、音楽・食文化体験などを重ねる中で、異文化への理解と親しみを深めた。手紙のやり取りでは、違いを前向きに受け止め、相手の立場に立って考えようとする姿勢が育まれた。事後アンケートでは、他国についてさらに調べたい、困っている人の気持ちを考えて行動したいといった声も見られた。これらの経験は、世界とつながる自分の将来を意識するきっかけとなり、持続可能な社会を担う一員としての自覚と希望を育むものとなった。

(6) 特によかった点・苦勞した点

6.1.良かった点

成果が上がったと思うことは3点ある。1つ目は、昨年度の万博国際交流プログラムの取り組みがしっかりと土台となり、今年の5年生に合った実践ができたことである。それぞれの学年には個性があり、強い部分と力不足な面がある。今年はその強みを生かすことができたことが、子ども達の充実した活動につながったと考えている。2つ目は、感謝の気持ちが育ったこと。人への感謝を感じる機会が少ない中、自分たちのために力を発揮してくれたことが子ども達の目に映っていた。現地時間では夜中の時間帯にオンラインでつながってくれた藤田隊員や、ボリビアから手紙を持って帰ってきてくれた松山ボランティア調整員、下ごしらえのキヌアを持ってきてくれたデイジー氏、自分たちのためにケーナを手作業で用意してくれたRen氏など、本当に多くの人に支えられた事業であり、それに対して感謝の気持ちを、様々な形で表現できたことが児童の成長につながった。3つ目は、多くの人たちと繋がることができたことである。この繋がりは次の繋がりに発展していく足場となってくれるものと期待している。そして何よりも充実して楽しい時間を児童みんなで過ごし、世

界を見る目が育ったことは、将来この児童の中から、世界につながろうとする人が出てくるだろうと期待を持たせてくれる出来事となった。

6.2.苦勞した点

苦勞と感じたことは次の3点である。1つ目は、多くの取り組みを並行して準備しなければならず、多くの時間を要したことである。だがその苦勞があったからこそ、成果として子ども達の成長につながったと感じている。しかも、多種多様な活動を行ったことで、個々のニーズに合った取り組みにつながっていったことが事後アンケートや感想から感じ取ることができた。2つ目は、ボリビアの政治状況に伴い計画の大幅変更が必要となったことである。苦勞が合った反面、このことを通じて、指導者側にとっては多くの学びを得る機会になった。その中で人と人のつながりは、状況が変わってもつながり続けることができることを実感できたことは大きな収穫であった。3点目は、本事業に多くの時間を費やしたことである。特に手紙のやり取りは本当に長い時間を要した。通信網が発達する昨今、オンラインでは簡単にリアルタイムでつながることができる一方、手紙の交流では、かなりの時間がかかったが、それぞれの児童の思いとその手紙を運んでくれた人の思いや責任感が感謝となって形を変え、子どもたちにとっては感謝することの大切さを学ぶ契機となった。自分たちが当然だと思っていたことが世界では当然ではないということもあることに気が付かされたことは、子ども達の今後の人生に生かされることであろう貴重な経験となった。

(7) 今後の展開

これまで児童たちは、万博ボリビアブース訪問を始まりとした取り組みを通して、ボリビアという遠い国に親しみをもち、文化や人々の暮らしに興味を示すようになってきた。本事業に対する願いである、児童たちが「なぜ国際交流が必要なのか」「異なる文化や立場の人とどう関わるべきか」という根本的な問いにまで自ら思考を深めるためには、体験の積み重ねに加えて、学びを内省し、言葉で表現する機会を計画的に設けることが肝要である。

本事業では、「聞く」「つながる」「感謝する」に重点を置き、自分の気持ちや考えを発信することに注力してきた。今後ボリビアに関する学習を実施する際は、体験を自分の考えの構築へと発展させる学習デザインを重視していきたい。表現活動を組み合わせ、児童が自分の感じたことや考えたことを他者に伝え、共有しながら深化させていく流れを確立していきたい。

また、子どもたちの中には、自分の意見を率直に表現できる一方で、相手の感じ方や考え方に配慮する視点が十分に育っていない傾向も見られる。今後の本校における国際理解教育では、「相手の立場に立って考える力」を中心に、互いの違いを尊重しながら共に学び合う姿勢を身につけさせたい。たとえば、ボリビアの子どもたちの生活や遊び、食文化を紹介する教材を用いて日本の暮らしとの違いを比べながら、「もし自分がその国で暮らしていたら」という観点で考える授業を計画するなどである。「相手の立場に立って考える力」を育成することは、万博のテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」に通ずる部分が多い。

さらに、5、6年生での学びを校内全体に広げていくことも重要である。上学年が中心となって実施してきたボリビアを中心とした国際理解学習の取り組みを、4年生以下にも紹介し、学校全体で「世界とつながる上福島小学校」という共通認識を育てていく。具体的には、「国際理解デー」や「ミニ・ボリビア展」などを年に一度開催し、児童自身が主体的に発信する機会を設ける。こうした取り組みが、国際理解教育にとどまらず、自ら考え、表現し、協働する資質・能力を育み、万博のテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」にもつながることを期待したい。

(8) 今後の展開における課題

学校という組織は、しばしば属人的な側面が強く、担当者の異動や人員の入れ替わりによって、これまでの実践やノウハウが十分に引き継がれないという課題を抱えている。特に、継続的な教育活動やプロジェクト型学習を展開する際には、個々の教員の意欲やネットワークに依存しやすく、組織としての持続性が確保されにくい現状がある。

今回実施した万博国際交流プログラムを通じた国際理解学習では、幸いにも本事業の予算があり、さらに JICA 関係者および各講師の協力を得ることができたため、児童が「生の国際理解」に触れる貴重な学びを実現することができた。実際にボリビアの文化や暮らしを映像・講話などを通して学ぶことで、児童は教科書だけでは得られない深い気づきと実感を得ることができた。こうした学習は、国際社会における日本の立ち位置を考えるうえでも極めて有意義であり、今後の教育活動にも大きな示唆を与えるものであった。

一方で、今後同様の活動を継続するにあたっては、いくつかの課題が明らかになった。第一に、上述のとおり、予算の制約があることである。本年度は特別な事業枠により経費を確保できたが、次年度以降は自由に活用できる財源が限られており、外部講師の招へいや現地とのオンライン交流などを恒常的に実施することは難しいと考えられる。根本的な問題として、学校の裁量で使える予算は限られている。第二に、人的体制の課題である。担当教員の異動や配置転換により、これまで築いてきた関係性や経験が途絶えてしまう可能性がある。国際理解教育では、教員自身が最新の知識を学び続ける必要があり、興味・関心を広げる仕組みづくりが求められるが、教員は日々の業務に追われ、教材研究や自己研鑽の時間を十分に確保することが難しいという現状がある。

継続するための方策

上記のような課題を踏まえると、今後は「校内で完結できる形で持続可能な教材体系を構築すること」が重要であると考えられる。具体的には、JICA をはじめとする国際協力機関が提供している教材や映像資料、ワークショップ形式の教材パッケージなどを積極的に活用することで、外部支援に依存せずとも、児童が国際社会を身近に感じられる学習環境を整備していくことが可能である。本事業とは別に、昨年度、今年度と株式会社ファーストリテーリングが実施する「届けよう、服のチカラ」プロジェクト」に参画し、国際理解教育の促進を図ったが、こうした教材を活用することで、教員の異動があっても一定水準の学習を継続でき、学校全体として国際理解教育を根付かせていくことが期待される。本校が注力して

いる音楽や食育など、子どもが興味を持ちやすい題材を切り口とすることで、国際理解を深める取り組みを引き続き行っていく。

今後は、今回の成果と課題を踏まえ、校内研修や教育課程の見直しを通じて、より持続可能な国際理解教育の仕組みづくりを進めていきたい。ポリビアをはじめとする多様な国々の文化や人々の暮らしを学ぶことは、児童が異文化への理解と尊重の心を育む貴重な機会であり、これを一過性の活動で終わらせることなく、学校教育全体に位置づけていくことが重要である。子どもたちの純粋な思いや表現力を大切に、相手を思いやる心を育む活動を継続していく所存である。

3-17 大阪府大阪市（加美北小学校） × パプアニューギニア

（1）背景と目標

1.1.背景

大阪府・大阪市では、「大阪・関西万博のインパクトを生かした都市魅力の創造・発信」「安全・安心で持続可能な魅力ある都市の実現」「多様な主体が連携し、大阪全体を活性化」の3つの基本的な考え方のもと、10の目指すべき都市像を定めた「大阪都市魅力創造戦略2025」を策定した。本事業は10の施策の一つである「出会いが新しい活を生む多様都市」に含まれる「多文化理解の促進」を図るものと位置付けている³。本事業を実施することにより、大阪府・大阪市が推進する「大阪都市魅力創造戦略2025」をさらに促進させ、大阪府・大阪市が世界に誇る魅力あふれる多文化共生社会を体現する都市となることを目指している。

1.2.目標

本事業の計画策定および円滑な実施のため、2024年度に「万博国際交流プログラム」の前身が実施されている。本事業では前身の事業で設定した以下の目標を継続する。

①子供たちが将来の交流の懸け橋となる可能性を育む

大阪・関西万博を契機に万博参加国・地域の関係者とお互いの国・地域の文化やSDGsに関する取組について交流することにより、お互いの子どもたちが万博の理念についての理解と関心を深める学習活動を行うことにより、将来的に子どもたちが、大阪・関西と交流した経験を通じて、日本と海外の国々の間における経済的なつながりだけでなく、様々な交流の懸け橋となることが期待できる。

③ 持続可能な社会を担う人材を育成する

大阪・関西の子どもたちには、この国際交流を実施することで、持続可能な社会を担う人材を育成する。

（2）事業内容

2.1.パプアニューギニア万博ブース訪問（5月15日）

2.1.1.スケジュール

2025年5月15日（木）に、大阪市の加美北小学校がパプアニューギニア国（PNG）の万博ブースを訪問した。加美北小学校は他国の万博ブースへ訪問したあと、コモンズAのPNG万博ブースに集合した。

2.1.2.体制

太平洋島嶼国の専門家として一部事業を委託している（株）かいほつマネジメント・コン

³ <https://www.city.osaka.lg.jp/keizaisenryaku/page/0000531412.html>

サルティング（KMC）が調整役および現場での通訳を担い、万博ブースではドゥサバ元駐日 PNG 大使および PNG 投資促進局などが加美北小学校の児童と交流した。

2.1.3.内容

万博ブース訪問の実施内容は以下のとおりである。

表1 万博ブース訪問

日付	実施内容
2025 年 5 月 15 日 (木) 万博ブース 訪問	<p>加美北小学校の児童が PNG 万博ブースを訪問し、ドゥサバ元駐日 PNG 大使および PNG 投資促進局職員と交流を行った。</p> <p>ドゥサバ元駐日 PNG 大使は、PNG の概要、万博ブースの紹介にとどまらず、児童からの質問（現地の言葉など）に丁寧に回答していた。児童たちはドゥサバ元駐日大使の話聞いた後、PNG 万博ブースを見て回り、PNG の文化・社会を学んだ。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>

出所：加美北小学校作成

2.1.4.効果

加美北小学校の児童は、ソゲリ小学校の児童との交流をオンラインで行ったり、駐日 PNG 大使館のモイへ公使、ワスアクー等書記官、城西国際大学のサイモン教授を学校に招いた講演会に参加したりと、昨年度の万博国際交流プログラムを通じて、PNG に関する知識を獲得し、その興味・関心を高めていた。一方、その知識はオンラインや限られた時間内での講演会で得たものであり、限定的であったことは否めない。今年度は大阪・関西万博が開催されたことにより、PNG の文化・社会に直接触れることができ、PNG に関する理解をさらに深められた。また、ドゥサバ元駐日大使を始めとした多くの PNG 出身者との交流は、PNG を身近に感じる貴重な体験となり、加美北小学校の児童の PNG への興味・関心をより高められた。

2.2.ソゲリ小学校児童の訪日（7月13日～22日）

2.2.1.スケジュール

2025 年 7 月 13 日～22 日に、加美北小学校と交流を続けていたソゲリ小学校の児童が来

日した。加美北小学校の児童との直接的な交流は7月16日（水）「加美北小学校訪問」と7月21日（月）PNG ナショナルデー参加である。本プログラムの目的である「将来的に子どもたちが、大阪・関西と交流した経験を通じて、日本と海外の国々の間における経済的なつながりだけでなく、様々な交流の懸け橋となることが期待できる」を達成するため、加美北小学校との交流を中心に置きつつも、駐日 PNG 大使館訪問、JICA 関係機関訪問、大阪・関西地方の文化体験も取り入れたプログラムとした。

表2 ソゲリ小学校児童の来日スケジュール

日程	行動予定
7月13日（日）	・ポートモレスビー発（09:20）—マニラ経由—成田着（20:30） ・ホテルへ移動
7月14日（月）	・駐日パプアニューギニア大使館訪問（11:00） ・JICA 地球広場訪問（14:00） ・東京から大阪へ移動（17:00 前後）
7月15日（火）	・ならやま小学校訪問（全日）
7月16日（水）	・加美北小学校訪問（07:30-15:00 頃）
7月17日（木）	・立命館宇治訪問（全日）
7月18日（金）	・JICA 関西訪問（10:00）
7月19日（土）	・大阪視察・文化体験
7月20日（日）	・奈良視察（全日）
7月21日（月）	・大阪・関西万博視察：パプアニューギニアナショナルデー参加（全日）
7月22日（火）	・伊丹発（14:35）—成田発（21:20）—ブリスベン経由—ポートモレスビー着（翌日 12:25）

出所：加美北小学校作成

2.2.2.体制

ソゲリ小学校児童の訪日は、さまざまな関係者の協力に依り実現した。本プログラムは、加美北小学校の教職員、ソゲリ小学校に派遣されていた海外協力隊員、KMC が中心となって企画・実施した。航空券手配、バス調整などのロジ関連については近畿日本ツーリストが担当した。ソゲリ小学校の海外協力隊の本プログラムへの参加については、JICA 関西センターおよび JICA PNG 事務所にもサポートいただいた。

2.2.3.内容

ソゲリ小学校児童の来日に係る実施内容は以下のとおりである。なお、本報告書では、加美北小学校の児童との直接的な交流となった7月16日（水）「加美北小学校訪問」と7月21日（月）「PNG ナショナルデー参加」を中心に記載する。

表3 ソゲリ小学校児童の訪日

日付	実施内容
<p>2025年 7月16(水) 加美北小学校訪問</p>	<p>ソゲリ小学校代表の児童6名が加美北小学校を訪問し、主に以下の活動が行われた。</p> <p>①朝会(テレビ)で6名の児童が加美北小学校の全児童に対し自己紹介。</p> <p>②多目的室での民族舞踊の披露、両国の国歌斉唱</p> <p>③ソゲリ小学校と交流を昨年度から続けてきた6年生(当時は5年生)の教室で、日本の遊び(だるま落とし・けん玉・折り紙)の紹介および体験。</p> <p>④日本の学校給食体験</p> <p>⑤プール授業体験</p> <p>ソゲリ小学校の子供たちは、日本の学校給食体験とプールの授業が思い出に残ったと語っていた。また、後日行われたオンライン交流会では「だるま落としが楽しかった」という意見もあり、日本の伝統文化もソゲリ小学校の児童の心に残った。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
<p>2025年 7月21(月) PNG ナショナルデー参加</p>	<p>PNG ナショナルデーに参加した。PNG のマラペ首相およびナショナルデーイベントに参加された多くの PNG と日本人関係者の前で、日本と PNG 国歌を斉唱した。国歌斉唱する際は、駐日 PNG 大使館より無償で提供された PNG 国旗を模した T シャツを加美北小学校、ソゲリ小学校双方の児童が着用し、日本・PNG 国交 50 周年を記念するフラッグ持つことで、日本と PNG に対して敬意を表した。</p> <p>2025年7月21日(月)は祝日にも関わらず、加美北小学校から29名の児童が参加した。参加後は、控室で PNG ナショナルデーの様子を視聴したり、ソゲリ小学校の児童と英語と日本語を交えたコミュニケーションを楽しんだりした。児童同士で自身の SNS 情報の交換もしており、児童同士の継続的なコミュニケーションを促す場ともなった。</p>



出所：大阪市ウェブサイト、KMC 撮影の写真を活用し加美北小学校作成

2.2.4.効果

「ソゲリ小学校児童の来日」は、日本および PNG の児童の絆を強固にした。学校訪問を通じて児童同士による直接的なコミュニケーションが始まり、オンライン交流よりも緊密な関係性を作ることに成功した。PNG ナショナルデーでは、加美北小学校とソゲリ小学校の児童が力を合わせて国歌斉唱を行うという大役を見事にこなし、大役をこなし後は控室で思い思いにコミュニケーションをとっていた。ソゲリ小学校の児童の来日に伴い、加美北小学校とソゲリ小学校は姉妹校締結（次頁）に至るなど、学校同士の関係性も強固となった。

また、児童にとっても「ソゲリ小学校児童の来日」は特に印象に残った。アンケートで「次の万博国際交流プログラムで実施したイベントのうち、特に印象に残っているものは何ですか？一つ選んでください」と質問をしたところ、27名（51.9%）の児童が「日本に来たソゲリ小学校の児童の皆様と一緒にいった授業」、8名（15.4%）の児童が「パプアニューギニアナショナルデーへの参加(国歌斉唱など)」を選択するなど、回答者52名中35名（67.3%）の半数以上の児童が「ソゲリ小学校児童の来日」を特に印象に残ったイベントとして挙げた。

地域住民/社会の PNG への興味・関心の喚起にも貢献した。児童の保護者も PNG ナショナルデーに参加し、児童から聞くだけでなく、自分自身で PNG の文化・社会を直接体験できたことは、保護者にとっても新しい経験となり PNG が身近なものとなった。また、2025年8月19日付の平野区の区長メッセージ⁴においても、加美北小学校と PNG の国際交流に係る記事が公開されるなど、地域住民/社会を巻き込んだ国際交流の取り組みとなった。

⁴ <https://www.city.osaka.lg.jp/hirano/page/0000659913.html>

2.3.加美北バザーでの国際交流（9月14日）

2.3.1.スケジュール

2025年9月14日（日）に加美北小学校にて「加美北まつり」が行われ、その中で加美北小学校としてPNGブースを設置しバザーを催した。

2.3.2.体制

「加美北まつり」への加美北小学校としての出展調整は、主に加美北小学校の職員が行った。前日準備および当日運営は、加美北小学校の教職員と共にKMCも参加した。当日は駐日PNG大使館のモイヘ氏、城西国際大学のサイモン教授、さらに日本へ留学しているPNG出身者もPNGブースの運営に協力くださった。加美北バザーに出店する際の物品のほとんどは駐日PNG大使館からの寄付である。

2.3.3.内容

加美北バザーの実施内容は以下のとおりである。

表3 加美北バザー

日付	実施内容
2025年 9月14日 (日)	バザーでは、PNGのことに興味・関心をもってもらい、「もっと知りたい、行ってみたい」と感じてもらえるように、以下の内容を実施した。
加美北バザー	<p>①PNG コーヒーの販売</p> <p>PNGの特産であるコーヒーをアイスコーヒーにして来場者に販売した。当日の外気温が高かったこともあり、アイスコーヒーは店頭に並べて1時間後には売り切れた。購入者は、「おいしい」「香りが良い」と感想を述べており、販売していたコーヒー豆やコーヒー粉もすべて売り切れた。</p> <p>②PNG 特産品の販売</p> <p>PNG産コーヒーだけでなく、大使館職員から寄付されたPNGのマグカップや、PNGの伝統バッグであるビルム、PNG産チョコレートなども販売した。コーヒーのように味わうことはできなかったが、PNGにとって重要な動物であるワニを模ったマグカップや手縫いのビルム、現地で生産された現地カカオマスを使ったチョコレートなどは来場者の興味・関心を惹き、完売した。</p> <p>③PNG 関連物品の展示および説明</p> <p>地域住民へのPNGに対する興味・関心を喚起するために、PNG関連物品の展示および駐日PNG大使館やKMCによる説明を来場者向けに行った。また、駐日PNG大使館や城西国際大学から参加くださった人と交流することが、新鮮な体験として来場者の皆様から好評頂いた。</p>



出所：加美北小学校作成

2.3.4.効果

バザーでは地域社会と PNG をつなげることに成功した。初めて出会う PNG 出身者に対し、バザーを通じて地域社会の人がコミュニケーションをとり、つながりを深めていた。これは、昨年度から行ってきた万博国際交流プログラムの一つの成果であり、持続可能な交流につながるものである。また、加美北小学校の児童もブースを訪問くださり、加美北バザーに参加した PNG 関係者と交流を深めていた。PNG と地域社会全体がつながるのは、大阪・関西万博のテーマの一つである「いのちをつなぐ (Connecting Lives):自然・文化・人とのつながりを深め、持続可能な社会を築く。」の実現に貢献している。

2.4.PNG 訪問およびオンライン交流会 (11月15日～18日)

2.4.1.スケジュール

2025年11月15日から18日にかけて、加美北小学校の飯尾校長が PNG を訪問した。訪問目的は、姉妹校締結校であるソゲリ小学校への訪問および今後の活動計画作成である。同渡航日程は以下のとおりである。

表4 PNG 訪問スケジュール

日程	行動予定
11月15日(土)	・関空発(15:05)ーマニラ着(18:50)
11月16日(日)	・マニラ発(00:20)ーポートモレスビー着(08:05) ・前日準備
11月17日(月)	・ソゲリ小学校訪問 - ソゲリ小学校校長表敬訪問 - オンライン交流(ソゲリ小学校ー加美北小学校) - 授業視察 - 姉妹校活動に関する協議 ・在 PNG 日本大使館訪問 ・JICA PNG 事務所訪問
11月18日(火)	・ポートモレスビー発(09:30)ーマニラ経由ー関空着(19:35)

出所：加美北小学校作成

2.4.2.体制

ソゲリ小学校訪問に関する調整はソゲリ小学校に配属されている海外協力隊員およびKMCが行い、活動内容については加美北小学校も含めて協議を行った。ロジ手配は近畿日本ツーリスト株式会社が担った。

2.4.3.内容

PNG 訪問およびオンライン交流会の実施内容は以下のとおりである。

表5 PNG 訪問およびオンライン交流会

日付	実施内容
2025 年 11 月 17 日	<p>飯尾校長は、11 月 17 日にソゲリ小学校、在 PNG 日本国大使館、JICA PNG 事務所の 3 つの機関を訪問した。</p> <p>①ソゲリ小学校 ソゲリ小学校では学校関係者に表敬挨拶（到着時間と現地の朝礼の時間が重なり、朝礼で全校生徒にも挨拶）を行った後、オンライン交流会（後述）を実施した。オンライン交流会後は、授業視察を行った。授業視察では、教材（ハード）がほとんどない PNG の教育環境に驚きつつも、同時に以前の日本での教育環境に類似していることも確認できた。ハードの充実と共に、教員同士の交流を深めること、ハードが不足していた時代の日本での指導方法も生かせることが分かった。また、今後の活動計画についても、ソゲリ小学校の校長と協議を行い、次のオンライン交流会を 2026 年 2 月に実施する方針とした。</p> <p>②在 PNG 日本国大使館 在 PNG 日本国大使館では、玉光臨時大使と村上様と面談した。本事業のこれまでの経緯と完了報告を行った。後日、御礼メールを村上様方にお送りした際には、「先日は、加美北小学校の飯尾校長先生にご来館いただき、意見交換の機会を持てたことを大変嬉しく思っております。PNG ご訪問が有意義なものとなったと伺い、こちらとしても励みになります。また、加美北小学校とソゲリ小学校との交流を継続されるご意向を伺い、両校の取り組みが今後さらに発展していくことを心より期待しております。当地での調整等につきましては、当館でも可能な範囲で引き続きサポートしてまいりますので、何かございましたら遠慮なくご相談ください。」と今後も継続的にご支援くださるメッセージもいただいた。</p> <p>③JICA PNG 事務所 JICA PNG 事務所では、これまでの万博国際交流プログラム実施に係る協力の御礼と事業報告を行った。海外協力隊員と作成した壁画について JICA PNG 事務所に相談をしたところ、教育センターへの寄贈も考えられるとのアドバイスを受けた。後日、JICA PNG 事務所とオンラインで会議を行った際は、教育セ</p>

	<p>ンターへの寄贈は、万博国際交流プログラムに関わっていないところへの寄贈となり調整が難しいため、ソゲリ小学校での寄贈が良いとのアドバイスを受けた。また、海外協力隊員の事業に支障のない範囲での引き続きのご支援をお願いし快諾くださった。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
<p>同日 オン ライ ン交 流会</p>	<p>オンライン交流会は以下のとおり行われた。</p> <p>①歌交換（加美北小学校：校歌、ソゲリ小学校：国歌、州歌） 加美北小学校側は全員（朝礼時に実施）、ソゲリ小学校側は小学3年生が参加した。日本の学校には校歌を持つところがほとんどであるが、PNGでは校歌を持つ学校がないため、加美北小学校は校歌を、ソゲリ小学校は国歌と州歌をお互いに歌った。</p> <p>②質問交流 質問交流は加美北小学校側が小学4年生、ソゲリ小学校側は小学3年生が参加した。これまでの交流では加美北小学校側は小学6年生が中心であったが、学校全体の取り組みとして持続性を高める狙いがあり、新しい学年を主体とした交流を開始した。当日の質問内容は以下のとおり（※事前共有された質問。ソゲリ小学校からの質問は英語で提出されたため、KMCが便宜的に翻訳）。</p> <p>【ソゲリ小学校から加美北小学校への質問（括弧内は原文）】</p> <p>Q1:有名なスポーツは何ですか（What is the famous /popular played in Japan?） Q2:日本で一番高い山は何ですか（What is the name of the tallest mountain in Japan?） Q3:今日のどんな天気ですか（What is the weather like today?） Q4:日本には季節がいくつありますか（How many climatical seasons in your country?） Q5:お祭りがありますか（一番有名なお祭りは何ですか? /Do you celebrate festival? What is the main festival celebrated?） Q6:日本の主食は何ですか（What is your staple food?） Q7:日本では何種類の言葉が話されていますか（How many languages are</p>

spoken in your country?)

Q8:加美北小学校はどこにありますか？(What city in Japan is your school located?)

Q9:好きな食べ物は何ですか(What is your favorite food?)

Q10:何歳ですか(How old are you?)

【加美北小学校からソゲリ小学校への質問】

Q1: PNG でおすすめの食べ物は何ですか。

Q2: 流行っている遊びは何ですか。

Q3:加美北小学校のお昼ご飯は給食ですが、ソゲリ小学校のお昼ご飯は何ですか。

Q4: 将来、どんな仕事につきたいですか。

Q5: PNG ではどんな服を着て学校に行きますか。

Q6: 好きな教科は何ですか。

Q7: 休みの日はどのように過ごしていますか。

Q8: 学校の一日の流れはどのような流れですか。

Q9: PNG の良いところは何ですか。

Q10:どんな勉強をしていますか。

お互いの質問に適切に回答し相手の国のことを理解することができた。また、海外協力隊の金本氏や現地にいた飯尾校長が回答の補足説明を適宜行うことで、回答の中身をより深く知ることができた。



③Reunion

7月に加美北小学校へ来校したソゲリ小学校の児童と、同プログラムに主に対応しナショナルデーにも参加した加美北小学校の6年生がオンライン越しに再会した。訪日時の思い出、加美北小学校の授業で一番楽しかったもの、日本のおいしかった食べ物などをソゲリ小学校の児童から話をしてもらい、再度交流を図った。ソゲリ小学校の児童は日本語でも挨拶をしてくれ、来日されたときに思い出を生き生きと語っていた。



出所：加美北小学校作成

2.4.4.効果

ソゲリ小学校を加美北小学校の飯尾校長が訪問したことで、トップ同士の関係を構築できた。また、オンライン交流会を通じて新しい学年同士のつながりも構築できた。特にソゲリ小学校内に「飯尾校長」がいたという事実が児童にとって同校に親近感をもたせ、「PNGに自分たちと仲のいい学校がある」ということを、低学年の児童も実感することができていた。学校長同士のつながりを構築できたこと、新たな学年との交流ができたことは、万博国際交流プログラムを契機に始まった当該学校交流を続けていくうえで、非常に重要なPNG訪問時の成果となった。

加美北小学校とソゲリ小学校の交流を続けていくうえで、在 PNG 日本国大使館と JICA PNG 事務所との関係を強化できたことも大きな成果である。第一義的には海外協力隊員に依存することなく当該交流を続けていくことを目指すべきである一方、今後もソゲリ小学校に協力隊員が派遣される場合、加美北小学校と協力隊員の双方にとって価値のある交流事業を検討していくことで、より質の高い交流に昇華できる。

2.5.壁画制作事業（全期間）

2.5.1.スケジュール

2025年5月より加美北小学校とソゲリ小学校の双方で絵を描く「壁画制作事業」を進めてきた。

最初はソゲリ小学校側から描き始め、2025年7月のソゲリ小学校児童訪日の際にソゲリ小学校側から加美北小学校へ手渡された。2025年12月に残り半分の絵を描いた加美北小学校からソゲリ小学校へEMSで送られた。

2.5.2.体制

加美北小学校側は全学年、ソゲリ小学校側は元海外協力隊員の内山様の担当学年であった5年生が作成した。

2.5.3.内容

壁画の内容は以下のとおりである。

表6 壁画制作事業

日付	実施内容
2025年5月～12月	<p>壁画は、以下のコンセプトで制作した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 両サイドに「島」を書いて、その間に「橋」をかけて太陽が照らしている。 ● 島には人がいて、「今」「将来」つながりを示す。 ● お互いの国がわかるように、交流事業で扱ったものや、お互いの国に関係しているものが絵の中に含まれる。 ● 万博らしさも追加する。 <p>壁画の保管場所は、万博国際交流プログラムに関わった多くの人の目に触れることを第一に検討した結果、加美北小学校は同校の体育館、ソゲリ小学校は同校の校長室とすることとした。</p> 

出所：加美北小学校作成

2.5.4.効果

加美北小学校とソゲリ小学校の双方の児童が、万博国際交流プログラムを通じて一つの制作物を作ることで、万博のレガシーを形あるものとして残せた。また、同制作物を両校児童が気軽に鑑賞できる場所に飾ることで、お互いが姉妹校であることを常に意識することができ、今後の姉妹校活動の継続に寄与する。

2.6.その他

加美北小学校からは年賀状を、ソゲリ小学校からはクリスマスカードを、お互いに贈りあうことが決定し、2025年12月に両校が制作し双方に送った。

(3) 事業の目標に対する成果

3.1.事業目標に対する成果

本事業の目標およびそれに対する成果は以下のとおりである。

表7 事業目標に対する成果

目標	成果
<p>①子供たちが両国にとっての将来の交流の懸け橋となる</p>	<p>各活動を通して、両校の児童はお互いの国に対しての理解を深めると同時に、特にソゲリ小学校の訪日プログラムに関わった児童は相手国児童との対面でのコミュニケーションを通して親近感を高めることができた。万博国際交流プログラムを通じた海外の人との初めての対面コミュニケーションは、両国の児童にとって他では得難い体験となった。11月17日に実施したオンライン交流会においても、PNGに行ってみたいと答えた加美北小学校の児童、日本に行ってみたいと答えたソゲリ小学校の児童は多く、彼らが両国にとっての将来の交流の懸け橋になる可能性を見出せた。大阪・関西万博におけるナショナルデーの参加も、児童にとっては貴重な経験となった。PNG関係閣僚が揃う中で国歌を斉唱したことは、その国の代表を意味するものであり、それらを担った児童たちはすでに交流の懸け橋の一部でもあった。</p> <div data-bbox="411 1095 1206 1599" data-label="Image"> </div> <p>アンケート結果からも事業目標に対する成果が表れている。たとえば、「万博国際交流プログラムは、パプアニューギニアを知るために役に立ちましたか?」という質問に対して、「とても役に立った」と回答した児童が35名(37.6%)、「まあまあ役に立った」が42名(45.2%)となり、回答者93名中77名(82.8%)の多数の児童がPNGに対する知見を得ることができた。</p>

	<p>そのうえで、「万博国際交流プログラムを通して、あなたの生活の中で、パプアニューギニアのことを考えるようになりましたか？自分に当てはまるものを一つ選んでください。」という質問に対して、「考えることが多くなった」と回答した児童が 13 名（14%）、「たまに考えるようになった」が 49 名（52.7%）となり、回答者 93 名中 62 名（66.7%）の半数以上の児童が PNG に対する興味・関心を高めた。</p> <p>「パプアニューギニアとの交流を今後も続けていきたいですか？自分に当てはまるものを一つ選んでください」という質問に対しては、「とても思う」と回答した児童が 51 名（54.8%）、「まあまあ思う」が 35 名（37.6%）となり、回答者 93 名中 86 名（92.4%）の大多数の児童が継続的な交流を望んでいることが分かった。</p> <p>これらの知見の獲得および興味・関心の高まりは、児童の海外を意識した発言の増加（外交官になりたい、英語をもっと話せるようになりたいなど）にも表れており、将来の両国にとっての交流の懸け橋となる人材が輩出されることが期待される。</p> <p>教職員へのアンケート結果では、「万博国際交流プログラムは、パプアニューギニアを知るために役に立ちましたか？自分に当てはまるものを一つ選んでください。」という問いに対して、回答者 6 名全員が「とても役に立った」もしくは「まあまあ役に立った」と回答している。また、「万博国際交流プログラムを通して、皆様の生活の中で、パプアニューギニアのことを考えるようになりましたか？自分に当てはまるものを一つ選んでください。」という問いに対しても、回答者 6 名全員が「考えることが多くなった」「たまに考えるようになった」と回答しており、サンプル数は少ないが教職員の意識改革にもつながった。教職員の意識改革は、児童に対する影響も大きいいため、事業目標達成に資するものである。</p>
<p>②持続可能な社会を担う人材を育成する</p>	<p>持続可能な社会を担う人材となるためには、自国だけでなく他国の社会文化を受容することが肝要である。万博国際交流プログラムを通じて得た両校の児童の異文化交流経験は、他国の社会文化の受容性を高めることにつながる。また、人材の育成には地域社会の協力も必須となるため、本事業で平野区など加美北小学校がある地域を巻き込めたことも大きな成果である。平野区に住む住民が PNG を身近に感じることで、加美北小学校の児童はもちろん、区内にある他の小学校・中学校の子供たちも PNG について興味・関心を持つことにつながる。これは持続可能な人材の裾野を広げることにつながり、上述の「将来の交流の懸け橋」を増やすことでもある。</p>



児童に対して「博国際交流プログラムを通して学んだことを、あなたはどのように自分の生活に活かしていきたいと考えていますか？」とアンケートを通して質問をしたところ、「パプアニューギニアに行ってみたい」（46名）「外国の文化や生活の違いを知りたい」（42名）「外国の言葉を学びたい」（37名）が上位3つの回答となった。

「他国の社会文化の受容性を高めること」が持続可能な社会を担う人材を育てるうえで必要なことであり、PNGへの訪問、外国の分野や生活を知り楽しむこと、そして外国語の習得は、他国文化への受容性を高めることにつながる。

出所：大阪市ウェブサイトの写真を引用、アンケート結果を参考に加美北小学校作成

（４）大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価))

4.1.提携校/姉妹校提携の締結

昨年度の事業報告書にて、「本事業で得た関係性を基に、姉妹都市提携を将来的な目標に見据えつつ、まずは提携校/姉妹校を検討していく」とし、今年度の事業で加美北小学校とソゲリ小学校は同目標を達成し提携校/姉妹校となった。

提携校/姉妹校となったことでレガシー創造への礎を築くことができた。一方、レガシーの礎を築いた後、それを形骸化させないように継続的な交流活動が必要となる。レガシーが風化しないように、上述のとおり加美北小学校の飯尾校長は PNG を訪問し、2026年2月のオンライン交流会を含め活動を継続的にする施策をソゲリ小学校の校長と検討した。

大阪・関西万博および本事業を契機に創造したレガシーとして、加美北小学校とソゲリ小学校の提携校/姉妹校活動が継続的に実施され、類似のプログラムを通じてソゲリ小学校の児童/教職員の日本訪問、加美北小学校の児童/教職員の PNG 訪問が実現させ、レガシーの質を高めていく。そのうえで、将来的な姉妹都市提携も改めて検討する。

4.2.児童と教職員の異文化に対する意識の高まり

本事業を通して、児童と教職員の異文化に対する意識が高まった。教職員のアンケートでは、「子どもたちが異文化に触れ、世界の中の日本を考えるきっかけになった。また、国際的な仕事に対しても興味を持つようになった。」、「万博をきっかけに、今の6年生の子ど

もたちは PNG のことや万博のこと、未来のことを考えていくことができた。10 年後、20 年後になったときに、今の経験や体験を嬉しく話す、誇らしげに話すことのできる子どもがたくさんいると思う。万博国際交流プログラムがあったからこそ、将来誰かと万博の話になったとき、「そういえば私・・・」PNG のことや万博のことを話せるのではないかと思った。」と回答されており、大阪・関西万博を契機としたレガシーは、上述の姉妹校締結だけでなく児童の中にも無形のものとして形成された。これは、上述した「パプアニューギニアとの交流を今度も続けていきたいですか？ 自分に当てはまるものを一つ選んでください」という問いに対して、回答者 93 名中 86 名 (92.4%) の大多数の児童が交流を続けることに積極的であったことから判断できる。

教職員は「日本の学校教育を国際的な視点で考えるきっかけになった。また、PNG について深く知ることができた。」「国際理解、目指す将来像、他者理解の気持ち、万博への愛着、自分たちの学年への愛着・仲間意識。などなど、たくさんのことを得られました。」「普段接する機会のない外国の子どもと接することで、初めて知ることがあり、日本での当たり前が当たり前ではないことにも気づくことができたし、視野を広げるきっかけになったと思います。」「パプアニューギニアの文化や子どもの様子を知ることができた。」とアンケートで述べており、万博国際交流プログラムへ参加したことで異文化に対する知見の獲得および意識の高まりという無形のレガシーを得られた。

(5) こども（または参加者）にとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

本事業を通じて、児童はパプアニューギニアの子どもたちと直接交流し、ともに国歌を斉唱し、学び合う経験を重ねた。オンラインだけでなく対面での交流や姉妹校締結により、「世界に友だちがいる」という実感を得ることができた。アンケートでは交流を今後も続けたいと答えた児童が多数を占め、パプアニューギニアに行ってみたい、英語をもっと学びたい、将来は外交官になりたいといった発言も見られた。これらの体験は、異文化を受け入れ、世界とつながる未来を前向きに思い描く力を育むものとなった。本事業は、子どもたちにとって将来の交流の懸け橋となる可能性と、持続可能な社会を担う人材としての自覚を芽生えさせる貴重な機会となった。

(6) 特に良かった点、苦労した点

6.1. よかった点

万博国際交流プログラムを活用して特によかった点は、以下のとおりである。

- ・ 子どもたちの PNG への興味・関心の喚起
- ・ PNG への興味・関心の高まりに伴う、海外を意識した発言の増加
外交官になりたい、英語をもっと話せるようになりたいなど
- ・ Zoom 等を使用した「顔」が見える交流の実施
- ・ 子どもたちにとっての大阪・関西万博の価値の高まり、ひいては万博自体の価値の

高まり。

- ・ 子供たちの受容的に物事を捉えようとする感性の高まり。
- ・ 校長が渡航し、ソゲリ小学校にいたことにより親近感の芽生え

本事業の目的である「①子供たちが将来の交流の懸け橋となる可能性を育む」と「②持続可能な社会を担う人材を育成する」を達成できた。①に関しては、Zoomでの顔が見える交流や飯尾校長の渡航による親近感の芽生えなどにより、子供たちから外交官などお互いの国をつなぐ役割になりたいという思いを引き出せたことがあげられる。②に関しては、万博国際交流プログラムのさまざまなイベントを通じて、加美北小学校の子供たちが PNG の子供たちと交流することで、子供たちの受容的に物事をとらえようとする感性の高まりなど、持続可能な社会を担う人材に必要な素養の高まりがあげられる。

6.2.苦勞した点

万博国際交流プログラムを活用して苦勞した点は以下のとおりである。

- ・ 通信環境の違い。
- ・ 学習規律の違い。
- ・ 時間や期間に関する捉え方の違い。
- ・ 持続的に行える内容の検討。
- ・ KMC や JICA の海外協力隊員を仲介しない現地職員との交流。

PNG との交流は「環境」に違いに苦勞した。PNG は日本と異なり通信状況が悪く、オンライン交流をスムーズに実施することが困難であった。また、日本とは学習規律が異なることで、オンライン交流会などの進行が難しかったことも挙げられる。日本とは時間間隔が異なるため、万博国際交流プログラム実施後の活動計画作成に時間を要すこともあった。

今後の活動については予算の関係上、万博国際交流プログラムと同種の活動は難しい。手紙交換やオンライン交流会などを進めつつ、同時に KMC や JICA の海外協力隊員無しでも続けられるように持続的に行える内容を検討していく必要がある。

(7) 今後の展開

7.1.今後の展開

万博国際交流プログラムを通じて締結した姉妹校連携を基に、加美北小学校とソゲリ小学校で交流活動を進めていく。本プログラムの最後に実施した「手紙交換」は、2026年1月に加美北小学校とソゲリ小学校の双方に届く予定である。また、加美北小学校の飯尾校長がソゲリ小学校を訪問し、次回のオンライン交流会を2026年2月に実施することを決定した。以降の活動についても、加美北小学校とソゲリ小学校の教職員同士が密に連絡を取り合い企画・実施していく。

アンケート結果によると、児童および教職員からは以下の交流事業の実施を将来的に実施したいという期待が寄せられた。

(8) 今後の展開における課題

8.1.課題

今後の展開の課題は、姉妹校活動を継続的に進めていくことにある。両校ともに同種の国際交流プログラムを実施するための予算は限られており、万博国際交流プログラムで実行した「ソゲリ小学校児童の来日」や「壁画作成」を続けることは難しい。かかる状況において、予算を安定的に獲得することが課題としてあげられるが、予算の獲得が現実的ではない場合、来年度からの事業は今年度事業からは縮小せざるを得ない。

次項の「継続するための方策」でも言及するが、予算および教職員の業務負荷を鑑み、加美北小学校とソゲリ小学校が昨年度から続けてきた「オンライン交流」（含むアンケート記載の「児童および教職員からの交流事業アイデア」）と「手紙交流」継続させ、両校の姉妹校活動として学校文化に育てることが望ましい。他の事業に関しては、予算を獲得/割り当てられた時に実行する。

ソゲリ小学校とのコミュニケーションは JICA PNG 事務所の海外協力隊員の協力に依った部分が多い。今後数年、数十年の単位で姉妹校活動を進めていく場合、海外協力隊員ありきで事業を検討するのは継続性に関するリスクが多い。海外協力隊員と加美北小学校、そしてソゲリ小学校にとって価値のある活動となる可能性が高いため協働を続けていくことは望ましいが、海外協力隊員との協働が困難となった際の対応策（例：学校側との直接的なコミュニケーションラインの確保、海外協力隊員以外の協力者の確保など）は事前に検討する必要がある。

継続するための方策

本事業で構築した加美北小学校とソゲリ小学校の関係性を継続・発展させるためには、定期的な交流事業の実施が重要である。

PNG 訪問の際に加美北小学校の飯尾校長は 2026 年 2 月のオンライン交流会の実施をソゲリ小学校側と約束してきた。また、ソゲリ小学校側からはクリスマスカードが、加美北小学校からは児童からの手紙が 2025 年 12 月中に双方に送られ、2026 年 1 月に届く予定である。これらの「オンライン交流」と「手紙交換」は、前年度も実施をしてきたこともあり、ノウハウが蓄積されてきた。そのため、双方の学校の業務負荷も考えると、まずはこれらの施策を継続的かつ定期的に続けることが継続するための方策として挙げられる。学校としてのノウハウをさらに蓄積し学校文化として成熟させることで、国際交流事業に熱意を持つ教職員が学校現場からいなくなったとしても、姉妹校活動は継続する。

一方、姉妹校活動を「発展」させるためには、学生交流や教職員交流などの対面コミュニケーションの場を増やす必要がある。万博国際交流プログラムに類似する予算が割り当てられる事業がない限り、対面での交流の実現は難しいが、文部科学省や他関連団体が提供するプログラムなどの確認を適宜行い、適切な予算の確保に努めることも持続性の確保のため

めに必要である。添 1

MOU (連携協定)

ATTACHED DOCUMENT

I. Outline and Purpose of the MOU:

1. Kamikita Elementary School and Sogeri Primary School have been participating in the International Exchange Program of Expo 2025 Osaka, Kansai, Japan (hereinafter referred to as “the Program”) since 2024.
2. The program is invaluable in providing an educational perspective for both students and teachers, as well as contributing to the cultural development of Osaka City in Japan and the Central Province in Papua New Guinea.
3. All relevant parties wish to continue the international exchanges between Kamikita Elementary School and Sogeri Primary School after the completion of the Program.
4. Therefore, Kamikita Elementary School and Sogeri Primary School have decided to formalize their sister school arrangement.

II. Sister School Activities:

To keep and reinforce the relationship between Kamikita Elementary School, they will carry out the following activities.

1. Online exchange program (e.g. Sports, Japanese card game, cultural show & tell)
2. Exchange of letters/cards (e.g. Christmas Card, New Year’s Greeting Cards)
3. Others (e.g. Students exchange program)

Details of the activities at the sister school will be organized through discussions between teachers from both schools.

III. Term:

1. This MOU will commence on July 21st 2025 and will continue for 5 years, unless terminated earlier.
2. The term may be extended by mutual agreement in writing of the parties.
3. The MOU may be terminated by either party on written notice to the other party.

IV. Mutual Consultations:

Any major issues arising from the Sister School Activities shall be resolved through mutual consultation between Kamikita Elementary School and Sogeri Primary School.

V. Other Relevant Issues:

Any conditions not specified herein shall be settled by mutual agreement between Kamikita Elementary School and Sogeri Primary School.

(end)

3-18 大阪府堺市 × ヨルダン

(1) 背景と目標等

1-1. 背景と目的

本市では、現在の人口減少、高齢化社会において、国際化を推進し、多様な文化的背景を持った人々を受け入れ、共生していくことが重要と考えており、大阪・関西万博を契機とし、ヨルダン・ハシェミット王国との結びつきを強化し、今後の交流深化に繋げる。

1-2. 目標

本プログラムでの交流を通じて、万博を契機とした本市の取組の方向性である「誘客による市内消費の活性化」、「地域産業の活性化」、「こどもたちの国際感覚の醸成、未来に向けた行動」等の実現をめざす。

(2) 事業内容

2-1. 堺×ヨルダン「MIRAI こいのぼり」プロジェクト

① スケジュール

令和6年12月～令和7年4月オンライン会議等でイベントの実施時期や内容等についてパビリオンと調整

令和7年4月10日	報道提供や SNS 等による情報発信
4月24日	ヨルダンパビリオンにて鯉幟ワークショップの実施
5月8日～18日	ワークショップで制作した鯉幟をヨルダンパビリオン正面入口に掲揚

② 体制

- ヨルダン：ヨルダンパビリオン政府代表代行 シファ・ズグール氏、パビリオン運営委託事業者
- 堺市：広域連携課、国際課、観光推進課
- 関係団体：堺五月鯉幟「高儀」 高田氏

③ 内容

日時	①ワークショップ 令和7年4月24日(木) 【第一部】午前10時～正午 【第二部】午後2時～午後4時	②鯉幟の掲揚 令和7年5月8日(木)～ 5月18日(日)
場所	大阪・関西万博 ヨルダンパビリオン (大阪市此花区夢洲)	
取組内容	ワークショップでは、堺の伝統産業である全長5m超の堺五月	

	鯉幟に、参加者が平和への願いや未来に向けた想いを込めたメッセージを書き入れ、オリジナル鯉幟を制作。 制作した鯉幟は5月8日（木）から5月18日（日）までヨルダンパビリオン正面入口に掲揚。
参加者	ヨルダンパビリオン来館者約 100 人がワークショップに参加
報道対応	7 件（読売新聞、毎日新聞、朝日新聞、産経新聞、日刊工業新聞）



ワークショップの様子



制作したオリジナル鯉幟



鯉幟が掲げられたヨルダンパビリオン

④効果

自治体内への波及効果	伝統産業の魅力を国内外に発信する取組を通じ、堺の認知度・関心度が向上したことで、今後の地域産業活性化に繋がる効果が期待される。
実施により達成できた成果	ワークショップ参加者（約 100 名）やヨルダンパビリオン関係者に、堺五月鯉幟という伝統産業の魅力を間近で体感いただくことができた。また、ワークショップで作成したオリジナル鯉幟をヨルダンパビリオンに約 10 日間掲げたことで、会場を訪れる国内外からの多くの来場者に堺五月鯉幟の魅力を発信することができた。
相手国への波及効果	堺の伝統産業を体感いただく取組を通じ、ヨルダンと日本、相互の文化理解が深まり、交流の深化に繋がった。

2-2. 堺市内イベント「大仙大茶会」へのヨルダンパビリオン関係者招待

① スケジュール

令和 7 年 5 月上旬 大仙大茶会への招待及び当日の流れ等についてパビリオンと調整

5 月 25 日 大仙大茶会の実施、パビリオン関係者の招待

②体制

○ヨルダン：ヨルダンパビリオン政府代表代行 シファ・ズグール氏、パビリオン運営委託事業者

○堺市：広域連携課、国際課、観光推進課

○関係団体：大仙大茶会の運営スタッフ

③内容

日時	令和7年5月25日(日) 午前9時30分～午前10時30分
場所	大仙公園(堺市堺区東上野芝町1丁4-3)
取組内容	大仙大茶会へヨルダンパビリオン関係者を招待し、呈茶でおもてなし。
参加者	ヨルダンパビリオン政府代表代行 シファ・ズグール氏、パビリオン運営委託事業者 山田氏
報道対応	—



茶会の様子①



茶会の様子②

④効果

自治体内への波及効果	茶の湯文化の魅力を発信する取組を通じ、堺の認知度・関心度が向上したことで、今後の市内誘客に繋がる効果が期待できる。
実施により達成できた成果	パビリオン関係者に堺へお越しいただくことで、堺は茶の湯が息づく都市であり、多くの歴史遺産や観光資源を有するポテンシャルの高い場所でもあると発信することができた。
相手国への波及効果	堺の伝統文化を体感いただく取組を通じ、相互の文化理解が深まり、交流の深化に繋がった。また、相手国内での観光プロモーション効果も期待できる。

2-3. 堺市主催催事へのヨルダンパビリオン関係者招待及びコラボレーションステージ

① スケジュール

令和7年6月～7月 ステージイベントの内容等についてパビリオンと調整

7月28日 堺市主催催事でのコラボレーションステージの実施

②体制

○ヨルダン：ヨルダンパビリオン政府代表代行 シファ・ズグール氏、アーティスト

ト ヤスミン氏、パビリオン運営委託事業者

○堺市 : 広域連携課

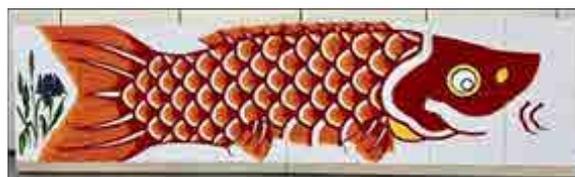
○関係団体：堺五月鯉幟「高儀」 高田氏、堺市主催催事の運営委託事業者

③内容

日時	令和7年7月28日(月) 正午～午後0時30分
場所	大阪・関西万博 大阪ヘルスケアパビリオン リボーンステージ (大阪市此花区夢洲)
取組内容	堺市主催催事「Craftsmanship Journey 万博の楽市楽座、堺と出会う一期一会」において、「堺×ヨルダン 万博がつなぐ一期一会」と題し、ヨルダンパビリオン政府代表代行のシファ氏によるステージトークや、ヨルダンパビリオンのアーティスト ヤスミン氏と堺五月鯉幟「高儀」の高田氏による共創パフォーマンスといったコラボレーションステージを実施。
参加者	50名程度がステージイベントを観覧
報道対応	—



ステージイベントの様子



完成したアートファニチャー

④効果

自治体内への波及効果	伝統産業の魅力を国内外に発信する取組を通じ、堺の認知度・関心度が向上したことで、今後の地域産業活性化に繋がる効果が期待できる。
実施により達成できた成果	万博会場東ゲートに近接する大阪ヘルスケアパビリオン・リボーンステージで取組を実施したことで、会場を訪れる国内外からの多くの来場者に堺五月鯉幟の魅力を発信することができた。また、ヨルダンパビリオンのアーティストとのコラボレーションにより、これまでにない堺五月鯉幟の共創アート作品を完成させることができた。
相手国への波及効果	堺の伝統産業を体感いただく取組を通じ、相互の文化理解が深まり、交流の深化に繋がった。

2-4. 市内小学校における特別授業

① スケジュール

令和6年12月～令和7年7月・・・オンライン会議等でイベントの実施時期や内容等についてパビリオンと調整

令和7年7月11日・・・・・・・・・・報道提供による情報発信

7月15日・・・・・・・・・・市内小学校で特別授業を実施

②体制

○ヨルダン : ヨルダンパビリオン政府代表代行 シファ・ズグール氏、パビリオン運営委託事業者

○堺市 : 広域連携課、教育課程課、国際課

○関係団体 : 堺市立登美丘西小学校

③内容

日時	令和7年7月15日(火) 9時35分～11時20分
場所	堺市立登美丘西小学校(堺市東区大美野135)
取組内容	ヨルダンパビリオン政府代表代行シファ・ズグール氏が講師となり、ヨルダンの自然や気候、食べ物や宗教、人気のスポーツや人々の暮らしの様子などについての特別授業を実施。
参加者	6年生(118人)が特別授業に参加
報道対応	—



特別授業の様子①



特別授業の様子②

④効果

自治体内への波及効果	パビリオン関係者とのコミュニケーション機会創出により、こどもたちの国際感覚を養うことができ、今後の未来に向けた行動に繋がる効果が期待できる。
実施により達成できた成果	実施後のこどもたちへのアンケートから、「もっとヨルダンについて知りたい」「ヨルダン/ヨルダンパビリオンに行ってみたい」「ヨルダン以外の国や自国の文化についてもこれから調べてみたい」といった声が多く見られ、国際感覚の醸成

	や異文化理解に繋がった。
相手国への波及効果	堺のこどもたちと直接触れ合っていたり取組を通じ、相互の文化理解が深まり、交流の深化に繋がった。

2-5. ヨルダンパビリオンの砂漠空間における「乾坤茶会」

①スケジュール

令和7年6月～9月	パビリオン内での茶会実施に向けてパビリオンや関係団体と調整
8月8日	報道提供やSNS等による情報発信
9月11日	乾坤茶会の実施

②体制

- ヨルダン : ヨルダンパビリオン政府代表代行 シファ・ズゲール氏、パビリオン運営委託事業者
- 堺市 : 広域連携課、文化課
- 関係団体 : 書道家 桔梗氏、大阪公立大学茶道部、御菓子司 天神餅

③内容

日時	令和7年9月11日(木) 【第一部】 午後2時から ※第一部は関係者のみ 【第二部】 午後3時から 【第三部】 午後4時から
場所	大阪・関西万博 ヨルダンパビリオン1階 展示室(大阪市此花区夢洲)
取組内容	ヨルダンパビリオン内の砂漠空間を茶室に見立て、大阪公立大学茶道部の学生が主体となり、万博ならではの特別な呈茶体験を提供。
参加者	ヨルダンパビリオン来館者約50人
報道対応	6件(ABCテレビ、読売新聞、時事通信、ラジオ関西)



点前座



お点前の様子



提供した和菓子

④効果

自治体内への波及効果	茶の湯文化の魅力を発信する取組を通じ、堺の認知度・関心度が向上したことで、今後の市内誘客に繋がる効果が期待できる。また、大阪公立大学茶道部主体で茶会を運営したことで、参加した学生の国際感覚の醸成や、今後の未来に向けた行動に繋がる効果も期待できる。
実施により達成できた成果	茶会参加者（約 50 名）やヨルダンパビリオン関係者に、万博ならではの特別な空間で茶の湯の魅力を体感いただくことができた。また、取組がメディアで取り上げられ、当日会場を訪れていない多くの方にもヨルダンパビリオンと堺の茶の湯の魅力を発信することができた。さらに、運営に参加した学生には、万博のパビリオン内での茶会というまたとない経験の場を提供することができた。
相手国への波及効果	堺の伝統文化を体感いただく取組を通じ、相互の文化理解が深まり、交流の深化に繋がった。また、相手国内での観光プロモーション効果も期待できる。

2-6. オリーブを活用したワークショップ等

① スケジュール

令和7年8月～9月	ワークショップ内容等についてパビリオンや関係団体と調整
9月22日	報道提供やSNS等による情報発信
9月24日	オリーブを活用したワークショップ等の実施

②体制

- ヨルダン : ヨルダンパビリオン政府代表代行 シファ・ズグール氏、パビリオン運営委託事業者
- 堺市 : 公民連携課、広域連携課
- 関係団体 : 北野緑生園株式会社

③内容

日時	令和7年9月24日（水） 午前10時～午後7時
場所	大阪・関西万博 ヨルダンパビリオン（大阪市此花区夢洲）
取組内容	(1) オリーブの木とヨルダンの砂漠の砂を使用した砂時計制作ワークショップ (2) オリーブリースづくり (3) オリーブオイルのテイスティング (4) ヨルダンカフェのソフトクリームと堺産レモンオリーブオイルのコラボメニューの提供
参加者	ヨルダンパビリオン来館者約4,300人

報道対応	—
------	---



ワークショップの様子



提供した砂時計やオリーブオイル

④効果

自治体内への波及効果	公民連携による堺産オリーブの魅力を発信する取組を通じ、今後の地域産業活性化に繋がる効果や国際交流の促進が期待される。
実施により達成できた成果	オリーブオイルが代表的な特産品であるヨルダンと連携し、オリーブを活用した取組を実施したことで国際交流を促進できた。また、ワークショップ来館者（約 4,300 名）やヨルダンパビリオン関係者に、堺産オリーブオイルの魅力を発信することができた。
相手国への波及効果	ヨルダンと堺の双方にゆかりのあるオリーブを活用した取組を通じ、文化理解が深まり、交流の深化に繋がった。

2-7. ヨルダンパビリオン関係者の堺市内周遊ツアー

① スケジュール

令和 7 年 8 月～ パビリオン運営委託事業者と堺周遊ツアーの実施日程や行程等を調整

令和 7 年 9 月 26 日 堺市内周遊ツアーを実施

②体制

○ヨルダン：ヨルダンパビリオン政府代表代行 シファ・ズグール氏、パビリオン運営委託事業者

○堺市：観光推進課

③内容

日時	令和 7 年 9 月 26 日（金） 午後 0 時 30 分～午後 6 時 30 分
場所	大仙公園周辺、さかい利晶の杜、和泉利器製作所、堺伝匠館
取組内容	ヨルダンパビリオン関係者に対して、堺の歴史・文化の魅力を体験するツアーを実施

参加者	ヨルダンバビリオン関係者7名（1名欠席）
報道対応	—



さかい利晶の杜の茶室お点前体験の様子 和泉利器製作所の刃物砥ぎ体験の様子

④効果

自治体内への波及効果	茶の湯文化や伝統産業など堺の魅力を発信する取組を通じ、堺の認知度・関心度が向上したことで、今後の市内誘客に繋がる効果が期待できる。
実施により達成できた成果	バビリオン関係者に堺へお越しいただくことで、堺は茶の湯が息づく都市であり、多くの歴史遺産や観光資源を有するポテンシャルの高い場所でもあると発信することができた。
相手国への波及効果	堺の伝統文化や産業を体感いただく取組を通じ、相互の文化理解が深まり、交流の深化に繋がった。また、相手国内での観光プロモーション効果も期待できる。

（3）事業の目標に対する成果

本市では、万博会期前からオンライン会議等を重ね、ヨルダンとの良好な関係性を築いていたことで、会期中に万博会場で堺の伝統産業や文化を活用した多様なイベントを複数回実施することができた。これにより、本市が目標としていた「誘客による市内消費の活性化」、「地域産業の活性化」、「こどもたちの国際感覚の醸成、未来に向けた行動」等の実現に寄与したと考える。

（4）大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

万博閉幕後もヨルダンとの関係性を継続することで、ワディ・ラムの砂の寄贈やアフター万博イベント等での協力が繋がっている。次年度以降も市内の学校における特別授業等での連携を予定しており、万博レガシーの継承に寄与していると考えます。

（5）こども（または参加者）にとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

特に、市内小学校での特別授業では、参加者へのアンケートから、「もっとヨルダンについて知りたい」「ヨルダン/ヨルダンパビリオンに行ってみたい」「ヨルダン以外の国や自国の文化についてもこれから調べてみたい」といった声が多く見られ、国際感覚の醸成や異文化理解の深化に繋がったと考える。

(6) 特に良かった点、苦勞した点

6-1. 良かった点

- 多様なジャンルのイベントを万博会期中に複数回実施できた点
- イベント等を通じて、堺の魅力を多くの参加者やパビリオン関係者に発信できた点
- パビリオンという特別な空間での取組を通じて、本市職員や関係団体がまたとない体験を得ることができた点

6-2. 苦勞した点

- パビリオンとの連絡調整が難航することが多く、イベント実施の直前まで内容を固めるのが難しかった点
- 万博会期中はパビリオン関係者も多忙を極め、交流機会を持つ時間が限られていた

(7) 今後の展開

万博会期中に実施した取組の成果やノウハウをレガシーとして市内イベント等で継承・活用し、次年度以降も引き続きのヨルダンと連携した取組を検討する。

(8) 今後の展開における課題

現在はヨルダンパビリオン政府代表代行のシファ氏が連絡窓口となっているが、すでにヨルダンへ帰国しており、今後も持続的な関係性を維持し連携するためには、大使館等の新たな窓口との関係構築が必要である。

3-19 兵庫県西宮市 × ソロモン諸島

(1) 背景と目標等

1) 背景

ソロモン諸島ホニアラ市と西宮市の関わりは、西宮市を拠点とする NPO 法人こども環境活動支援協会 (LEAF) が 2014 年 4 月からソロモン諸島、カダルカナル島にある首都ホニアラ市を対象とした独立行政法人国際協力機構 (JICA) の草の根技術協力事業として「New 3R (リデュース、リユース、リサイクル+リターン) の理念を踏まえた官民協働による家庭ごみの分別収集システムの構築プロジェクト」(フェーズ I) を実施したことを一つの契機としている。

2019 年にホニアラ市長ほか学生 7 名が西宮市を来訪し、環境関連施設などを視察した。同年、ホニアラ市は環境学習都市宣言をした(西宮市は 2003 年に「環境学習都市宣言」を行っている)。

2022 年には、ホニアラ市からの希望を受け、西宮市よりごみ収集車を 2 台寄贈した。

また、2023 年には、西宮市長がソロモン諸島を訪問し、西宮市とホニアラ市間の環境分野における協力関係構築のための MOU (覚書) 締結を行った他、「環境学習都市ホニアラ市・西宮市の相互交流・協力促進に向けて」というテーマのフォーラムに出席した。

2) 目標

「西宮市とホニアラ市の子ども・若者が、生まれ育った地域の環境や文化を学び合うことで、お互いの故郷の魅力に理解を深める」こと、また、次世代を担う両市の若者が世界の国が集う万博で環境対策などの先端技術を体験することで、未来の地球の姿を考え、ともに生きていく仲間(国)を意識し、国際感覚を養うことを目指した。

本取り組みを通じて、万博期間中に両市の学生が交流し、西宮市の取り組みや万博プログラムなどを実際に見て学ぶことで、地域、国、地球について学び、環境を守るためにどのような持続可能な活動が必要なのかなどについて、自ら考えることを目指した。

(2) 事業内容

1) 事業名：西宮市・ソロモン諸島ホニアラ市「こども・わかもの交流プログラム」

①スケジュール

4月30日 キックオフミーティング

5月12日 打ち合わせ(事業詳細に関する協議)

5月16日 打ち合わせ(学生の選定に関するソロモン諸島側との調整)

6月6日 ソロモン諸島学生選定会議

6月13日 打ち合わせ(ソロモン諸島現地コーディネーターとの協議)

※以降、関係者と事業詳細について、メールや対面での面談等で進めた。

9月 4日 万博交流プログラム事前ブリーフィング（オンライン）

9月16日～9月20日 万博交流プログラム国内滞在期間

※以降、参加学生にはアンケートでフィードバックを実施した。

②体制

- ・NPO 法人 こども環境活動支援協会 4名
- ・株式会社 かいはずマネジメント・コンサルティング 2名
- ・西宮市 4名

② 内容・効果

・砂浜での環境学習

環境省指定の鳥獣保護区であり、住民の環境保全活動等により自然の砂浜となっている甲子園浜において、大学生のアテンドで、海岸に生息する生物や、甲子園浜自然環境センターで飼育されている生物を見たり、触れたりすることで、自然環境保護の大切さを学んだ。



【甲子園浜での海的环境学習】

・子どもたち同士による交流

市内小学校の児童からは、折り紙やけん玉等の日本文化の紹介があった。ソロモン諸島の学生たちからは、民族衣装を着てお祝事の際に踊る「タガアイダンス」の披露があり、お互いの文化を見て、体験して、知ることが出来たことから、その後の学校給食や掃除の時間には、お互いにより興味を持つようになって様々な話をしていた。

言葉が円滑に通じなくても、一緒に過ごす時間の経過とともに、子どもたちの異文化理解や異文化コミュニケーションについて、理解が深まっていく様子が窺えた。また、子どもたちの交流は地域のテレビ局や新聞社により報道された。

・環境学習

王子動物園において、「廃棄物処理・環境衛生」という観点で、生き物の糞尿の処理方法について学んだ。また、動物園職員による講義を通じて、世界に動物園がある理由などについても学んだ。



【王子動物園見学】



【動物園職員によるバックヤードツアー】

西部総合処理センターに持ち込まれた粗大ごみの中から、リサイクル可能な物を展示し、再利用や修理・再生を行っている西宮市リサイクルプラザを見学し、ごみ減量再資源化や循環型社会の形成などについて学んだ。

・地域の歴史文化学習

講師より、南京町のこれまでの変遷や実体験による多文化共生に資する話を聞くことでそれぞれが多文化共生について考える機会となった。

また、兵庫県のフィールドパビリオンでも行われていた、江戸時代から続く伝統的な和ろうそく作りを実際に体験し、地元の伝統産業について学んだ。



【神戸南京町にて地域の歴史文化体験】



【松本商店にて地域の歴史文化体験】

・世界の環境学習

大阪・関西万博にて、SDGs や環境問題についての最新技術を見学、体験するなど、ソロモン諸島の学生たちの学びとなるコンテンツが多くあり、環境を視点とした持続可能な社会について考える機会になった。

(3) 事業の目標に対する成果と評価

「生まれ育った地域の環境や文化をお互いに学び合うことで、故郷の魅力に理解を深める」という目標について、今回、日本の文化や西宮市の取り組みを体感したほか、自国の文化や取り組みを披露・紹介することで、お互いの故郷の魅力の理解を深める

ことに繋がった。

また、アンケート調査にて、「今回、プログラムを通じ、環境について学習したことにより、自然環境を将来の世代に守り伝えていくために、個人として貢献できる方法について考えるきっかけとなった」「自国の人たちともこの成果を共有し、意識を高めたい」との意見があった。本事業で得た経験を自身の仕事・学校・地域へと還元する意思が示され、また実際に行動に移しているとの報告もあり、意識と行動面での変化が見られ成果があったものと評価する。

(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価))

ホニアラ市の政府関係者、学校関係者共に、本プログラムを通じて協力関係を一定構築できたと考えている。今後、交流事業については今回で深まった関係を基に新たな交流へとつながることが期待できる。また、今回のテーマ以外の分野においても交流を期待する。

(5) 子どもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

本事業を通じて、子どもたちは異文化や海外の人々と直接関わる経験を得ることで、自分たちの住む地域が世界とつながっていることを実感した。交流活動や対話を通じて、多様な価値観を尊重する姿勢や国際社会への関心が高まり、将来は国際的に活躍したい、海外と関わる仕事に就きたいといった前向きな意識が醸成された。地域にしながら世界とつながる経験は、子どもたちにとって将来への可能性を広げる貴重な機会となった。

(6) 特によかった点、苦勞した点

1) 良かった点

ホニアラ市とは、環境分野における協力関係構築のための MOU (覚書) を締結するなど行政間の連携はあったが市民レベルの交流までには至っていなかった。本プログラムを通じてソロモン諸島ホニアラ市の学生が日本文化に触れるだけでなく、日本の小学生、大学生と交流し、多様かつ新たな視点から課題や課題解決のヒントなどを交流したお互いが得る良い機会となった。

2) 苦勞した点

本プログラムは、NPO と行政がそれぞれの立場で取り組むことで大きな問題が生じることなく実施することができた。しかし、各プログラムのスケジュールリングや事業費の活用方法等について、各種調整することが多くあり、その点苦勞した。

(7) 今後の展開

ソロモン諸島ホニアラ市と西宮市は、環境分野における協力関係構築のための MOU (覚書) を締結しているが、今後更なる交流へと発展することに期待している。本プログラムにて、これまで実施してきた相互交流を、より直接的に「人」がつながる形で実施できたことで、本プログラムで関わった人々が、交流関係の深まりを活かし、地域での環境保全の取り組み実践をしていくことに繋がっていくものと考えている。

(8) 今後の展開における課題

本プログラムへの参加希望者が多かったことから、同様なプログラムへ参加したいという意欲や希望を強く持っていることが伺えた。オンラインでの交流も主流になってきている時代ではあるが、やはり現地交流することで体験できることも多くあるのではと考える。本プログラムをきっかけに、更に交流が広がることが望ましく、各所が自走して交流を続けられるネットワークづくりなどに繋がっていく展開になっていけばと考える。

3-20 和歌山県有田市 × アラブ首長国連邦

(1) 背景と目標等

1) 背景と目的

【背景】

○ドバイ万博を契機とした新たな国際交流の始まり

2022（令和4）年、有田市長によるドバイ万博訪問を契機として、両地域の交流が開始された。従来の姉妹都市交流という形式に捉われず、総領事館と連携した鮮魚の輸出や市場拡大の実証事業を推進。経済・文化交流を通じて、有田市とドバイの関係性は着実に深化している。

○次世代エネルギーへの転換と環境学習の推進

地域経済を支えた石油精製工場の閉鎖に際し、本市は次世代エネルギーへの転換を最重要課題と捉えている。廃食油を原料とする SAF（持続可能な航空燃料）の製造に着手するなど、既存の製油施設を次世代エネルギーの精製拠点へと転換。官民連携による脱炭素社会の実現に向け、その歩みを加速させている。

○有田市立有和中学校と GEMS Al Barsha National School との学校間連携協定の締結

2024（令和6）年1月、有田市立有和中学校（以下、「有和中学校」）と GEMS Al Barsha National School（以下、「GNS」）との「サステイナブル・コラボレーション」をテーマとした学校間連携協定を締結している。

【GNS と有和中との協定内容】

- ①共同教育プロジェクト：環境の持続性、テクノロジーなど相互に関心のあるテーマについて、協働的な探究学習の実施
- ②交換留学プログラム：学生がお互いの文化や教育システムを体験するための短期交流訪問

○多様な価値観に触れる国際教育の推進

本市では 2013（平成 25）年度より、オーストラリア（ケアンズ）への派遣をはじめとする中学生の国際交流を推進してきた。コロナ禍による中断を経て 2024（令和 6）年度に再開。これまでの西洋的価値観に偏りがちだった交流に加え、新たに中東地域の学校との交流を導入。異なる文化圏の生徒同士が直接触れ合うことで、より多角的な国際感覚の醸成が期待される。

【目的】

◆次世代を担う人材の育成

ドバイとの交流を通じ、中学生一人一人の国際感覚を磨く。科学技術や次世代エネルギーへの関心を高めるとともに、文化の違いを越えた共感力を養い、地球規模の課題に他者と協働して立ち向かえる人材を育成する。

◆万博を機とした持続可能な交流

大阪・関西万博を「まちと人の成長」の原動力とし、中東地域への理解とインバウンド誘客を両輪で推進する。単なる一過性のイベントに終わらせず、「つながり」が新たな価値を生む、活力あるまちづくりを推進する。

2) 目標

【中長期】

1. 次世代を担う人材の育成

○国際感覚の醸成と多文化共生

多様な価値観を享受し、他者への共感と異文化への深い理解を兼ね備えた、国際感覚豊かな人材を育成する。

○イノベーション人材の輩出

ドバイとの継続的な交流を通じて最先端の技術や知見に触れ、自ら課題を見つけ主体的に行動できる力を養う。

○地球規模の課題解決への貢献

次世代エネルギーや科学技術を柔軟に活用し、多様な他者と協働しながら地球規模の課題解決に貢献できる人材を育てる。

2. 持続可能な交流とまちの成長

○万博を契機とした地域活性化

2025年大阪・関西万博を「まちと人の成長」の機会とし、市民・県民の中東地域に対する意識醸成と相互理解を促進する。

○持続的な国際ネットワークの構築

一過性のイベントに終わらない「息の長い交流」を確立し、インバウンド誘客や経済交流を生む「つながりある魅力的なまち」を実現する。

【令和7年度】

1. GNS 生徒の訪日受け入れと学校間交流（9月）

GNS（ドバイの学校）の訪日において、有和中学校において生徒同士の直接交流を実施する。

2. 大阪・関西万博への参加と UAE パビリオンでの成果発表（9月19日）

教育旅行の枠組みを活用し、UAE ナショナルデー（9月19日）に合わせて万博会場を訪問し、UAE パビリオンにて、GNS 生徒と有和中学生による共同の成果発表および交流プログラムを行う。

3. 市民・地域組織を巻き込んだ「オール有田」による交流促進

「ALL ARIDA 協議会 2025」や地域住民と連携し、交流事業を展開する。

4. 有和中学生のドバイ現地派遣研修（12月）

前年度に引き続き、有和中学生をドバイへ派遣し、現地での生活・文化体験を通じ、相互理解と国際感覚のさらなる深化を図る。

(2) 事業内容

【令和7年度実施スケジュール】

- ・ R7. 6. 5 (木) ドバイプロジェクト キックオフ (中学3年派遣生代表によるプレゼン)
- ・ R7. 6.20 (金) 環境学習 (次世代エネルギー) (ENEOS 和歌山製造所担当者による講義)
- ・ R7. 7. 1 (火) 事前学習 (JICE 国際研修部国際協力課職員加藤すばる氏による講義)
- ・ R7. 7.16 (水) ドバイ現地派遣希望者 58名 作文試験
- ・ R7. 7.31 (木) ~ 8. 1 (金) ドバイ現地派遣希望者 面接試験 (20名選定)
- ・ R7. 8.28 (木) GNS とオンライン会議
ドバイ現地派遣予定者 保護者説明会
- ・ R7. 9. 2 (火) 環境学習 (SDGs: ペットボトルがつくる未来) (SUNTORY 担当者による講義) キャリア教育 (SUNTORY が掲げる理念 中学生の皆さんへのメッセージ)
- ・ R7. 9.11 (木) 関係者とのオンライン協議 (GNS9月訪日に係る直前打ち合わせ)
- ・ R7. 9.17 (水) ~ 9.18 (木) GNS 生徒訪日 有和中学校授業体験及び生徒交流
- ・ R7. 9.19 (金) 大阪・関西万博訪問 (有和中学校全校生徒) UAE ナショナルデー
UAE パビリオンでのプレゼンテーション (ドバイ派遣有和中3年生 20名)

〔※R7.10月以降、有和中2年生現地派遣予定者20名による事前ドバイ学習を複数回実施〕

- ・ R7.11.28 (金) 有和中2年生ドバイ現地派遣者 保護者説明会 (最終)
- ・ R7.12. 6 (土) ~12.12 (金) ドバイ交流現地派遣プログラム
(有和中学校2年生生徒20名・学校教職員3名・教育委員会担当1名)

〔※冬休み中に各自で現地派遣についてまとめ、スライドを作成〕

- ・ R8. 1.14 (水) 成果報告会に向けた見通しと今後の取組 (放課後)
- ・ R8. 2.16 (月) 2.20 (金) 現地派遣生徒20名による成果報告 (ポスターブース発表)
- ・ R8. 3. 2 (月) 有和中学校全校生徒及び教職員等への成果報告 (朝集時)

【実施体制】

実施者氏名	業務分担	所属・役職
泉 泰朗	業務責任者 (全体統括)	有田市教育委員会参事
中西 朋子	業務担当者 (事業内容全般)	有田市教育委員会教育総務課統括指導主事
伊藤めぐみ	業務担当者 (経理・事務統括)	有田市教育委員会教育総務課総務係長
坂頭 歩美	業務担当者 (経理・事務等)	有田市教育委員会教育総務課総務係主任

吉野 清誠	業務担当者（外部機関への連絡）	有田市役所秘書広報課長
野井 嘉人	業務担当者（大阪・関西万博推進）	有田市役所ふるさと創生室長
宮崎 仁美	業務担当者（All ARIDA協議会2025）	有田市役所ふるさと創生室ブランド推進係長
森 元	学校責任者	有田市立有和中学校校長
宮井 和哉	学校担当者（現地引率統括）	有田市立有和中学校教頭
林 華代	学校担当者（現地引率）	有田市立有和中学校教諭
矢野 孝信	学校担当者（現地引率）	有田市立有和中学校教諭
金森 篤也	現地コーディネーター兼通訳	JICE国際研修部国際協力課・副主幹（アブダビ事務所長）
加藤すばる	JICE業務担当兼授業講師	JICE国際研修部国際協力課・職員
上村 怜	交流業務統括	事業請負（JTB）
温 馨	通訳	アクセント株式会社ビジネスコンサルティング部マネージャー
廣瀬 裕司	内閣官房業務委託担当者	近畿日本ツーリスト

《関係機関等》

機関名	関わり
在日本アラブ首長国連邦大使館	UAEパビリオン等万博についての情報収集
在ドバイ日本国総領事館	GNSと有和中学校の教育交流に係る提案・支援等
SHF（2025大阪・関西万博 UAEパビリオン運営団体 Salama Bint Hamadan Al Nahyan Foundation）	UAEパビリオンを手がける財団 R7大阪・関西万博9/19UAEナショナルデーでの生徒プレゼンテーションに向けた連携・協力
・和歌山県万博推進課 ・和歌山県教育委員会 ・テレビ和歌山	R7大阪・関西万博への参画・GNS生徒受け入れに向けた協力 県立箕島高校生等の参画（みかんの廃材を使ったタンブラー） 教育テレビ番組「はばたく紀の国」制作協力
JTB	R7GNS9月訪日に向けた具体的な検討・連携・手配等 R7有和中学校生徒12月ドバイ現地訪問に係る手配等

1) 現地の人々の様子や生活習慣、文化、伝統等について理解を深めるための UAE（ドバイ）事前学習

【日程】

- ① 令和7年6月5日(木) 8:20-8:35 ドバイプロジェクト キックオフ
- ・場所：有田市立有和中学校 体育館
 - ・発表者：有和中学校生徒3年生代表8名(昨年ドバイ派遣に参加した生徒)
 - ・参加者：有和中学校生徒約400名(内訳：2年生約200名・1年生約200名)
 - ・内容：令和6年度ドバイ研修報告プレゼンテーション及び質疑応答
ドバイの紹介 文化・生活・宗教等について GNSにおける生徒交流の様子
実際に訪問しての気づきと下級生へのメッセージ
- ② 令和7年7月1日(火) 14:25-15:15 UAE(ドバイ)事前学習
- ・場所：有田市立有和中学校 体育館
 - ・講師(敬称略、以下同様)：加藤すばる 一般財団法人日本国際協力センター(以下、「JICE」)国際研修部国際協力課職員
 - ・参加者：有和中学校2年生約200名
 - ・内容：事前学習講義・質疑応答(JICEの仕事について、UAE(ドバイ)の日常生活、文化・伝統等、UAE(ドバイ)の環境(SDGs)についての意識や取組等)
- ③ 令和7年10月以降、現地派遣生徒による事前ドバイ学習を複数回実施(放課後)
- ・場所：有田市立有和中学校 2年生教室
 - ・参加者：有和中学校2年生20名(現地派遣予定者)
 - ・内容：12月の渡航に向けた見通しとグループ別調べ学習(ドバイ研修のしおりづくり)



【①6/5 ドバイプロジェクトキックオフ】



【①6/5 クイズ形式で文化を紹介】



【②7/1 JICE 加藤氏による講義】



【③派遣予定者が事前学習で作成したしおり】

2) 各企業 (ENEOS・SUNTORY) からゲストティーチャーを招へいた環境学習 (次世代エネルギー・SDGs)

【日程】

- ① 令和7年6月20日(金) 10:40-11:30 環境学習(次世代エネルギー)
 - ・場所: 有田市立有和中学校 体育館
 - ・講師: ENEOS株式会社 和歌山製造所 担当職員2名
 - ・参加者: 有和中学校2年生約200名
 - ・内容: 次世代エネルギー(SAF)、カーボンニュートラルに向けた和歌山製造所の取組等に係る講義・質疑応答
- ② 令和7年9月2日(火) 13:25-16:15 環境学習(ペットボトルがつくる未来)
 - ・場所: 有田市立有和中学校 体育館
 - ・講師: サントリーホールディングス株式会社サステナビリティ経営推進本部 担当職員2名
 - ・参加者: 有和中学校2年生約200名
 - ・内容: (5時間目) 企業が考える持続可能な未来をつくるしくみ〜ペットボトルからペットボトルへ〜についての講義・グループワーク・質疑応答
(6時間目) キャリア教育 SUNTORYの理念 サステナブルな未来



【①6/20 ENEOS 担当者による講義】



【①6/20 講義後の生徒挨拶】



【②9/2 SUNTORY 担当者による講義】



【②9/2 生徒グループワーク】

3) GNS と有和中学校の生徒交流 (9月GNS訪日)

【参加者】GNS: 生徒43名(男子20名、女子23名)

引率6名(副校長1名、教員4名、添乗員1名、通訳1名)

有和中学校: 生徒40名〔3年生20名(男子10名、女子10名)、2年生20名〕

(男子6名・女子14名)

交流サポート：通訳1名、JICE職員1名、支援業務コーディネーター1名

協力：ALL ARIDA協議会2025(寿司づくり体験)、有田市婦人会(昼食準備)

【日程】

①令和7年9月17日(月)～18日(火)有和中学校授業体験(2日間)

- ・場所：有田市立有和中学校 体育館・武道場・各教室 有田市文化福祉センター 有田市健康スポーツ公園 BIG SMILE PARK えみくるドーム
- ・内容：授業を通して、日本の文化に触れることを目的とした男女別特別授業(茶道教室、武道体験、書道体験、スポーツ体験等)

時刻	Timetable	
	男子生徒	女子生徒
8:00	有和中学校到着・歓迎	
8:30-8:40	GAKU 全体歓迎会(特別)	
1時間目 8:40-9:30	22期州日誌の発行、校内配布 一編に特筆を受けられる文を志す	
2時間目 9:40-10:30	書道(漢道について) 伝統的な日本の 礼儀作法を学ぶ	茶道教室 日本文化を体験する
3時間目 10:40-11:30	茶道教室 日本文化を体験する	書道① "漢字"を学ぶ
4時間目 11:40-12:30	書道① "漢字"を学ぶ	書道 漢字コミュニケーションを 学ぶ
昼食と昼休み	昼食と昼休み	
5時間目 13:25-14:15	書道② 漢字で自分の名前を 書いてみる	書道(武道について) 伝統的な日本の 礼儀作法を学ぶ
退席後 15:00-16:00	有和中学校・体育館内清掃	

※9月17日 終了予定:16:30頃 有和中学校

時刻	Timetable	
	男子生徒	女子生徒
8:00	22期州日誌の発行・配布	
8:10	授業準備	書道とハラスで移動
1時間目 8:40-9:30	書道① 習った漢字を 実際に書く	書道(校内学習) どよみやまのハラス スローでも読んでみる →22期州日誌
2時間目 9:40-10:30	書道② 習った漢字を 実際に書く	書道② 漢字で自分の名前を 書いてみる
3時間目 10:40-11:00	書道とハラスで移動	書道① 習った漢字を 実際に書く
4時間目 11:40-12:30	書道(校内学習) どよみやまのハラス スローでも読んでみる →22期州日誌	書道② 習った漢字を 実際に書く
昼食と昼休み	昼食と昼休み	
5時間目 13:25-14:15	JACE 協議会主催プレゼンテーションのための会合開催	
退席後	写真撮影・見送り	

※9月18日 終了予定:14:30頃 有和中学校



【9/17 全校生徒歓迎セレモニー】

【9/17 体育：武道/柔道(男子)】



【9/17 国語：漢字/書道(女子)】 【9/17 音楽：琴演奏体験(女子)】



【9/17 茶道体験（女子）】



【9/18 朝の会（女子）】



【9/18 昼食（男子）】



【9/18 体育：サッカー（えみくるドーム）】



【9/18 美術：しおりづくり（男子）】



【9/18 お別れ式：全員集合】

②令和7年9月17日（水）15:00-16:00 課外体験活動：寿司づくり体験

- ・場所：橘家（たちばなや）（和歌山県有田市宮原町新町17）
- ・内容：有田市の特産物を使った寿司づくり体験（GNS×有和中学校）
- ・訪問者：今西在ドバイ日本国総領事
- ・運営担当：ALL ARIDA 協議会 2025、有田市役所ふるさと創生室ブランド推進係



【9/17 寿司づくり体験（橘家）】



【9/17 寿司づくり体験（橘家）】

【参考】令和7年9月17日（水）18:30-20:30 GEMS アル・バルシャ・ナショナル
スクール歓迎レセプション

- ・場所：ダイワロイネットホテル和歌山 4階「ボールルームグラン」
（和歌山県和歌山市七番丁26-1）
- ・内容：①絵解き説法：福辻京子氏 ②和太鼓演奏：嶋本龍氏 ③生徒発表等：有和
中生徒・GNS生徒 ④写真撮影 ※和歌山の観光名所版「フォートナイト」
体験ゾーン設置
- ・参加者：（来賓）宮崎泉和歌山県知事、今西宏行和歌山県教育長、今西淳在ドバイ
日本国総領事、伊藤和弘 ENEOS 株式会社和歌山製造所事務副所長、望月良男参議
院議員、上山寿示和歌山県議会議員ほか
- ・主催：有田市、有田市教育委員会、有田市議会、ALL ARIDA 協議会 2025



【9/17 有和中学校発表における生徒交流】



【9/17 今西総領事と生徒】



【9/17 有田市長と GNS 生徒】



【9/17 嶋本龍氏による和太鼓演奏】



【9/17 有田市特産のみかんジュースを提供】



【9/17 歓迎レセプション集合写真】

【取材：教育広報テレビ番組「はばたく紀の国 ～教育は今～」テレビ和歌山（12月7日放送）】

「世界とつながる大阪・関西万博～ドバイと有田市立有和中学校の交流～」

<https://www.youtube.com/watch?v=cefygPQfDK8>

【地方紙：「有田タイムス」令和7年9月25日】

【参考】市民参画：令和7年9月17（水）18日（木）GEMS 校生徒9月来日時の昼食提供

- ・場所：宮崎公民館調理室
- ・担当：有田市教育委員会、有田市婦人会
- ・内容：有田市の特産物を使った昼食を調理、提供（ハラル対応）
ハラル対応カレー、はも団子汁、ちらし寿司、太刀魚フライ等



【9/18 ハラル対応表示】



【9/18 メニュー】

③令和7年9月19日（金）大阪・関西万博訪問（有和中学校全校生徒約600名）

GNS生徒及び引率教員等は現地で合流予定（※不参加）

・場所：大阪・関西万国博覧会会場 UAEパビリオン イベントホール

・参加者：有和中学校3年生20名（令和6年12月現地派遣者）

UAEパビリオンユースアンバサダー2名（男性1名、女性1名）

・内容：有和中学校生徒によるドバイ訪問時における学びや気づきの発表（英語プレゼン）



【9/19 UAE ナショナルデー 公式セレモニー】



【9/19 大阪・関西万博 UAE パビリオン】



【9/19 有和中学校生徒による発表】（※GNS 不参加）

4) 有和中学校生徒ドバイ交流現地派遣プログラム

【参加者】有和中学校：生徒 20 名〔2 年生 20 名（男子 6 名・女子 14 名）〕

有和中学校教頭 1 名、有和中学校教諭 2 名、有田市教育委員会担当 1 名

引率計 4 名

【現地帯同者】JTB 現地ツアーコンダクター（通訳兼務）1 名、JICE アブダビ事務所長 1 名

【日程】令和 7 年 12 月 6 日（土）～12 月 12 日（金）【5 泊 7 日】

①令和 7 年 12 月 6 日（土）20:15 有田市役所出発 23:10 関西空港出発

②令和 7 年 12 月 7 日（日） 5:25 ドバイ空港到着

午前：バージュカリファ展望台

午後：ドバイ未来博物館、ドバイフレーム

③令和 7 年 12 月 8 日（月） 午前：エキスポシティ（ドバイ万博跡地）、アルファヒ
デ地区

午後：シェイク・モハメド・文化理解センター

④令和 7 年 12 月 9 日（火） 生徒交流

午前：エティハド博物館見学（有和×GNS 合同）

午後：日本国総領事公邸にて 有和×GNS 生徒交流イベント

⑤令和 7 年 12 月 10 日（水） 午前：日本国総領事館訪問 午後：ワルサン廃棄物処理施設訪問

⑥令和 7 年 12 月 11 日（木） アブダビ

午前：シェイク・ザイド・グランドモスク、ヘリテージ・ビレッジ

午後：INPEX 社にて エネルギー勉強会

⑦令和 7 年 12 月 12 日（金）17:05 関西空港到着 19:30 有田市役所着

----- 【12/7：現地 1 日目】ドバイ市内散策（バージュ・カリファ、ドバイフレーム、未来博物館）

市内散策を通して、現在のドバイの街並みを肌で感じることを目的とした。バージュ・カリファ展望台やドバイフレーム、未来博物館などを巡り、ドバイの歩んできた歴史から未来への取り組みまでを深く学ぶ機会となった。



【12/7 ドバイフレーム】



【12/7 ドバイ未来博物館】



【12/7 バージュカリファ展望台】



【12/7 ドバイ未来博物館】

【12/8：現地 2 日目】エキスポシティ（ドバイ万博跡地）、アルファヒディ地区、シェイク・モハメド・文化理解センター（昼食：アラビア料理、モスク礼拝体験）

令和 7 年度は大阪・関西万博の開催年ということもあり、生徒たちは前回の万博開催地であるドバイに親近感を抱いた様子であった。現地コーディネーターの話に熱心に耳を傾け、積極的に質問する姿が印象的であった。また、伝統的な街並みが保存さ

れたアルファヒディ地区では、当時の建築様式を学習。モスクでの礼拝体験やアラビア料理の昼食を通じ、アラブの文化や習慣に肌で触れる貴重な機会となった。



【12/8 ドバイ万博跡地 (エキスポシティ)】



【12/8 アルファヒディ地区】



【12/8 アラブの生活様式】



【12/8 モスク礼拝体験】



【12/8 アラビア料理】



【12/8 アラビア料理を食べる生徒】

【12/9：現地3日目】生徒交流

午前：エティハド博物館見学〔有和中 20 名、GNS 生徒 10 名（男子 5 名、女子 5 名）合同〕

午後：日本国総領事公邸にて 有和中×GNS 生徒交流イベント

当初予定していた学校訪問は、相手校のスケジュール変更により実施が危ぶまれたが、在ドバイ日本国総領事館および JICE（日本国際協力センター）の多大なるご尽力により、総領事公邸での交流という貴重な機会をいただくことができた。

会場では、9月の訪日時に交流を深めていた生徒たちが再会を喜び、すぐに打ち解ける姿が見られた。グループに分かれて「日本の遊び」を楽しむプログラムでは、予定時間を1時間超過するほど盛り上がり、終始笑顔の絶えない温かな時間となった。

昼食は GNS のランチルームにて、現地の食事をご提供いただき、生徒同士でテーブル

ルを囲んだ。食後はアラビア文字の書き方を教わったほか、昨年度の訪問時に有和中学校の生徒たちが整備した庭園を訪れ、当時の活動を引き継ぐ形で手入れも行うことができた。

【目的】

- ・ UAE と日本の生徒間の交流を促進する。
- ・ UAE と日本の生徒が得た学習経験と知見を相互に共有する。
- ・ UAE と日本の生徒の間で互いの文化を尊重することの重要性について意識を高める。

GNSと有和中学校の対面交流プログラム		
2025年 12月9日	時刻	2025年12月9日 (UAE時間) ●10:00 現地集合 (エティハド博物館) ●10:00～11:30 校外学習 (博物館見学) ●12:00～13:30 昼食 (交流) ●14:00～16:00 ドバイ日本国総領事公邸にて生徒交流 ●16:00 終了
	形態	対面交流イベント
	生徒数	(UAE) : GEMSアル・バルシャ・ナショナル・スクールの生徒10名 (日本) : 有和中学校の生徒20名 (男子6名、女子14名)

●14:00～16:00 ドバイ日本国総領事公邸における生徒交流プログラム内容：

1. 在ドバイ日本国総領事による開会の辞
2. 両校代表挨拶
3. 自己紹介・GNS 生徒の日本訪問、有和中学校生徒のドバイ訪問における気づきの発表
 <軽食・歓談>
4. 有和中学校生徒による日本の文化紹介「日本の遊びを一緒に楽しもう！」
5. 両校より御礼の言葉
6. 在ドバイ日本国総領事による閉会の辞・写真撮影



【12/9 生徒再会】



【12/9 エティハド博物館】



【12/9 カルタで遊ぶ生徒】



【12/9 集合写真】

【12/10：現地 4 日目】 午前:日本国総領事館訪問 午後:ワルサン廃棄物処理施設訪問

午前に訪問した日本国総領事館では、今西総領事との懇談を実施。総領事からは、英語での発信力や好奇心を持つことの大切さが語られ、今回の経験を糧に「日本と UAE の架け橋」になってほしいと激励の言葉をいただいた。

午後はワルサン廃棄物処理施設を視察し、政府と民間が連携した循環型システムについて学んだ。公衆衛生の維持や温室効果ガスの削減、廃棄物発電による売電事業など、持続可能な社会構築に向けた具体的な取り組みに触れる貴重な機会となった。



【12/10 在ドバイ日本国総領事館】



【12/10 今西総領事と生徒の懇談】



【12/10 ドバイの新聞記事を確認】



【12/10 ワルサン廃棄物処理施設説明】

【12/11：現地 5 日目】 アブダビ

午前：シェイク・ザイド・グランドモスク、ヘリテージ・ビレッジ

午後：日本石油開発株式会社（JODCO）でのエネルギー勉強会

5 日目は、GNS 校の訪問日程変更に伴い、アブダビにて INPEX グループ（JODCO）による勉強会が実現。あわせて、イスラムの聖地であるシェイク・ザイド・グランドモスクを訪れ、厳かな文化を肌で感じる事ができた。ドバイとは異なるアブダビの街並みに触れることで、UAE という国の多様な特徴を理解する有意義な一日となった。

INPEX 社では、萩原所長ら温かな歓迎のもと、「長年にわたり日本とアブダビの架け橋として活動する」という企業の理念や、石油開発を通じた両国の深い信頼関係について学んだ。

講義では、巨大な掘削の仕組みに加え、公文式教育の普及といった社会貢献活動（CSR）についても解説いただき、質疑応答では、

「日本は石油が取れないのに、なぜ本社が日本にあるのか？」

「石油はスポンジのように染み込んでいると知り驚いた。契約期間内にすべて取り出せるのか？」

「多額の費用をかけた開発に失敗した際、採掘した場所はどうなるのか？」

のような質問や感想が寄せられた。

日々の生活を支える石油が、多大な手間と信頼関係の上に成り立っていることを実感した生徒たちは、「資源を大切にしたい」「環境問題に自ら興味を持って過ごしたい」と決意を語り、企業の使命と国際協力の重要性を肌で感じる、極めて充実した学習の時間となった。



【12/11 グランドモスク外観】



【12/11 女性は布をまとして見学】



【12/11 ヘリテージ・ビレッジ内展示】



【12/11 JODOCO 萩原常務取締役による挨拶】

5) ドバイ現地交流についての生徒による成果報告

【日程】

(ア)令和8年2月16日(月)20日(金)総合的な学習の時間 現地派遣者20名の生徒による成果報告①(予定)

- ・場所：有和中学校各教室
- ・参加者：有和中学校2年生約200名ほか
- ・内容：12月現地訪問の学びや気づきを同学年の生徒及び関係者等にポスターブース発表

(イ)令和8年3月2日(月)現地派遣者20名の生徒による成果報告②(予定)

- ・場所：有田市立有和中学校 体育館
- ・参加者：有和中学校全校生徒約600名、全教職員等
- ・内容：12月現地訪問の学びや気づきを全校生徒に報告

(3) 事業の目標に対する成果

【令和7年度目標】

1. GNS 生徒の訪日受け入れと学校間交流 (9月)
2. 大阪・関西万博への参加と UAE パビリオンでの成果発表 (9月19日)
3. 市民・地域組織を巻き込んだ「オール有田」による交流促進
4. 有和中学生のドバイ現地派遣研修 (12月)

【中長期目標の実現に向けた令和7年度の歩み】

A：自治体への波及効果

令和7年度に実施した上記事業は、昨年度に引き続き、本市が掲げる「次世代人材の育成」と「持続可能なまちの成長」という中長期目標を具現化する大きな一歩となった。地域を挙げた歓迎は、市民の国際理解を深めることにつながった。今年度の成果は、有田市が「世界とつながる魅力あるまち」へと成長していくための確かな原動力となっている。

B：実施により達成できた成果

9月のGNS訪日受け入れおよびドバイ派遣研修では、「体温の伝わる交流」が実現し、多様な価値観を尊重する「国際感覚豊かな人材」の育成が着実に進んでいると言える。また、大阪・関西万博 UAE パビリオンでの成果発表は、次世代エネルギーをテーマとした環境教育において有和中学校の生徒たちが最先端の知見に触れるとともに、ドバイ現地研修で学んだことや気づきを自ら考え発信する機会となり、「イノベーション人材」としての素養を磨く最高の機会となった。

C：相手国への波及効果

令和6年12月のドバイ訪問から始まった本事業は、翌令和7年9月のGNS訪日受け入れ、そして12月の再訪ドバイ派遣と、途切れることのない相互交流を実現している。

この継続的な活動は、学校間の枠を超え、日本とアラブ首長国連邦（UAE）の未来を固く結ぶ「架け橋」として重要な役割を果たしている。一過性ではないこのつながりが、次世代を担う両国の生徒たちの国際感覚を育み、友好関係を深める大きな原動力につながると感じている。

（４）大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価))

①「万博」を起点とした国際感覚の醸成と多文化共生

2025年大阪・関西万博での共同発表を大きな節目とし、GNSとの継続的な生徒交流を通じて、一人ひとりが多様な価値観を認める国際感覚を養う。この歩みは生徒に留まらず、市民の多文化共生に対する意識を高め、地域全体を世界とつながる開かれたまちへとアップデートしていくことにつながる。

②「教育・文化・経済」が連動する持続的な交流

在日本アラブ首長国連邦大使館、在ドバイ日本国総領事館、JICE、ワルサン廃棄物処理施設、INPEX社等の関係機関、地元企業（ENEOS等）を巻き込んだ官民連携の枠組みを構築することができた。「有田市こども未来基金」の活用による学校間交流の定着により、次世代へつながる持続可能な交流モデルの確立を推進する。

（５）こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

令和7年度ドバイ現地派遣生20名を対象に、令和7年12月末に事後アンケートとして回答していただいた結果を以下に示す。

研修への参加については20名全員が肯定的に回答しており、85%が「とてもよかった」と評価しているところから研修全体が子供たちにとって有意義であったことが分かる。また、「研修を通して『海外の文化』への理解は深まりましたか？」「日本と外国（UAE/ドバイ）の文化の違いを実感できましたか。」という質問についても全員が肯定的に捉えており、海外の文化の違いを実感した上で、理解が深まったことが分かる。

生徒の意見の中には、「自分の将来の仕事に役立たせられるようなヒントをたくさん見つけることができた。日本とドバイの人たちでは価値観が全く違うし、宗教や生活スタイルも違うけれど同じ世界に住んでいる人間として交流をすることができた。もし、また海外で交流するような機会があれば今回交流を通して考えたことや感じたことを生かしていきたい」「質問する場などで、もっと意見を言ったり質問したりすればよかった。お互いの文化を尊重しあうことが大切だと改めて気づいた。この貴重な体験をいかしていきたい。将来海外にかかわる仕事をしてみたい」という意見もあった。2月、3月には今回の学びや気づきを成果報告会として発表する予定である。生徒それぞれがこの機会を自身の将来に生かしていくことが期待される。

今回特に生徒から高評価の意見が多かったのは、総領事公邸での生徒交流である。

GNSでの学校体験は叶わなかったが、有志の生徒の皆さんと一日を共にすることができたことが生徒たちにとっても強く印象に残っているようだった。9月訪日していた生徒との再会ということもあり、12月はよりいっそう、国を越えた絆が深まったものと実感している。また、アブダビINPEX社のエネルギー勉強会においては、質疑応答も活発に行われ、貴重な学びの機会となったことが新たな成果であった。

(6) 特に良かった点、苦勞した点

1) 良かった点

① 直接交流による国際感覚の醸成

9月のGNS訪日による生徒交流は、本事業の大きな成果となった。また昨年度に引き続き、ドバイへ有和中学生を派遣でき、生徒交流を継続できたことが良かった。対面での交流を通じて、生徒たちが多様な価値観を認め合い、尊重し合う「国際感覚」を養う貴重な機会となった。

② 「オール有田」による歓迎体制の構築

大阪・関西万博の開催に合わせ、庁内各課や地域団体（ALL ARIDA 協議会 2025、有田市婦人会等）が一体となり、市全体でGNSを歓迎することができた。地域を挙げた協力体制が、本事業の質を一層高めた。

③ 関係機関との連携

昨年度構築したネットワークを基盤に、オンライン協議等を活用することで、より実効性の高い運営を実現した。特に現地コーディネーターの金森氏（JICE アブダビ事務所長）には、GNSやSHF財団との緻密な調整に尽力いただき、本プロジェクト完遂において不可欠な役割を果たしていただいた。

④ 生徒から生徒への継承

今年度のキックオフでは、昨年度の派遣生（中学3年生）が自らの学びをプレゼンする形式を導入。実体験に基づく先輩からのメッセージは、参加を検討する中学2年生にとって大きな刺激となった。今年度ドバイ派遣生による成果報告は令和8年2月、3月に予定している。

2) 苦勞した点

① 文化・宗教への配慮と柔軟な対応

○食生活と宗教上の配慮

- ・ハラル対応やお祈りの部屋確保、男女別授業など多岐にわたる配慮が必要であった。
- ・特に食事面では、事前の想定と異なり提供したものが食べられないケースが発生したため、今後はより詳細な事前確認と、現場での臨機応変な対応体制が不可欠である。

○ゆとりを持った行程管理

- ・時差や慣れない環境によるストレス・疲労を考慮し、スケジュールにゆとりを持たせるべきであった。

・急ぎすぎず、対話や休息を優先できる時間設定が必要である。

②危機管理と環境整備

○緊急時の医療・看護体制

・生徒の発熱（インフルエンザ等）の際、病院や関係機関と連携し迅速に対応できた点は成果であった一方で、保健室での待機に引率教員が割かれるなど人員配置に課題が残ったため、緊急時の役割分担を再考する必要がある。

○施設環境の最適化

・9月の残暑を考慮し、館内全体の空調管理を徹底するなど、ゲストの体調管理を優先した環境整備を行う。

③海外機関とのコミュニケーションと計画立案

○継続的なスケジュール確認の徹底

・9月の対応を優先するあまり、12月のドバイ訪問に関する再確認が疎かになり、相手校の休暇期間と重なる事態を招いた。
・海外機関とのやり取りでは、日本の感覚に頼らず、相手国のカレンダーや休暇予定を早期かつ継続的に確認する体制を整える。

④組織連携と情報共有の在り方

○「市全体」での協力体制の構築

・寿司作り体験やレセプション等は成果を上げたが、有田市全体の事業としているため、教育委員会単体ではなく「市全体」の事業であるという認識の共有が必要である。
・事業目的を再確認した上で、各部局との情報共有や連携会議の持ち方を整理すべきである。

（7）今後の展開及び課題

1) 今後の課題

①事業の再定義とレガシーの継承

現時点では両校の教育交流が主軸であり、教育委員会主導で進めてきたが、来年度の「アフター万博」を見据え、事業目的を再確認する必要がある。万博で得た成果を一時的なものにせず、次世代へつなぐレガシーとして継承・発展させていく。

②継続的かつ具体的な交流計画の策定

GNS関係者と密なコミュニケーションを維持し、常に最新の情報を共有する体制を整える。令和8年度のGNS生徒訪日の可能性を探るとともにドバイ派遣研修の実現に向け、関係機関と具体的な協議を加速させる必要がある。

③現地コーディネーターとの連携強化

日本の感覚とは異なる現地の文化や習慣に柔軟に対応するため、JICEアブダビ事務所（金森所長）との連携を一層強化する。円滑な事業推進において、現地情勢に精通したコーディネーターの役割は今後も必要不可欠である。

2) 持続的に展開するための工夫

①持続可能な財政基盤の確立と事業検討

企業からの寄付金を「有田市こども未来基金」として積み立て、継続的に活用できる仕組みを整えている。令和8年度以降の事業継続については、寄付予定（ENEOS等）や予算状況を鑑み、目的や募集対象の最適化を検討する。

②成果の発信と社会的理解の促進

ドバイ派遣に参加した生徒自身による活動報告や情報発信の場を設ける。本事業の意義や成果を学校関係者や市民へ広く周知し、地域全体で国際交流を支える機運を醸成する。

③教育委員会によるコーディネート機能の継続

学校現場と外部機関（GNS、関係企業、JICEアブダビ事務所等）との連携を円滑にするため、引き続き教育委員会が窓口となり、密なコミュニケーション体制を維持する。

(ア)中長期的な事業の在り方の再定義

令和9年度以降の取り組みについては、本事業の成果を検証した上で、他の国際交流事業との整合性を含め、市全体の国際教育の在り方として統合的に検討していく。